

---

# 彼女たちの一歩

まつちい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼女たちの一歩

### 【Nコード】

N5494P

### 【作者名】

まつちい

### 【あらすじ】

高校三年生 春。

周りは徐々に受験モードへ変化していく。

その中、まだバレエ部は夏の大会に向けて練習を続けている。

バレエ部のメンバーは六人。ぎりぎりだ。

誰が抜けることも、怠けることも許されない。

進路、受験、恋愛。

その荒波の中で、家族や自分自身とも戦っていかねばならない。かといって、そのどれからも逃げることは出来ないのだ。立ち向かおう。しかし、子供に何ができるのだ。

それでも、彼女達は精一杯戦った。その記録を、ここに残そう。

これを、すべての戦う高校生に捧ぐ。

【もちろんフィクションです】

## 1 プロローグ

### ー プロローグ

一面に真つ青な空が広がる。道を歩きながら空を見上げると、その視界には悠々と咲き誇った桜の花びらが入る。肌を撫でるように吹く風は、温かくて眠気を誘う。少なくとも日本にいる限り、人間が何をしなくとも四つの季節は巡る。元気がなくても眠っていても泣いていても変わることはない。梅雨という半ば中途半端な季節も仲間にいれてあげればその数は五つにもなる。世界のうちで、こんなにも季節を多く体験できる場所は、南国や極寒の地に比べれば恵まれている。季節が変わることで気分も変わる。しかし、すでに持っているものに満足をしていると、大抵それが有り難いことだとは気づかない。ふとした瞬間に、季節は次に移り変わっていて、さらに気が付いた時にはまた同じ季節がやってきているのだから。幸せを感じる暇もなく、人は日常の生活に忙殺されている。幾分余裕のある人間だと、季節を食らうことを趣味とする。つまり、季節の食べ物を味わい、スポーツに勤しむのだ。ただ、そのためには心身と金銭の余裕が必要になる。どこにでもいる高校三年生、伊藤千夏にはそのどちらの余裕もなかった。

人は歳を追う毎に一年が早く感じるようになるという。年齢を分母にした数が一年を体感するようになるというのは、あながち間違いではないだろう。小学生よりは中学生、中学生よりは高校生になつてからのほうが時間は早く過ぎている、気がする。これがもう十年、二十年経つたら……どうなってしまうのだ。そんなことを千夏は漠然と考えた。道に転がる石ころを蹴ると、溜め息を吐く。今でさえ早過ぎるほどののだ。それはよく言えば充実している、ということなのかもしれない。友達と笑い、部活をして、そこそ勉強に励む。それで今までは充分だった。しかし、千夏は満足していても周囲は待ってくれない。そう、季節が必ず廻るように。いや、季節

がきちんと巡るからこそ、待ってくれないのだ。

千夏には、恐怖の歳が始まるうとしていた。決して逃げることの出来ない、進路を選ぶという魔の時間が……。全てを飲み込む津波のようにやってくる。どうしても、気が重くなるのを堪えきれず、千夏は通りすぎる人間にも八つ当たりしそうになる気分を必死で押さえ込んだ。

「千夏っ！」

千夏は、突如背中に衝撃を受けて振り返ると、そこにいたのは早川香織だった。千夏が

所属するバレー部のメンバーだ。一年生の四月、初めての部活参加の日に出会った二人は、すぐに息統合した。喧嘩をすることもなく丸二年、ほとんど同じ時を過ごしてきた。すら

りと長い手足を持つ色白の香織とは対照的に、千夏は背も低く肌の色も黒い。そんな香織

に千夏は憧れていたが、嫉妬心は不思議とまったくなかった。それよりも、彼女の美しさ

に目が奪われるというほうが正しいだろう。スパイクを打つ時のジャンプする姿勢や、着

地した後自分の打ったボールがどこに決まったのかを追う視線の鋭さも、すべてが凛々

しいのだ。彼女が走ったコートの中には、自然と風が起こる感じがした。しかし、千夏が嫉

妬心を抱かないのは、なによりも香織が千夏 of 存在を認めていくれるというのが大きい。ほんの小さなことでも、香織は千夏の言葉に感嘆の声を漏らすことがある。それが、千

夏には嬉しかった。そんな色白の彼女は、今日も自分専用のバレーボールを、両手でしっ

かりと持っている。それをふざけて千夏の背中に当てたのは明白だったが、それでも込み

上がってくるのは笑いだった。

「もー。やめてよオ。今ね、考え事していたんだから」

千夏は、背中にボールのせいで汚れがついていないかを確認しようとしたが、首が回る

はずもない。何度も首を無理に捻っていると、香織がぺろつと舌を出して謝る。

「ごめんね。千夏の背中を見ていたら、スパイク打ちなくなっちゃって」

そう言つて、千夏の背中を軽く叩く。汚れはついていないだろうが、謝罪の意味がこもっているのだろう。さらつと謝ったが、香織なら本当にここでスパイクを打ちかねないと内心ぞつとする。すると、香織が千夏の顔を覗き込んで言った。

「それで？ 考えていたつて、何を？ こんな朝からよく頭が回るわね。お弁当のこと？」

二人が並んで歩くこの学校までの大通りは、この時間には生徒も少ない。たまに歩いている人たちも、ほとんどが駅まで向かうサラリーマンだ。今まで着込んでいたマフラーやコートを脱ぎ去った彼らは、この季節少しだけ颯爽として見える。

「そうそう。今日のお弁当は焼きそばなの……つて、違つて」

今時の女子高生より、若干長めのスカートを翻すと、千夏は空を仰いだ。ガードレール

に守られたこの歩道は、安全で気が抜ける。数センチ横の道には、朝から車が猛スピード

で走り抜けていく。そのせいで、二人の声も大きめだ。千夏が見上げた青い空の額に今度

は枝から落ちた桜の花びらがひとひら加わった。そのうちの一枚が、千夏の額に舞い降り

て来る。風がなくなるとも、花びらは散る。木は、花を付けたときは一瞬の誇りを得るだろう。しかし、しばらくすれば飽きてしまうのではないだろうか。自分を飾るだけのそれに嫌

気がさし、イメージチェンジを狙って花を散らす。そして人々がそれを見上げることで、

再び優越感を得る。千夏は、今の自分の気分を桜に馬鹿にされたような気さえした。何を

悩んでいるの、私はこんなに綺麗なのに。そう言われているようで、花びらを指で摘むと、

道へただ落とす。その花びらひとつでさえ、季節を焦っている気がした。もつと咲いて

いればいいのに……そう話しかけたくなる。隣を歩く香織は、手元のボールが汚れていな

いか確認することに精一杯で、そんな小さな出来事には気づかなかったようだ。長い足で、

しかし千夏の足取りと変わらぬ早さで、学校までの道のりをゆつくりと歩く。

「じゃあ、何よ？」

やっと香織が顔を上げた時、突風が吹き抜けた。それが、香織の顔にも挑戦的に向かう。

春は、時たまこんな風が吹く。地面の砂を巻き上げ、花びらを思い切り散らす。それでも

冬と違って暖かいそれは、心地よい。夏の湿気が来るまでの、ひとときの安らぎ。もう冬

が懐かしくはならない。春を迎え入れる気持でいっぱいになるのだ。ぶはつと息を吐き出

した香織は、悩みなどなさそうなほど清々しい笑顔だった。

「すっごい風！　ねえ、この通りさ、去年よりもいっぱい桜が咲いている気がしない？」

二人が歩いているここは、高校の通学路だ。大通りで交通量も多いが、電車通学で駅か

ら歩くほとんどの生徒がここを通り、八時頃には女子生徒で溢れかえる。しかし、早朝の

部活練習に参加するこの二人が通る時間には、生徒の姿など見かけることがない。今も、

千夏達のほんの五十メートル先に一人歩いている姿が見えるだけだ。それも、くるぶしま

でありそうなスカートの丈だ。香織が、風で舞った長い髪を右手で整えるのと同時に、千

夏はその短いショートカットの髪を左右に軽く振った。そうするだけで、いつでも髪型は

元通りだ。ドライヤーをして乾かすのも簡単だし、なにより走っていて邪魔にならない。その髪から、一枚の花びらが地面に落ちる。

その落ちた花びらを無意識にも踏まない

ように、千夏は大腿に足を開いた。そして桜にも気遣う自分が、情けなくて笑える。

「ねえ、こうして歩いているとき、向こうの方から津波が来る気がしない？」

千夏は顔を上げると、まっすぐに続く道を見て言った。このまっすぐ続く道は、千夏の

高校を通り過ぎた後も延々と続いている。どの地域に続いているのか知っていても、実際

に歩いたことはない。それだけで、その先で何が起きているのか分からない気がした。千夏は、時々こうした不思議なことを言ってしまう。考えていることが、つい口から漏

れてしまうのだ。千夏は冗談ではなく、真剣だ。しかし、共感を得られることはほとんど

ない。自分の頭の中には映像が広がっているのに、変っているね、の一言で片づけられて

しまう。親には、外で変なことを口走るなどまで言われた。それでも、香織は決して笑

わない。ボールを胸に抱え、少し考えるようにまっすぐ前を見た後、同じようにまじめに



返す。

「津波が？ 向こうから来るの？ こんな街に？」

広がる道の先に、海はない。言ってみれば、海は駅の反対側だ。それは千夏も分かって

いる。それでも、この道を歩いていると、たまに津波に襲われる気がするのだ。SF映画のワンシーンにあるように。マンションよりも高い波が、突如現れる。それから逃れる人間が一齐に自分のほうに走ってくるのだ。それでも次々に飲み込まれていく。その高い波の恐怖に驚きながらも、どこかその水の青さに見とれるのだ。

「うん。そう。ほら、空と地上の境界線があるでしょう？ ま、ほとんど車と建物で見えないけどさ。あそこからどんどん迫ってくるの。それで早く逃げられないの。どうする？」「どうするって。

うーん、大丈夫だよ。そんなことないから。でも、もしもあつたなら私は必死で泳ぐかどこかに逃げ込むかな。千夏は？ あ、こんにちはー」

香織は、千夏の回答を求めながら、通り沿いにある交番前に立つ警官に笑って挨拶をした。こういうことをさらっと出来るのも、香織の特権だと千夏は思う。警官も、慣れたような仕草で額に右手を当てて敬礼のポーズを取る。それに満足したように、香織は微笑んだ。千夏の答えを急かすように、ブレザーの袖を引っ張る。千夏は、揺すぶられる腕をそのままに、じっと道路を見つめた。こんな天気だからかもしれない。一日学校をサボって、どこまでも歩いていきなくなる。休日ではなく、あくまでも学校を休んで行くことに意義があるのだ。

「あたしは……、ただ立っていると思う」

「え？ 逃げないの？」

「香織さ、アントン・チエーホフの書いた『手帖』って読んだことある？」

千夏が、体操服しか入っていない軽い鞆を、腕から肩に掛け替えて言う。

「うっん。知らない。千夏、海外の本まで読むんだ」

「たまにね。でね、その人……ロシアの劇作家なのだけど。その本に書いているのよ。『ひよっとしたらこの宇宙は、何かの怪物の歯の中にあるのかもしれない』ってね」

「つまり、千夏は、その本の作者の考えが正しいと思うってこと？」

香織は、必死で理解しようとしているように、右手の人差し指をこめかみに当てた。胸にはボールを抱えているもおかしな姿だ。

「正しいかまでは分からない。違う、馬鹿みたいだって言う人の方がほとんどだと思う。でも、当たっているかもしれない。つまりね、」

香織が、とうとう呻き声を上げたので、千夏ははつきりと言う。

このきつい朝の練習が始まる貴重な時間に頭を悩ますほど、これは重要な問題ではないのだ。

「もしも、よ。それが正解だった場合。宇宙の中に地球がある。地球も歯の一部なのよ。人間なんて、歯の間に挟まる肉の筋みたいなもの。邪魔で気にはなるけど、歯を磨くまで取るのを我慢しようかくらいの些細なものなのよ。だから、定期的に怪獣が歯を磨くと、何かが起こる。地震もハリケーンも竜巻も。あれは地球が怒っているんじゃないって、怪獣が生活の一部を行っているだけなの」

「……結論は？」

「だから、ここで津波が来たとしてもそれは怪獣の涎くらいでしかないのよ。人間が、歯の間に挟まる一部である限り、逃げられないそうでしょう？ 歯磨きをしている間、考える？ あー今日は海苔が挟まっていた。肉が銀歯に詰まったって。考えないでしょう？ 人間なんてそれくらいちっぽけなもの。津波が来ても逃げられないのよ……」

千夏が言い終えると、合点がいったように香織がボールを叩いた。そして千夏を横目で眺める。

「千夏の話って面白いけど、抽象的なよね。まるでクイズを出されているみたいなの。大丈夫。本物の津波に襲われたら恐らく命は

ないけど、受験くらいじゃ死なないから」

並んで歩いていた二人の、千夏の足が止まる。それに気づいて、香織も止まり振り返った。香織は正論だ。こんなところに津波が来るわけもない。千夏の考えを笑わないが、同調することもない。ただ、訂正をするだけだ。妄想を中止する、と言っべきだろうか。千夏は、それでも前を見ては目を細めた。もしも、今ここに津波が来て、全てを飲み込んでくれたらどれだけ楽だろう、と。しばらくは、街の復興で忙しいだろうし、学校どころではなくなるだろう。そう考えていると、隣で香織が大きくため息を吐いた。

「千夏。逃げたいのも分かるけど、まずは頑張ろうよ。ね？」

頭脳明晰な彼女には、千夏の考えなどお見通しなのだ。この世界が今だけ無くなれば、受験などという面倒くさい問題から逃げられるのに。すると、今度はとんとんと音がした。

千夏が横を見ると、香織がバレーボールを地面に着いたのだ。バスケツトボールよりも軽くて白いそれは一旦地面に着くと、すぐに香織の手に吸い込まれるようにして戻った。香織はその感触を確かめるように十本の指でしつかりと包むと、次に空中に放りあげた。桜の花の近くまで行って、落ちてきたそれを額の前に構えた手で跳ね返す。オーバートスの練習だ。このオーバートスと、両腕を前方にまっすぐ伸ばして組むアンダートスは、バレーボールの基本だ。しかし、その基本を歩道とはいえ、一般道路を歩きながらやってのけるのだから遅い。いつしかこの光景にも違和感は無くなった。香織は電車の中でもボールを抱え、駅からのこの道（必ず交番の前を過ぎると）これを始める。それも肩に鞆をかけ、まして靴はローファーであることも、香織の技術の高さを物語る。車道にボールを出したことはないのだが、時々すれ違うサラリーマンが異様なものを見る目つきで香織を凝視することはあった。だが、千夏にとつてこれは生活の一部で、朝一番にこれを見ないと、なんだか一日が狂うのだ。ぽーん、ぽーんとボールが跳ね上がったては落ちるのを見て、千夏は頭が冴えてくるのを感じた。

「そつだよね、頑張るしかないよね」

そう言つて、香織の顔を見る。

ピピっ!!

突如、背後から車の騒音に交じつて聞こえた笛の音に驚いて、千夏が振り向くと、先程

香織が挨拶した警官が、胸にぶらさがった銀色の笛を口に咥えていた。両手を大きく頭上で振っている。しかし、それは友愛を示すものとはほど遠く、顔が怒りに満ちている。

「か……っ、香織っ!!」

千夏が、香織の顔を見上げる。春の陽光に眩しそうに目を細めた香織は、すぐにボール

を胸に納めた。まるでペットのように、そのボールは素直だ。香織は何事もなかったかの

ようにくると振りかえると、さわやかに一礼した。香織の髪の毛がふわりと揺れ、千夏

の頬をくすぐつて逃げた。なんと……図太い神経を持ち合わせているのだろう。

桜は、駅から歩道沿いにずっと並んでいる。電車通学をしている生徒は、最寄りの駅で

ある稲毛駅から学校まで、春はお花見をしながら通えるのだ。二人の通う高校は、県内屈指の進学校であり、公立で唯一の女子校である。社会に出てからも評判がいいらしく、創立百周年を過ぎててもなお、衰退することのない伝統ある高校だ。繁華街とまではいかなかった、そこそこ遊ぶ場所もある上に、交通の便も良い。部活動も盛んで、生徒同士の上下関係も悪くない。そんな話を前提に、毎年受験生は張り切つて校門をくぐるのだ。

千夏もそうであった。偶々倍率が低い年だったとはいえ、合格した時は安堵感で涙が溢れた。それから丸二年の月日、かたときも休むことなくこの道を通った。カラオケ屋の併設されるゲームセンターを過ぎ、交差点を渡り、ドーナッツ屋を偵察する。そこらには珍

しいほど近代的なガラス張りの図書館を通り、公園を過ぎると交番がある。ファミリーレストランのチェーン店からの匂いに鼻をひくつかせていると、すぐに校門が見えるのだ。

校門前にあるコンビニに立ち寄りなければ、無駄な小銭をはたくこともない。それがなかなか難しいのだが……。登校時間は、同じ道をまるで蟻が行列を組むように女子

生徒が進む。友達同士で歩き、スピードもそれぞれだ。笑っては右に傾き、じゃれては左に動く。従って、登校時刻の三十分前からは千夏の高校の制服一色に通りが埋まる。地元では、別名女子校通りと呼ばれるほど有名なのだ。

それだけ聞けばさも輝かしい道路の気がするが、実際はそうではない。生徒にとってとはとつもなく面倒な通りなのだ。そして三年生になったこの春、千夏にとってそれはあまりにも当たり前の光景になってしまっていた。そしてその原因が、今日も現れる。

「おいっ！ 伊藤千夏！ なんでそんなにスカートが短いんだ！」二人がコンビニへの誘惑を断ち切り校門に入ると、その陰から生徒指導の阿部が、はち

きれんばかりの腹を揺らしてひょっこり現れた。今日も白いシャツに赤い蝶ネクタイをし

ている。そう、この通りは教師の目が光っているのだ。時々あちこちの角に、教師は校則

を守らない生徒を見つけるために立っている。特にこの阿部は、生徒の前に不意に現れる

ことを特技としている。それをストレス発散や暇つぶしにしているのだと噂になるほどだ。こうして校門で現れるならまだマシで、時には店を出ると立っていたり、駅の改札を入

ろうとすると肩を叩かれたりする。これに驚いて悲鳴を上げようものなら、奴の思う壺だ。口の端をにんまり上げて喜ぶ顔が、千夏の瞳に映る。たいていこの時間は教師も登校中

なので、千夏も安心していた。千夏のスカート丈は、優に膝の上に

位置する。阿部からす

れば、あり得ない短さだろう。

「……直します」

千夏が、腹辺りで何重にも巻いている制服のスカートをくるくると落としていると、そ

れはすっぽりと膝を覆い隠す長さになった。一昔前の不良のようだが、と隣の香織が吹き出す。千夏がちらつと睨むのと、阿倍の怒声は同時だった。

「早川も！ スカートが短い上に、なんだ、その髪は！ お前はまた染めたのか？ お前

達は反省文だからな！ あ……、おいっ、ボールを持ってくるなど言っているだろう」

阿部が口を開いた途端、香織は一目散に走り出した。その背中に向かって叫ぶ阿部の声

はだんだんと大声になり、目の前にいた千夏の耳が裂けそうなほどだ。阿倍の前で、小さ

くなってスカートを下ろす自分に嫌気が差し、出遅れた千夏も後を追うように走りだす。阿部は、今度は千夏に向って怒鳴り始めたが、振り返る勇気はなかった。その顔を見れば、足が竦んでしまふに違いない。足元でスカートがバサバサと抗議の声を上げる。この

ままでは足に絡まって転んでしまふほどだ。校舎を通り抜け、体育館へ向かう角を曲がつ

た千夏は、いきなり目の前に現れた香織の姿を見て急ブレーキをかけた。彼女は、走った

のに息が乱れることもなく、塀に寄りかかって待っていた。彼女のスカートが、膝下に直

されることはない。

「ちよつとー！ 置いていかないでよ」

半ば泣きつくように、千夏が香織の肩に手を置き寄りかかる。走っ

たことよりも、怒り

の矛先を向けられたことで息が上がってしまう。部活の練習をする前から、どっと疲れてしまった。

「あいつ、怒っていた？」

対照的に、香織はけろっとしたものだ。千夏が、阿部の顔を思い出して真剣に頷いたのを見て、ただ小さく肩を竦めただけだった。そして小さな口を、さらに小さくすぼめる。

「反省文だつて。ロマン・ロランの言うとおり。生とは、休戦のいいひとつの戦いだね。はああ……」

「本当に千夏は文学少女だね。でも、何言っているの。戦いなんてまだこれからよ。早く行かなくちゃ！ 朝練、遅れるよ」

そう言つて歩き出した香織は、言葉とは裏腹に再びオーバートスをしながらだった。

校門を入り、校舎の裏側に体育館がある。そしてその脇に様々な部屋が集まる建物通称

「F1（エフワン）」が建っているのだ。名前の由来は定かではないが、一説によると一つのファミリーということらしい。つまり、共同住宅のようなものなのだ。一階から二階まで、全部で十個の部屋がある。体育館やグラウンドを使用する部活が一部屋ずつ割り振られている。茶色い壁の外観は古く、塗料もところどころ剥がれている。中に入ればコンクリートがむき出しで、家賃月額二万円ほどで住めそうな建物だ。火事を起こさないように火は使用出来ないが、共同のトイレとシャワーの個室が数個あるのでなかなか快適だ。しかし、その快適な空間を得るにも、一年以上の我慢が必要とされる。下級生は部屋に入れて貰えないのだ。一番上の学年になって初めてその楽園は引き継がれる。上級生がいる間、下級生は廊下にゴザを

敷き、その上に荷物を置き着替えを済ます。上級生が引退した直後の夏から、一年間しかその楽園にはいられないのだ。下級生の間は仕事も多い。上級生より早めに登校し、体育指導室からF1の鍵を貰う。鍵を開けたらすぐに着替え、体育館へ移動だ。体育館へ行ったら、今度は倉庫の鍵を開ける。体育館はほぼハーフコートで使われる。その組み合わせは決まっていて、バレーとバスケットが同時に行うのでボールが行き来出来ないように間を遮らなくてはならない。それを仕切るのが、巨大なカーテンのような網だ。右から左に引つ張るだけなので簡単だが、そのネットを準備して初めて、バレーコートの作成に入る。最初に床一面を雑巾がけする。端から端まで全てだ。二本の鉄のポールを倉庫から運び、穴にはめ込み立てる。その間を繋ぐようにネットを張る。それも緩んでいると、あとで多方面から大目玉を食らう。顧問は勿論、上級生、試合の時なら相手の学校からも非難されてしまう。その作業一つ一つが、簡単なようで実は面倒くさいものなのだ。それを全て、上級生が来る頃に全てを終わらせていないと、また怒られるのだから堪らない。

そして一年以上乗り越えてやっと、千夏と香織も楽園を手に入れた。それを手に入れた日、メンバー全員で争うように部室に走った。誰がどの位置に座るのかを決め、ジューズで乾杯した。そんなことを覚えていたのだろうか、と千夏はF1を見上げながら考えた。

体育館の前を二人が通ると、すでに新二年生となった後輩が、準備を終えているようだった。少なくとも彼女達に部室を明け渡す日は近い。後輩もそれが分かっている。指折り世代交代の日を待ち望んでいるかもしれない。しかし、まだ千夏達の天下だ。後輩が準備をしても焦らなくて平気なのが、先輩の特権だ。考えてみれば、小さな社会だ。上が言うことに下が従う。この世界は、そうして回っているのだ。権力には叶わない。戦国時代とは異なり、謀反も出来ない。

「千夏！ 香織！」

最初の呼びかけは少し離れているのに、香織の名はすぐ側に聞こ



えた。と、すぐに二人の脇に自転車が止められる。乗っているのは同じく、部活のメンバーの松吉美香だ。猛スピードで追いかけてきたようだ。母親のお下がりだというその自転車の籠は、前部分が脆くもへこんでいる。この前見た時はそんな傷などなかったはずだが、おつちよこちよいの美香のことだ。電柱にでも突っ込んだのだろうと考えて、千夏は小さく笑った。

「おはよ。美香」

香織が、まだトスを続けながら言う。美香のカジュアルな服装は、遠くから見てもすぐに見分けられる。制服の上に羽織ったパーカーの色は、今日は派手なオレンジだ。原色すぎて制服には似合わない気もするが、なぜか美香が着るとしっくり収まるのだ。いつごろからか、美香は派手なパーカーを着て登校するようになった。大きめのパーカーに、お団子にまとめた頭が彼女の澆刺さを表している。時々、身体をクネクネとタコのように動かしては、周りの笑いを誘う。その彼女も、自転車を降りた途端に高い声で騒ぎ始めた。

「ちよつと、香織！ さつき阿部に怒られたでしょー！ そのスカート短いつて。あたしが自転車を通った時、とばっちり食ったよ。パーカーは校則違反じゃないのに怒られた！」

香織は、それでもトスを止めることはない。そう、一言呟いただけで、部室にまっすぐ進んでいく。F1の入り口である鉄の扉を千夏が開けると、そこは人でいっぱいだった。反対側のコートを使用するバスケット部の部員が多いのも一つの原因だが、なによりも休日は時間によって使用する部活が異なる中、平日の朝の練習では一斉に全部活が活動をする。始める時間も寸分変わらず、終わる時間もほぼ同時だ。その分騒がしくなるのは当然のことだった。しかし、クラスが離れていると会えない友達とも話せるし、あわよくばおいしい情報を手に入れることもできる。それは、教師の教壇の上でおなををしたという笑い話や、他クラスでやった小テスト情報など数知れず。大人達の監視である視線から逃れられる、唯一であり最大の隠れ家とも言える。

千夏が扉を開けた瞬間、中に溜まっていた熱気と笑い声が、固まりとなって外へ飛び出してきた。それは朝の当り前の風景であり、理由もなく心弾む空気だ。バレー部の部室は、一番突き当たりにある。中の廊下も土足なので、三人は固まってそのまま人ごみをつ切る。あろうことか、香織はF1の中でもトスを続けている。練習心が旺盛だと言えはその通りだが、年中こうしてボールをトスしていると、千夏は彼女が何かに取り憑かれているのではないかと心配になる時もあるくらいだ。そしてもう一つ、あんなに長い間上を向き続けていて、首が痛くならないのかという疑問もあった。

「おはようございまーす」

この中は、全部活動の後輩含めて同じ住人だ。たとえ学年が違っても、毎日会うと一ヶ月もすれば顔と名前も一致するようになる。後輩が困っていれば、違う部活でも声をかけるし、大事な場面では怒ることもある。千夏達も、そうして育てられたのだ。それを代々素直に受け入れるのだから、質のいい生徒が多いのだろう。というよりも、いわゆる体育会系に合わないと分かるのは、運動よりも前にこの礼儀作法や上下の関わりだ。無理だと悟った者は、二か月待たずに大抵は辞めてしまうのだ。口々にかけられる挨拶に返事を返しながら、三人は廊下を進む。他の部活の後輩も、香織の歩きながら行つトスを見て、もう驚くことはない。F1の朝ではこれが普通なのだ。するりと香織を避けると、彼女たちは外へ飛び出していく。

「おっはよー」

三人の先頭にいた美香が、部室のドアを開ける。入口の鉄扉とは違い、それは一般の家庭の外に面した窓ガラスと同じ造りのドアだ。下半分は曇りガラスがはめられているが、上部分は廊下から中が丸見えになる。そのため、どの部活もその上半分が隠れるようにカーテンを内部に付けている。ただ、バレー部のそのカーテンがいつから付いているのかは誰も知らず、洗ったことがないというのも不気味な話だ。おそらく、想像しがたいほどの目に見えない汚れに塗れているはずだが、一切誰もそれを指摘しない。案外、女子校などそ

んなものである。女子校はとても小綺麗で清楚だというイメージを持つ男子高校生には、決して見せられない代物だ。

「おはよー。って、美香のパーカー今日も凄い！ 相変わらず派手ねー。それに香水、ちよつと強くなつてない？」

美香が、カーテンを捲つてその場で靴を脱ぐと、部室の中にいる者が声をかけた。住人たちが集まっているのだ。入つてすぐに靴を脱ぐスペースがあり、そこにはすでに三足が置かれていた。

「香水？ そんなことないって。いい匂いでしょ。若菜は敏感すぎるんだよ。ん？ 匂う？」

美香は鞆を床に放ると、五畳ほどの部屋の一番奥の定位置についた。その途中、声を掛

けてきた、荒山若菜の頭を軽く叩く。パーカーを脱ぐと、その匂いを嗅ぎながら後ろを歩

いてきた千夏に声を掛ける。

「若菜、正解。ちよつと美香の香水きついよ。美香が通ると数メートルは匂いが残っているもん。ひよつとしてマーキングでもしているつもり？」

千夏も靴を脱ぎ、部室に上がる。美香の隣に座ってから、靴下を部活用のものに履き替

えた。普段は学校指定の黒いハイソックスだが、今度は膝まであるバレー用の白いハイソ

ックスだ。赤い絨毯が敷かれている床は、カーテン同様まともに掃除をされたことがない。

素足で長時間座つていようものなら、その夜は必ず足が痒くなってしまう。

「あれ？ 香織は？」

若菜が姿の見えない香織を目で搜すと、彼女はカーテンの下から現れた。それも、膝建

ちでトスを続けている。ここまできると神業だ。メンバーにも呆れ顔が混じっている。

「九十五……、九十六……、九十七。ああっ！！」

靴を脱ぎながらのトスは、本人の意向には反して失敗に終わった。  
「もっつ！ あと三回だったのに。今日はついてないかもな」

意気消沈し始めた香織と、パーカーの匂いを嗅ぎ続ける美香に挟まれて、千夏は黙々とジャージに着替えていく。

「香織。そのスカートの長さだと捕まったでしょ？ 阿部、あたしが十五分前に校門過ぎ

た時もいたよ。いきなり目の前に飛び出して来て、自転車で轢きそうになったよ。生徒を

驚かすのもいいけど、滑稽で仕方ないよ」

千夏の前に胡座を掻いて座る秋田京子が、床に並べられたクツキを頼張りながら聞いた。

た。バレー部内で一番長身の彼女は、その体型と整った顔でモデルの仕事もこなしている。

常にお菓子が床に散乱しているこの、一番の原因であるくせに決して太ることがないのが不思議だ。周りが二の腕を見せ合つて小言をいうのを横目で眺めながら、京子はケーキをホールで平らげたりする。朝ご飯を食べてから来ているにも関わらず、朝練の前にはこうしてお菓子を食すのが日常となっている。

「おいしい！ 阿部を失う機会だったのに。……大体厳しすぎるのよ、この学校。何？ このスカート丈」

香織は京子を一瞥すると、自身のスカートを限界まで下ろした。くるぶし近くまであるスカートを見て、ため息が漏れる。

「違うでしょ。香織が逃げるから、怒られるんだよ！」

千夏がハーフパンツを穿きながら言うと、横から美香が割り込んでくる。

「違うよ。二人共いけないんだよ。あたしのパーカーまで怒られたんだから」

美香も、文句を言っている割には着替えを終えている。ハーフパンツもこの時期になれば寒さを感じない。

「なんでもいいけどさ、阿部、あれストレス溜まっているんじゃない？」

若菜が、膝にサポーターを装着しながら言った。ちょうど膝小僧の位置がすり切れて、中の綿が見えている。それだけ転んでいるのだ。若菜のその綿と、自分も同じように穴の開いたサポーターを見比べ、千夏はどうしてここまでバレーをしているのかを考えた。なんのためにあんなに転んでいるのだろうか。一度考え始めて答えのないループに引きずり込まれそうになったところを、メンバーの言葉で我に返る。

「そういえば、去年の進学率ってことん悪かったみたいじゃない。かわいい先輩多かったのにな」

京子の隣で綺麗に正座をして、鏡を見ながら目にコンタクトを入れている小笠原祥子が言った。のんびり屋の祥子は、一番乗りで部室へ来ても最後まで準備をしている。今日も、まだ着替えさえ済ませていない。そのゆったりとした動作は、千夏にも見習うべきところがあった。コートの中でも決して焦ることがない。人のミスを責めることもしない。戦闘意欲はあるのかと、時々聞きたくなることがある。それでも彼女なりに戦っているのは分かる。なにより、勝つことよりもメンバーの精神に気を遣うところはさすがだ。

「綺麗で合格率悪いって言うのが一番困るんだよね。だって、綺麗でも勉強出来れば文句は言われないわけでしょ？ おかげで下の学年の締め付けきつくなるっっちゃうの。嫌になる」

若菜は、いつもはつきりと物事を言う。嫌な物は嫌。腹が立てば全面に怒りを出す。それが、部内ではいいスパイスとなっているのも事実だ。

「だよね！ だからこのパーカーも怒られるの！ そんなに派手じゃないよね？」

千夏は、美香がそう言いながら絡めてくる腕をさりげなくかわした。一瞬にやっとなん

た美香が、自分のポケットに入れていたハンドタオルを手にとって

構えた。

「覚悟！」

千夏もそれを見て、反射的に手に持っていたタオルを構える。

「ういん！」

独特の効果音を口にして、美香がタオルを竹刀のように千夏に振り下ろす。それを、千

夏が、自分のタオルの両端を掴んで受け止める。タオルを小刀のように見立てた戦いだ。

その脇で、京子は未だお菓子に伸ばす手を緩めることはない。千夏と美香の戦いも、最近

では誰も止めることがない。春休みに二人で見に行ったアメリカのSF映画で、主人公が

使っていた剣の真似をするのが流行になっている。意外と激しいその動きに、二人の息が上がる。

「ほら！ 早く行かないと怒られるよ！」

最後にはとうとう噴火した若菜の一撃で、誰もが首を縮めた。京子は食べるのを止め、

香織はスカートの皺を伸ばすのを止めた。祥子はそそくさと着替えを済ませ、千夏と美香

もタオルをポケットに戻す。このメンバーで、こんなことを何日、いや何ヶ月繰り返して

きただろう。今しか出来ないから……。そんなことは考えていない。

ここが心地良い。誰

もがそれしか思っていない。

メンバーがF1を出ると、すでに他の部活は朝練を開始していた。

体育館からも、隣の

バスケット部が走る足音とかけ声が規則正しく聞こえてくる。

「あーあ。ヒゲ、いないといいね」

香織が体育館を見てため息を吐く。時間に遅れたら、後輩は何も言

わずとも顧問の怒り

を買う。小言どころか、余計な練習メニューが増えかねない。こうしてまた一日が始まる。部活が終わるのは夏だ。それまで受験勉強などやる暇はない。考えることは山ほどある

のに、悩む時間もないのだ。楽しい時間は早く過ぎるも、辛い時間はじわじわと浸食する。やはりこの一年だけは、千夏はゆっくりと過ぎていく気がした。

## 2 第一次戦争

入学式が無事に終わり、もう一度雨が降れば桜が全て散ってしまうと天気予報が告げた

頃。千夏が通う稲毛女子高校では、新入生歓迎会が行われようとしていた。文化祭同様、新入生歓迎会もこの学校の大事なイベントの一つだ。運動部は、夏休み直前に開催される総合体育大会まで部活はある。しかし、文化部はほぼこの新入生歓迎会の発表で活動終了となる。

参加するのは主に演劇部、吹奏楽部、ミュージカル部、他にも琴部や茶華道部である。普段目立って見せる場のない文化部、そして演劇部とミュージカル部は、ここが最後であり最大の見せ場なのだ。特にミュージカル部の気合いは一塩で、宝塚並の化粧の技と歌唱力を発揮する。バレエ部が使用する時、体育館の舞台上で練習している彼女たちの発声は、運動部より大きい声で歌う。そんなミュージカル部は、運動部にとっての最大の敵だった。せっかくバレエ部に入ろうと入部してきた新入生まで、ミュージカル部の演技に魅了されてしまうのだ。おかげで、上級生は見学に来る生徒までもを必死に追い回して、集めなければなくなる。確かに、ウェディングドレス同等の姿でスポットライトを浴びたいと思うのは仕方がないかもしれない。それに加えて、男役の三年生が綺麗ならばなおさら新入生が騒ぐのはお決まりの行事だ。千夏も、一年生の時に初めて一番前のパイプ椅子に座ってステージを見上げた時は、バレエのころなど一瞬頭から吹っ飛んだ。ミュージカル部に見学へも行った。今では、なぜバレエ部を選んだのかは覚えていない。しかし、千夏はこれでよかったと確信している。不満があるとすれば、自分たちもこの時期に部活を終えたいということだけだ。

「おい。伊藤」

そんな歓迎会が行われる体育館に向かう途中、千夏は廊下を歩いて



いると聞き慣れた声

に呼び止められた。しかし、振り返るのも面倒くさい。相手も内容も、もう言われなくて

も分かつている。隣を歩いていた美香は、名前を呼ばれなかったのを良いことに、そそく

さと先に消えて行く。その背中を恨めしい目で追いかける。あれでは、この間の香織を同

じではないかと顔をしかめた。

「おい！ 伊藤！こっちへ来い！」

仕方なく肩を落として振りかえると、案の定そこにいたのは腹の出た阿部だった。得意

そうに蝶ネクタイを整える。大きな鼻をひくつかせているのは、奴の癖だ。まるで怒る材料となる獲物を、匂いで見つけているようだ。周りの生徒が、自分は関わりたくないとはかりに千夏の脇を通り過ぎていく。その中に、京子の姿もあった。祥子と並んで歩いていたが、その手にはしっかりとジャムパンが握られている。京子の方が校則違反だ。千夏が文句を言うように、唇を尖らせて京子に視線を投げて、阿部の獲物はすでに決まったらしい。一切他の人間を見ようとはしない。

「すいません」

阿部が怒る前に、千夏が頭を下げる。どうしても、身体がこの男を拒否してしまう。早

くこの場から立ち去りたかった。周りにどう思われるからとか、恥ずかしいからとかでは

ない。胃がきゅつと悲鳴を上げるほど、嫌悪感が体中を走るのだ。

しかし、そんなに世の中は甘くはないようだ。

「なんだ。何が悪いんだ？ 言ってみろ」

千夏は頭を下げたまま、顔だけを上に向ける。上目づかいを通り越して、ほぼ白目にな

ってしまいそうだ。それでも千夏は、自分の姿を復習してみた。どこが悪いというのだ。

スカートは限界まで下げている。髪の毛も香織と違って染めていないし、短いので結びよ

うもない。ネクタイも緩んでいない。マニキュアだって、部内で禁止されておりしていな

い。他に思い当たることなどない。ほぼ白目になりそうな状態でもう一度、阿部を見上げ

る。香織のように堂々と出来たら……いつもそう思う。しかし、実際に行動に移せないで

終わるのだ。頭の中で想像して、ああ出来たらどんなに気持ちがいだらうと考えるだけ。

結局、腹に一物を抱えたまま。

「さあ……」

無意識に口から飛び出した言葉に、千夏はすぐに後悔した。

「校章だっ！」

やはりミスは犯していた。千夏が自分の胸元を見ると、そこにあるはずの校章バッジが

消えている。冬服ならばブレザー、夏服ならベストの胸元に付けることが義務づけられて

いる。自分が間違っていたにも関わらず、反抗心から言い返した。それが今度は恐怖へと

形を変えた。右手で、あるはずのポイントを押さえ、思い切り首を横に振る。阿倍の睨み

つけてくる瞳を、もう見上げることは出来ない。ただ何度も何度も首を振る。言葉はすで

に消えてしまった。阿部は、何も言わずに無言の圧力をかけてくる。電気を飛ばして攻撃

してきているのではないかと思うほど、脳天が痺れてきた。このまま許して貰えるのだろ

うか。一瞬過ぎたその考えも、すぐにうち消される。

「反省文だな」

そう言っただけで立ち去る阿倍の姿を、最早千夏は呆然と見つめることしかできなかった。反

省文はA四の紙一枚だ。どうしてその行動を取ってしまったのか、理由と次回改善策につ

いて述べなければならない。教師陣は、それが大学に入ってからレポートの練習にもな

ると言う。一行少ないだけでもやり直した。しかし、それでは大学に行かない者達にとつ

てなんの練習になるのだ、と千夏は思う。大学へ行くことを前提として学校全体は回って

いるのに、今を楽しめ、学べと言う。どちらが正しいのか何が悪いのか。それを決めるも、

ここにいる限りは教師なのだ。

千夏が人混みに紛れながら体育館前に移動していくと、そこにいたのはジャムパンを持

っていた京子の姿だった。今度の教師は阿部ではなく、バレー部顧問の通称・ヒゲだった。五十前後であろうこの男は、公立高校では珍しく十年もこの学校に赴任している。鼻の

下に有意義に伸びた髭は、いつも誇らしげに右と左へ器用に分かれている。髭の手には、

京子のパンが握られている。京子はそれを恨めしそうに見ていたが、千夏の姿に気づくと、

瞬時に泣きそうな顔へと変化した。おそらく京子も反省文だ。さっきのお返しだとばかり

に、千夏は含み笑いを残して京子の脇を素通りする。

体育館の中は、まだ春だというのにむっとした暑さで覆われていた。新入生に対しての

祝辞や案内は、すでに入学式で済ませてある。この新入生歓迎会の

内容は九十五パーセン

トが部活の関係だ。席も唯一自由に座れる時間であり、バレー部のメンバーも当たり前の

ように一番後ろの列に固まっていた。千夏の姿を見かけた若菜が手を振っているのが見え

た。窓も全てが閉じられ、暗幕のカーテンが引かれているのでその中はほぼ真っ暗だ。今

だけ、友達を捜すことや移動のために半分ほど電気が付けられている。若菜の隣で笑って

いる美香に向かって唇を尖らせながら近寄ると、千夏はその隣の空席に腰掛けた。

「まあた怒られていたんだって？ 千夏」

若菜が、美香の隣から声を掛けた。その声に心配の色はなく、呆れを含んでいたのに反

論したくなる。

「だって！ あたしは悪くないのに。色んなことに細かすぎるんだよ、あいつ。美香は逃

げるし」

当のその美香は、両手で耳を塞いで聞こえない振りだ。その姿を見て、一瞬吹き出しそ

うになる。美香の頬を軽く抓っていると、千夏の前の席に座っていた人物が振り返った。

「千夏さ。なんかしたんじゃないの？ 絶対阿部に睨まれているよ」茶色の長い髪が、カーテンの隙間からうつすら入る光で輝いている。

「香織……。ねえ、ちゃんとこの間の反省文書いた？」

当たり前でしょ、とばかりに香織は肩を竦めた。上手くこなしている彼女を見て、また

胃がきゅっと縮む。ため息が漏れた。

「そつえば、京子が体育館の外にいた？」

香織の隣に座る、祥子も振り返る。こうしてバレー部で固まる時、

大体三人ずつ二列で

並ぶことにしている。そうすれば、六人で一列に並ぶよりみんなで顔を見て話せるからだ。

「ああ。なんか入り口のところでヒゲに捕まっていたよ。ジャムパン、あの子なんで持ってたいの？　しかもあんな分かりやすくさ」

千夏が言うと、ふふふ、と祥子は笑った。その間延びした笑い方に、自分まで笑みが漏

れる。何何？と聞くと祥子が答えた。

「この歓迎会、案外長いでしょう？　途中でお腹がなると恥ずかしいから、鳴りそうになつたら食べるんだってー」

京子らしいではないか。京子も怒られているのだから、よしとするか。この敷地の中で

は、怒られて初めて同罪なのだ。

「でも、そんなにお腹が減るのも凄いよね。朝練の前にお菓子食べてさ、休み時間の度にお弁当つまむんでしょう？　お昼には購買でまたパンを買って、夕方

の部活の前にまたお菓子を買いにコンビニに行くじゃない。それで、部活終わって一日

の残りのお菓子を平らげる。家へ帰って、ちゃんと夕飯食べるっていうんだから驚きよ」

若菜が、先程千夏に対してのと全く同じ口調で言った。片手を使って京子の食事の回数を数えている。

「うっん、それだけじゃないよ。寝る前にも少し食べるって言うていたよ」

香織が、鋭く指摘する。若菜は、口をあんぐりあけながら指を一本増やした。

「ひえー。それで暇があればモデルだもんない。羨ましいっ！」

美香はそう言いながらブレザーのポケットから小瓶に入れた香水を取り出し、手首に吹きかけた。シュツと小さな音がしたあと、暗がりに霧が舞う。すぐに鼻を甘い匂いが掠めた。

「美香。こんな密閉空間ではやめてよ。……まあ、七月の京子の誕生日にはとりあえず

ありったけの食べ物をおあげようよ。そうすれば、あんな風にジャムパン持ってわざわざヒ

ゲに怒られなくて済むよ」

香織が言くと、隣で祥子が再びふふふ、と笑みを漏らした。

「あたしが思うに、お腹の問題だけじゃないと思うな」

「え？ 何、どういうこと？」

千夏が祥子に身を乗り出した時だった。千夏の頭に重みが加わった。「何の話をしているの？」

その声に、千夏が首を上に向けると、そこにはパンを取り返した京子の姿があった。顎

を千夏の頭に乗せたようだ。先程見せた泣き顔は、どうやらその場限りのものだったらしい。

笑顔でその袋を破こうとしている。

「あ、なんだ。取り返せたんだ」

千夏が京子の手にとったパンを指さすと同時に、その袋は破かれた。空気の破裂音で、

前に座っていた数人が一瞬振り返る。京子は、前の列にいる祥子の隣に座ると、ジャムを

たっぷりとお腹に入れて膨らんだそれにかぶりついた。手でちぎって食べるような上品さ

はない。しかし長い足を組むと、それだけで様になって見えた。

「ヒゲがね、すぐに食べちゃえてさ。すぐだと意味ないんだけどな」

「えー！ 反省文は？」

京子の全く罪の意識のない言葉に、千夏が食いついた。

「うつん。書かなくていいって。で、何の話をしていたの？」

「そんな。…… オスカー・ワイルドによれば、世界はひどい配役の舞台だつて話をしていたのよ。」

千夏は、自分だけが書くことになったことで、一旦忘れたはずの怒りが再燃してきた。

誰もが自分だけに厳しくしている気がしてしまう。しかも、よくよく思い出せば、校章を

はずしたのはおそらく母親なのだ。千夏は、悔しくて両足で床をばたばた蹴った。

「あー、千夏うるさい！ 美香！ 香水臭い！」

若菜がまた文句を言う。

「世界はひどい配役って今からの舞台のこと？ 千夏の文学世界のこと？」

口をモゴモゴさせながら京子が言う。

「後半の方」

千夏が黙っていると、香織がすかさず答える。なぜか腑に落ちない気持ちを抱え周りを見る。校則に対して文句を言っている者、これからの出し物にすでに興奮している者。隣同士の席でじゃれ合う者や、眠っている者までいる。顔の上にタオルをかけていること自体、この会に参加する気がないのは明白である。しかし視界の隅では、数人が参考書に目を落としているのを見逃さなかった。こういうところで差が付くのだろうか……。ふと過ぎった考えの怖さに千夏はそれを振り払うように頭を小さく振った。しかし、千夏はただ部活のメンバーと楽しく絡んでいることが無性に不安で仕方がなかった。そして、静かに電気は消された。

「あー。今日は楽しかったね」

春とはいえ、夜になるとまだ少しだけ肌寒い。いくらタオルで汗を拭き取っても、風が吹くと特に背中がひんやりする。このせいで風邪を引くこともあるくらいだ。部活が終わり、駅までの道を千夏は香織と二人並んで歩いてた。いつもより早い時間に部活は終わったので、同じ時間の電車に乗るには歩くスピードもゆっくりで大丈夫だ。余裕があるからといってどこかの店に寄って買い食いをする、その電車を逃す恐れがあるので、まっすぐ駅に向かうのが二人の中で暗黙の了解となっている。

「うん。でも見た？ A組の平野さん。あんな暗い体育館の中で、ずっと参考書を見ていたんだよ」

今日行われた新入生歓迎会は大盛況だった。バレー部は観覧する側なので楽だったが、いつのまにか夢中になり私語をすることもなかった。特にミュージカル部は圧巻で、当分千夏達は新入部員集めるに走り回る日々を送るはめになるだろう。それでも、普段座っている机と椅子から離れる平日を送れるというのは、浮き足立つものだった。普段眠くなる時間も、あつという間に過ぎていく。それを好む者と好まない者。二通り生まれるのも仕方のないことだ。香織の言葉に千夏も頷く。

「見たよ。あの子いつもそうじゃない？ せっかく勉強しなくていい日なのに。だからあんな虫眼鏡みたいに厚い眼鏡しているんだよ」千夏が、自分の目の回りに親指と人差し指で眼鏡に似せた輪っかを作る。朝は、ほとんどオーバートスをして歩く香織も、部活後にそんな気力はないようだ。帰る時間も常に真っ暗だ。街灯の明かりだけでボールを追うよりも、おしゃべりに花を咲かせた方が得である。

「でもさー。文化部は、これでみんな終わりなんだよね」

ふと、千夏が放った言葉で沈黙が流れた。今日で学年のほぼ三分の二は部活を終えることになるだろう。残り三分の一が部活を続けても、ほとんどが四月には大会を済ませるのが通例だ。最後まで残



るのは、バスケ部とバレエ部。こんな事実を、入部するときには考えたこともなかった。もちろん上級生が言うわけがない。千夏達も、ただでさえ文化部に取られがちな新入生を確保するために、いいことしか言わないのだ。暗闇とともに、妙な圧迫感が訪れる。受験勉強に励めという教師。上がらない成績。知らぬ間に過ぎていく日々。半年後のことを考えるだけで、吐き気がしそうだ。進路なんて、誰も教えてはくれない。自分で選ぶしかないのだ。正解もないのにどうやって選べというのだ。間違ったら、失敗したらと考えるだけで怖くなる。なぜ怖いのだろうか。親を悲しませる。教師の冷たい視線に合う。違うだろう。そこで人生が終わってしまう錯覚に捕らわれるのだ。そして、自分のふがいなさを知るのが怖いのだ。いきなり学年が上がったからと言って、将来何をするかなど決められる訳がないではないか。今でさえ、想像するだけで膝が震える。

「ねえ、あたしの後ろに何かいない？ 膝らへん」

おかしなその沈黙を壊すように、千夏が言った。一瞬顔をしかめた香織も、ボールを右手で抱えると、くると回って千夏の後ろを確かめた。膝を曲げてかがむ。じつとその位置を見つめた後、千夏に向き直って言った。

「何もないよ？ なんで？」

香織は、素早く周囲にも目を走らせる。ここは大通りとはいえ、女子生徒が多いことが災いして不審者は頻繁に出るようだ。香織がボールを構える。彼女なら誰かに向かつてその場ですぐスパイクを打つことくらい厭わないだろう。

「ううん。なんかね。膝ががくがくするの。もしかしたら、何かが膝を掴んで無理矢理動かしているのかと思って」

千夏の言葉を聞いた香織は、一瞬目を見開くと、すぐに大きな声を上げて笑った。冗談だと分かったのだ。

「何かって。膝を触る奴がいたら間違いなく変態だよ。それにすぐ気づくって！」

「そうかなあ？」

千夏は、想像以上に香織が笑ってくれたことに安心した。空気が元のように柔らかく和む。

「ねえ、たとえば。膝のところにいたとしたら何だと思う？」

香織がそう言った時、稲毛駅が見えてきた。この時間になると、背広姿のサラリーマンが酔って駅をうろついている。

「そうだなあ。たとえばね、うさぎ。お腹を空かせたうさぎとか。この靴下ら辺を噛んだりして、つぶらな瞳で見上げてくるの。あー絶対なんか買ってあげちゃうな」

「ふーん。他には？」

香織は、本当にうさぎを探すように、辺りに視線を走らせる。

「うーん。怖いけど、おじさんの幽霊とか。おねーちゃん、助けてくれ……とかいって膝にしがみついてくるの。髪がほとんどなくて顔もしわくちゃで、目も飛び出しているの。口から血とか垂らしながら……」

「あー！ いい、いい！ もう言わなくていい！」

香織は怖い話が苦手だ。しかし、苦手なだけで嫌いなわけではないと千夏は信じている。

学校で合宿をする、一番に肝試しをやらうと言いだ始めるのも香織だ。そしていつの間にか姿を消してしまう。

「もー。今日の夜寝られないかも……。いないよね？ 本当に」千夏に靈感などあるはずがない。しかし、責任は取るべきだと思った。これで眠れない

と、明日の朝一番に反撃にあうはずだ。

「うん、いない」

そう言っていると、若干香織も落ち着きを取り戻したようだ。ほっと息を

吐き、長い髪を撫で

つけた。部活の時には一本に束ねているその髪には、朝にはない結んだ跡が残っている。

それが彼女に言わせると、鼻毛が出ているより気になるものらしい。駅に入ると、同じ制服を着た女子が、集団で笑いながら千夏達を追い越していった。部

活だったのだろうが、見たことの無い顔だ。駅では、夜も同じ制服を見ることは少ない。

運動部は他の生徒より時間がずれている上に、自転車通学の割合が高いのだ。改札口を

入り、エスカレーターを昇る。彼女達と千夏は同じ制服を着ているのに、見た目では同じ高校とは分らないほどの差だ。彼女達が二年生なのはネクタイの色で分かる。学年が上がる毎に変わるそれは、千夏達は最後の青を付けている。彼女達は赤だ。帰りは、検査をされることもないので、千夏達バレー部は思い切り今時の女子高生に変身する。流行の靴下に履き替え、スカートの裾を短くする。香織は、電車に乗るというだけで軽く化粧をするときまであるほどだ。

電車で恥ずかしい思いをしたくない、という気持ちは千夏にも理解できた。学校にいるとその世界に染まってしまう。女子校ゆえに、それが居心地よく感じられる時も多々ある。しかし、それだけでは外の世界に向かっていけはしない。この世代だからこそ、周りから遅れを取る、それだけで恥ずかしいことだった。一定の位置を保たなければならぬ。それがプライドであり、羞恥心だった。それなのに、前を歩く後輩は、スカートも学校にいるときと同じ長さなのだ。膝下三十センチはあるだろうか。あんなもので歩いていて恥ずかしくないのかと聞きたくなってしまう。彼女たちを見て、自分たちまでださく見えてしまいそうだ。案の定、ホームに上がった途端、同じ駅を使用している他の学校の女子生徒が後輩を指さして笑っている。そのあとに続いた千夏達にも視線を投げてきた。自分たちの高校は好きだ。しかし、それと今は別問題だ。恥ずかしいという感

情も、千夏には劣等感を巻き起こすストレスでしかなかった。香織も気づいたようだ。まっすぐに前を見ながら、小声で言った。

「やっぱり……なんとなく最悪だね」

しかし、香織の声音にはどこか客観的な響きがあった。本当に今の状況を悲しんでいる訳ではなく、他人を哀れんでいるような感じ。『うちの高校ださいからね。何かもが阿倍のせいよ。でも、こんなときはシェイクスピアの言葉を思い出すのよ。今が最悪の状態だと思える間は、まだ最悪の状態ではないってね』

千夏が言うと、香織がふっと頬を緩ませた。他校の女子生徒に挑戦するように、ボールを地面につく。しかし、それも駅に電車を知らせるアナウンスが流れ、駅員がやって来るのを見ると手を止めた。再びボールを胸に抱え、香織が聞く。

「千夏はさ、なりたいものとかあるの？」

歓迎会の間中、千夏はそればかり考えていたのだ。最近では、教師がホームルームや授業の合間に自分の体験談を語る。どれも、誇らしげに。それを羨ましく思う一方で、ばからしくもなる。教師になっているのだから、成功者の話に決まっているのだ。どれだけ安定しているかの問題ではなく、社会的地位を守っているということだ。千夏はその話を聞く度に無意味に思えた。成功者の話だけを聞いていて、いざ失敗した時にどうすればいいのだろう。それならば、失敗した時の対処法を伝授して欲しかった。何事も心構えが必要だし、周りに同じ考えのものはいないようだった。教師の話をメモにしたり、熱心な生徒は同じ大学への進学も希望した。千夏は分からなかった。自分は何をしたいのだろう。どう進むべきなのだろう。どんな価値があるのだろう。香織の言った言葉に、思わず全てを見透かされていたようで驚く。瞬きを繰り返しながら、首を横に振った。

「ううん。特にないから困っちゃうんだよね」

答えた瞬間、サラリーマンらしき集団がホームに駆け上がってきた。十人ほどのその集団は、電車が来ていないことに喜びの歓声を

上げる。彼らも酔っているようだ。しかし、少なくとも、自分の進むべき道をすでに見つけている人間達だ。迷っているのかもしれない。満足はしていないかもしれない。それでも、踏み出している大人だ。

「そっか。じゃあさ、前から思っていたんだけど。そういう空想癖っていうか……。あ、勿論いい意味でね。そういう文学的な力を伸ばせる大学に進んだら面白いと思うよ」

香織は、いつも千夏のいうことを聞いてくれる。千夏は、自分で分析するよりも、香織のほうが自分を知っているような感覚に捕らわれた。

「そうなのかな。自分でも何がしたいのか、向いているのか分からなくて。でも、考えてみるよ」

千夏が言うのと同時に、ホームに電車が滑り込んできた。その勢いで、風が巻き起こる。結局はいつもの電車である。香織はここから東京方面へ上り、千夏は千葉方面へと下る。電車の中から出てきた人が、ちらっと香織に目を遣るのを千夏は見た。彼女がボールを持っているからではない。それだけ、香織は一目を引くのだ。香織を見た人物が、自分を見ないことに千夏は以前から焦燥感が起こった。時たま五人に一人ほどが千夏を見たとしても、それは香織と比べる値踏み視線でしかないのだ。卑屈な感情が沸き上がるのをぐっと堪えると、千夏はもう一度大きく頷いた。

「ありがと。また明日ね！」

逃げるようにして電車に飛び乗りホームを振り返ると、香織は手を振っている。同じよ

うに振り返し、開いている座席に座るとすぐに向かいにも電車がやって来た。人混みに紛

れ、香織の姿が見えなくなる。もう一度その姿を見ることなく、千夏の電車は静かにホー

ムを発車した。髪を撫でると、千夏にはどっと疲れが押し寄せた。この快速電車で三十分。

しばらくは寝ることに決める。香織の顔と先ほどのアドバイスが脳裏に蘇った。まだ進

路など考えていない。その前に勉強も出来ていない。スタートラインにたつてもいないのに、方向を決めることなど可能なのだろうか……あの子は、なりたいものがあるのかな。その答えを探せぬまま、千夏は心地よい揺れとともに、眠りについた。

千夏が家に着くと、すでに家族は食事を終えたところだった。玄関のドアを開けた時から、カレーの匂いが鼻をくすぐった。京子と同じように、たとえ帰りに買い食いをしても夕飯は食べられるだろう。しかし、同じように太らないわけではない。よって我慢して帰ってくると、家の台所に座る時には飢え死にしそうなほど空腹なのだ。今日も玄関で靴を脱ぎリビングへ行くと、食事を終えた父親がソファで新聞を読んでいた。母親は食器を洗っている。

「ただいま」

その背中に声を掛けると、母親は顔だけ振り返って言った。

「遅かったわね。早く食べちゃいなさい」

「うん。カレーだ。チーズ入れて」

鞆を床に放り投げ、制服のまま椅子に座る。どうせすぐにお風呂に入るので、この方が

効率がいいのだ。テーブルに置いてあるスプーンを持ち、ご飯が出てくるのをじっと待つ。

「なんだお前、部活はいつまでやっているんだ？」

背中から聞こえたその声に、千夏は聞こえない振りをした。今春高校を卒業した一つ上

の兄は、驚くほどの秀才だった。高卒の父、短大卒の母から生まれたとは思えないほどの

その出来映えに、両親は躍起になって英才教育をした。それが間違っていたとは思わない。

しかし、千夏は自分がどこにでもいる標準の子供だと思っている。

しかし、両親の中で  
は兄も千夏も子供なのだ。子供、イコール同じという考えだ。兄は  
自分たちの右の肺、千  
夏は左の肺、そんな感じ。代わりも効かないし、大事なもの。それ  
でいて、二つとも同じ  
動きをして当たり前だと思っている節がある。いつからか、千夏は  
そんな父親と距離を置  
くようになった。

父親の方からこうして声を掛けては来るが、返答をしなければ再び  
同じ事を聞かれるこ  
とはない。それで良かった。千夏なりの小さな主張だったのだ。兄  
と自分は別々なのだ、  
と。兄は決して反抗もしないし、聞かれたことに忠実に答える。そ  
れが邪魔でさえあった。

なぜなら、千夏が両親に返事をしないと兄が怒るのだ。そんな兄も  
大学近くの下宿するた  
め、この家を出ていった。これからは自由にテレビを見られる。文  
句を言わないだろう  
と喜んだが、その時までには考えてもいなかったのだ。これからは、  
両親の目が自分だけに  
集中するのだということを。両親の目はある意味では広がり、一方  
では狭まった。兄を通

して大きな広い世界を見る夢を抱き、目の前の千夏に今度は焦点を  
定めたのだ。家族全体  
の歯車は、違う回り方を始めた。しかし、個々の関連性は変わらな  
いと思っていたのだ。

それも甘かったようだ。  
今日も同じように父親はもう何も聞いてこないと思った。しかし、  
母親が意味ありげに

千夏の後方へ視線を投げたのだ。それに気づいたが、振り返ること

などしない。

「おかーさん、あたしの制服いじったでしょ」

目の前に出された湯気の上がるカレーをスプーンですくいながら、千夏は言った。テーブルの下では、右足の親指を器用に使い、左足の靴下を脱がせる。くるくると丸まったそれが床に落ちた。次に反対もやる。靴を履いて蒸れていた足が、呪縛を取り払われて爽快感に浸る。固まったその指を、順番に曲げて骨をならす。行儀がいいとは言えないが、気持ちがいいのだ。床に落ちた靴下を、千夏は廊下へ向かって勢いよく蹴飛ばした。それは吹っ飛んでばらばらな位置に落ち着いたが、それでも見事な空中飛行だった。軽くそれらを一瞥すると、カレーをまた一口含む。

「いじったって……。アイロンをかけたのよ。千夏、あなた学校でブレザーをどう置いているの。背中が皺になっちゃっていたじゃない」

母親は、洗った食器を今度は布巾で拭き始めた。そして、渋い顔をしたかと思うと、汚い靴下を拾いに廊下へ行く。戻ってくると一旦手を洗い、今度は冷蔵庫からサラダを出してくれた。それを、同じスプーンでつつきながら、千夏は声を荒げた。

「もー！ 校章取ったでしょー！ 今日生徒指導の阿部に怒られたんだからねー」

思い出した怒りを込めて、スプーンでサラダの皿の端を叩く。レタスの上に乗っていた小エビが、逃げるようにテーブルの上に跳ねた。それを手で拾い、口に放り込む。

「あら、付けなかったかしら。ごめんなさいね」

首を傾げてとぼけるような仕草をとったのが、千夏の癢に障った。スプーンをテーブルの上に放り投げる。今度は両手でテーブルを叩いた。ここまですることは初めてだったが、じっと座って話していると、発狂しそうなほどに苛々した。とにかく、ぶつける相手が欲しかったのだ。

「もう！ 勝手に触らないでよ！ 阿部に怒られるのは、あたしな



んだから。やるなら最後まで確認してよ！」

千夏の怒りを受け取った母親も負けてはいない。皿を両手で持ったまま立ち止まった。しかし千夏と異なるのは、その声はどこまでも冷静だ。意識的に怒りを静めているのだ。それが千夏の言葉をより過激にさせた。

「それなら、あのシワシワなブレザーで学校へ行くの？ 電車に乗るの？ みっともない。触られたくないのだったら、自分で言われる前にやりなさい」

「なにそれ！ 頼んでないのに勝手にやっておいてその言いぐさ！ 頭に来た！ もういい……。二度と触らないで！」

千夏は半ば叫びながら皿を持ち、口にそのまま付けてカレーを流し込む。……これはいつものことだ。言い合いをしても、しばらくすればお互い……。少なくとも千夏のほうはそのことを忘れ、また綺麗に整えられたブレザーを着て学校へ行くのだ。何を言っても家なら許される、そんな安心感が千夏にはあった。

「……千夏。部活は、いつまで、やるんだ」

先ほどよりもゆっくりと、しかし少しだけ大きくなった声で父親は言う。千夏がやっと振り返ると、父親は新聞から顔を出し、まっすぐに彼女の背中を見ていた。こんなことは初めてだ。眼鏡の奥で光る目に真剣さを感じたが、部活がいつ終わるかなど母親が知っている。あとで母親に聞いてくれ、とばかりに千夏は無言でテーブルに向き直った。サラダに乗った最後のトマトに手を伸ばした時だった。

「父親が聞いているのになんで答えない！」

家が揺れた……。気がした。爆音がリビングに響き、一瞬、確かに身体が浮いたのだ。それが驚いて自ら飛び上がったのかは、千夏にも分からなかった。ただもう一度、そろりとリビングを振り返ると、そこには顔を真っ赤にして立ち上がっている父親の姿があった。

部活を終え、外に出た時とは別の意味で背筋が冷えた。飲み込んだばかりのカレーが逆流してきそうだ。慌てて喉をぐっと閉じてそ

れを押し戻すと、千夏は小さく咳払いをした。「おいっ！ 聞いているのか！」

今度は、確かに揺れた。間違いない。千夏は、思わずリビングの電気を見上げた。部屋の中央、テーブルの真上にぶら下がる花の形をした洒落た電気の傘が微かに揺れている。改めて、ぶるっと身体が震える。

「お父さんっ」

母親が止めに入ろうとしたが、父親は最早制御不能だ。一直線に千夏に向かってくると、その顔に新聞を投げつけた。千夏は自分の顔を庇ったが、新聞の先が鼻に刺さった。

「お前は、帰ってきて、何をした？　すぐそこに座り、靴下を放り投げ、ただただ飯を食べるのか！」

父親は、少しずつ顔まで近づけてくる。一言言葉を発する度に、頬や額に唾が飛んで来たが拭う余裕はなかった。父親は叫ぶだけでも足りないのか、もう一度手に取った新聞を床に投げつけ、側に置かれていた雑誌をテーブルに叩きつけた。カレーの皿にそれが当たり、皿が吹っ飛んだ。殴られる……本当にそう思った。身体が縮こまる。しかし、父親の声は、今度は押し殺したように低く小さかった。

「それで、聞かれたことにも答えられないのか。校章がなくて怒られただと？　玄関を出る前に、自分で確かめる。アイロンくらいかける。弁当も作らず、食器も洗わず、何をしているんだ」

「ごめんなさい……。そう謝るべきなのに、千夏の口からはその一言がどうしても出てこない。開いた口が塞がらないとは言うけれど、なぜ誰も閉まった口が開かないとは使わないのだろうか。父親の怒りの形相を見上げ、そんなことをぼんやり考える。千夏の口は、まさに開くことを怯えていた。父親の視線を避けるように思い切り顎を引き、胸の辺りを凝視した。頭なら殴られてもいい。そんな決意を込めていた。しかし、父親は思いに反して何もしなかった。それだけでなく何も言わないのだ。ただ、鋭い視線だけを感じる。じっ

と見下ろされるくらいなら、いつそ一発殴って終わりにしてくれ。そう思った。一度そう思うと、今度は不思議なくらい冷静になれた。口が開く。

「……殴りたいなら殴れば？」

ごめんなさい、その一言があんなにも口の中で凝固してしまったのに、楯突く言葉は簡

単に飛び出してきた。心の中だけで言っただけだった。しかし、目の前に立つ父親の顔

が一瞬ぐにやりと変形したのを見て、千夏はそこで初めて声にしていたことに気づいた。

咄嗟に両手で口を押さえて母親を見ると、肩を震わせ首を激しく左右に振っている。それ

を見て、さらに血の気が引く。何を言われたのか吸収するのに時間がかかった父親に、血

の巡りが戻ったようだ。その大きな口がゆっくりと開かれた。千夏は、耳を塞ぎたい衝動

に駆られたが我慢した。

「なんだとおおお！」

もしも、ここが千夏の家ではなく山だったなら、間違いなく木霊が返って来ただろう。

怒鳴り声が続くかに見えたが、その次に父の口から出たのは冷静な声だった。

「母さん、明日から弁当を作らなくていい。洗濯もするな。余計なことを一切止めるんだ」

怒鳴られたほうがマシだった。事態がどんどん悪化していく。何か、父の機嫌を取れる

ものが転がっているのではないかと家中に目を走らせたが、綺麗に整頓されたリビングに

そんなものは見あたらなかった。それだけ言うと、父親はじっと千夏を見下ろした。

阿部だ……。この家にも阿部がいる。父親も阿部と変わらない。嫌がらせをするために怒っている。そう思うと、普段学校で抱えている鬱憤まで吹き出しそうになった。ただ、それを口にする勇氣はもうなかった。阿部に言えないのと同じだ。「なんだ、その目は。……はあ、お兄ちゃんもつと素直でいい子だった」

父親の口から漏れたその言葉は、千夏の限界を飛び越えた。一気に瞳に膜が張る。昔から、あんたはそうやって兄妹を比べてきた。そんなにお兄ちゃんが大事なら、いますぐ東京へ行ってしまう。目で訴えようとしたが、それは涙で一杯になった。目玉を上に向けて堪えようとしてもすぐに溢れてくる。反論出来ないことも兄と比べられることも、今の状況に不安を感じていることを分かってもらえないのも、全てに苛々して悔しかった。

「……もういい」  
諦めるように呟くと、千夏は残りのご飯も放り出して廊下へ飛び出した。あれほど心地よかった床の冷たさも、今では足を冷やす意地悪な家ではなかった。母親の引き留める声と、それを制止する父親の声が追いかけてくる。床に投げた靴を胸に抱え、出来るだけ反抗心を見せようと、階段を大きな足音を出して駆け上がった。二階に上がってすぐ手前の部屋に駆け込むと、勢いよくドアを閉める。しかし、そこで鳴った音など、先ほどの父親の怒鳴り声に比べれば大した物ではなかった。「あたしは悪くないのに……」

千夏は、あふれ出した涙を拭うこともせず、ただ床に倒れ込んだ。

### 3 第二次戦争

「で？ どうしてそれで今、髪が濡れているわけ？」

香織は、朝練前に部室で髪を乾かす千夏に聞いた。すでに、他の部員は一足先に体育館へ向かた。香織と千夏だけが残された部室には、相変わらず生徒の声があちこちから聞こえてくる。それが学校のいいところでもあり、迷惑な点でもある。朝、一番乗りだった千夏の髪の毛は今も濡れていた。他のメンバーを体育館へ促すと、香織はすぐに口を開いた。

昨夜、駅で別れた時には笑っていた千夏の顔は消えている。その代わり、普段より二倍に腫れた瞼と濡れた髪だ。何かあったに決まっている。

「だからね、お父さんと喧嘩したの。あの人いきなり怒鳴ってさ。あたしが何をしたの？」

腹が立ったから、二階に上がって朝まで一度も下りなかったの。何度か部屋の外からお母さんが呼んだけど、無視。おかげでお風呂に入れなかったってわけ。朝もすぐ飛び出して来た」

「それで、ここでシャワーを浴びたのね？ …… 大人しく謝れば？」  
香織は、相変わらず自分専用のボールを胸に抱きながらさりと云った。タオルで頭をこねくり回していた千夏が、素つ頓狂な悲鳴を上げる。

「嫌！ お弁当だってどうにでも出来るし、洗濯だって機械がやってくれるもん。文句を言われないんだったらそれくらいやってやるわよ。それで、我が家の阿部を見返しちやるわ」

「我が家の阿部ってお父さんのこと？ あ、そういえば千夏、反省

文は書いたの？」

「……あ、忘れていた。でももういいや、行こうよ。腹の立つことばかり思い出したいくない。今は来る者はなんでも来いって気分」

千夏は、ほとんど乾いた髪をふるふると左右に振ると、部室のドアを開いた。香織が頷くのを見て、すぐに出ていく。香織は、そんな千夏の後ろ姿を見て羨ましくなった。そんな風に喧嘩を出来る家族の元に生まれたかった。喧嘩を試みたくて教師にふっかけるもそれはなんなくかわされてしまう。本気で言い合える親が欲しかった。香織は、部室を出る時、自分の鞆の中に目を遣った。刑事になるための参考書。香織もまた、進むべき道に迷う女子高生だ。体育館へ香織が行くと、すでにスパイク練習が始まっていた。脇でスクワットをしている千夏に駆け寄り、無言で同じことをする。

「そういえばさ、昨日駅で帰り聞けなかったんだけど。香織は？夢、あるの？」

スクワットをやるというもそうだ。膝が痺れるように痛む。香織は冷却スプレーに伸ばしていた手の動きを一瞬止めた。千夏を見ると、彼女は腫れた瞳を擦っている。何かを考えて発した言葉ではないようだ。スプレー缶を取り、力強く振る。仲間内ではふざけて力クテルを作るように振る時もあるが、朝からそんな元気はない。蓋を開けると、膝に吹きつける。一瞬顔をしかめるほどの冷たさが襲うが、徐々にそれが快感へと変わる。小さな白い円を作り、すぐに溶けてなくなる。

「あるよ」

香織は一言だけ告げると、スパイクを打つ列に加わった。レフトアタッカー、つまりチームの中で最大の攻撃力としての役割を担う香織は、夢がある。誰にも言ったことがない。

学校面において香織は周りの人間より不満が少ないだろう思っている。確かに、教師はうるさい。髪を染めれば追いかけてくるし、スカートを短くすれば反省文だ。面倒臭くもあるが、毛嫌いのほどの憎悪は沸いてなかった。上手くかわそうと思えば出来るし、な

により学校でくらい怒られてもよかった。香織には、それよりも大きな問題があるのだから。

「香織。香織！」

何度目かに名前を呼ばれてはつとする。ネット際中央にいるセッターがあげたボールは、数メートル上空をレフトへ綺麗に円を描いていた。気づいた時にはボールは床に落ち、中央へ転がる。それを後輩がすぐに拾ってくれた。出遅れたことでタイミングを失ったのだ。

試合だったら、これで一点失う致命的なミスだ。

「すいません！ もう一本お願いします！」

たとえ同級生でも練習中は同志だ。ミス一本も試合で頼って貰うためには重大な過失になる。走り込む構えの姿勢になると、後ろに並ぶ京子が声を掛けてきた。

「どうしたの？ 大丈夫？」

香織は軽く片手を上げてみせると、次に上がったボールへ足を大きく踏み出した。右足、

左足を交互に出す。イチ・ニ・サンで踏み切る。両手で身体をより上へと持ち上げ、思い

切りジャンプする。ジャンプと同時に、右手を後方へ引くようにして振り上げ、ネットの

上にあるボールを目がけてスウィングする。振り上げる時に曲げていた肘を、振り下ろす

瞬間に真っ直ぐ伸ばす。引き締めた掌で、狙いを定めてボールを打つ。打つときは顎を

引き、目だけがその行方を追う。しかし、ボールがどんな反応をするのかは、掌に当たっ

た瞬間に分かる。レフトから打つボールは、大体が向かいコートの右端を攻める。それよ

り有効なのが向かって左のサイドラインぎりぎりに打つことだ。ブロックも止めにくい上



に、相手レシーブの死角になりやすいのだ。その攻撃には高度な手首の返し方と、身体の捻りが必要になる。今、香織が打ったボールは、相手コートのレフト側へ飛んだ。それも

回転速度を増したまま、宙を突き抜ける。床にバウンドすることなく壁へと突っ込んだ。

周りでボール拾いをしている数人の部員から小さな悲鳴が上がった。「ごめん！」

香織はネットの下部分をくぐり、壁に当たりバウンドして戻ってきたボールを拾う。ス

パイク一つでも、精神の状態はプレーに反映する。今は失敗だ。しかし、もう身体が覚えている。スパイクで飛ぶあの瞬間が心地いい。まるで鳥になったようだ。手が羽になったように舞い、ボールを打つ。手にしっかりと収まった感触、コートに降り立った時に決まるボールの音。周りのかけ声。試合だと、相手のレシーバーが自分の打ったボールを拾えなかった時、堪らない優越感が襲う。自分の周りに集まるメンバー。喜びの感情。自然と声は大きくなる。

周りの部員は文句を言う。休みのない練習日。休憩のない練習時間。指導が細かい顧問。

そのどれもが、香織にとっては問題ではなかった。むしろ、休みなどないほうが暇にならなくていい。口うるさく教えてくれる顧問は有り難かった。家には、そんな風に香織を指導してくれる人物がないのだから。

「危ない！」

またもや複数の声に香織がコートを見ると、京子がスパイクを打った直後だった。そのボールは、一瞬で香織の顔の目の前に飛んできた。バレーの中で一番の欠点だが、香織は瞬発力が低い方だ。もろにそのボールを顔で受け止めると、呻き声が漏れた。周囲の後輩も息を飲んだ。香織の顔に直撃したボールは、まるで怒られるとでも思ったかのように打った人間の元へ跳ね返っていった。京子がそれ

を拾い上げる。

「ごめん！ 香織、大丈夫！？」

細身の割に、京子が打つスパイクも上等だ。香織の顔中が痛むが、直撃した口当たりは酷く、しばらく呂律も回らない気がした。

「だいじょう……ぶ」

かろうじてそれだけ言うと、少しだけ微笑んで香織はコートを出た。やはり胸に何かが支えていると、どこかでミスをする。スパイクを上手く打てないだけでなく、注意力も散漫だ。香織はため息を吐くと、壁に寄りかかるようにして座り込んだ。舌で唇を舐めると、微かに血の味がする。

「溜め息なんて吐いてどうしたの。さっきのスパイク凄かったね」

香織が顔を上げると、隣に若菜が腰を下ろした。もう疲れたのか、膝にはめていたサポーターをくるぶしへ下ろす。

「あたしにも悩みはあるんだよね」

「香織に？ あ、そういえば。さっきの千夏は何だったの？」

香織が若菜の視線を追うと、そこには千夏がいた。スパイクを打とうと飛び上がったジャンプは、小さいくせに香織よりも高さがある。彼女お気に入りのタオルが、千夏のポケットから少し出ている。部屋で、千夏の臉の腫れには誰もが気づいた。しかし、ただ黙って髪を拭き続ける彼女に、誰も声をかけられなかったのだ。だからと言って無関心なわけではない。むしろその逆だ。こうして誰かが一人に聞き、本人に気づかぬうちに全員に知れ渡る。

「んー、なんか親と喧嘩したみたい。その話題触れないほうがいいよ」

「うん。みんな分かっているよ。あの子、また？ 今まではお兄ちゃんと喧嘩していたのが、今度は親になったというだけか。本だけ読んでいれば大人しいのに……。中身は野生だからね」

確かに、若菜のそれは一理ある。香織は、若菜のこの力がチームの一本の柱と言っても間違いないと思っている。キャプテンは美香だ。しかし、その理由は美香が小学校からバレーボールをしている

ことと、セッターという司令塔に値するポジションについているが故だ。もちろん美香の力も誰もが認めている。ただ、若菜の観察力も明白で、去年は周りの強力な推薦で副キャプテンとなった。身内だけでなく、敵の観察も鋭いのが持ち味だ。言動が時々場所によっては反感を食らうこともある。しかし部内では、彼女の助言は的確という意味しかない。

「まあね。でも、千夏のあの攻撃力はチームにかかせないから。あと数ヶ月は野生でいてもらわなくちゃ」

「でもそのあと、あの子どっぷり本を読むのかな。勉強しながら」「そうかもね。あの子の鞆は、いつも分厚いファンタジー小説とジャージしか入っていないもんね」

香織は笑いながら、鼻の下に手を当てる。鼻血ほどではないがうつすらと人差し指に血が付いた。少し鼻の中の粘膜が切れたのだ。気持ちだけ顎を上げ、鼻を嚙る。

「で？ 香織は何を悩んでいるわけ？」

後頭部を壁にもたれていた香織が、驚きで若菜を凝視した。周りのかけ声が、急に耳に

届かなくなる。飛行機が飛びだった時の圧迫感を耳の内部に感じる。若菜のまっすぐに見

てくる瞳に、思わず怯む。

「何？ 悩んでいるんでしょう？」

悩んでいる。しかし、人に悩み聞かれたことなどなかった。なぜだが、周りは自分のこ

とを何事も上手くこなす人間だと決めつけ、褒めた。羨ましがられることさえある。それ

ゆえ、弱音を吐くのが怖いと思うときがある。強い子だと思っていたのにと、幻滅された

らどうしようと不安になる。友達が話を聞いてくれるのは分かっている。しかし、それが

分かっているからといって話せるわけではないのだ。若菜は、どん

な反応をするだろうか。

ごくりと唾を飲み込む。

「先輩！ 危ない！」

その叫び声に二人がコートを見ると、スパイクミスのボールが壁に向かつて剛速球で飛

んできていた。今日は周りの調子も良くないらしい。若菜が反射的に身体をずらすと、そ

れは彼女がいた位置を打ち付け、跳ね返っていく。

「すみませーん！」

ボールを拾った後輩が、自分が悪いのではないのに頭を下げる。体育館にいればどこに

ボールが飛んでくるか分からない。身体に当たるのなど日常、顔でさえたまにあることだ。それに、今は座っている香織の方に非があるとと言える。後輩のおかげで、香織の耳に周

りの音が戻ってきた。ふっと息を吐くと、気持ちが落ち着いた。

「悩み？ 大したことじゃないよ」

動揺を悟られないように早口で言う。顔を見られないように、タオルをかぶせた。その

下では、なぜか涙が出そうなのをこらえる香織の顔があった。

「ふーん。ま、何かあったら言ってよね」

そう言い残して、若菜はコートへと戻っていった。若菜はいつもこ  
うなのだストレート

に胸の中に突っ込んでくる。しかし、相手が受け止めることに悩んでいると、さつと引く。

全てを分かっている、高見から見物しているような気がするのだ。聞いて貰えばよかったかな、心の隅でそう思った。しかし、香織にはまだそんなことが出来なかった。人の話を聞くことは得意だけれど、人に相談をしたことがない。それを回りも気にしたことはないだろう。いつも、冷静で、事を上手く運ぶようにだけ努力してきた。そう、それが、自分をこんなにも苦しめるなんて知らなかった。

\*

「早川。昼休み、昼練はいいから職員室に来なさい」

朝練を終えて、六人で固まって教室への階段を上っていると、脇からすつと顔を出したヒゲが言った。唯一メンバーの中で香織だけ、ヒゲは部活の顧問であり担任だ。顧問は大抵朝練にも来ないし、昼休みの練習でもメニューをこなしているかの確認に時々顔を出す程度だ。夕方の練習だけで手が一杯なのは分かるが、それだけで色々指摘をされると腹が立つ部員も多いようだ。

「香織は大変だね」。ヒゲとクラスでも部活でも顔を合わせるのか「香織の真横を歩く千夏が、嘆くような顔で言う。まるで、自分が辛いとも言つように。

千夏はヒゲに対していつも不平を漏らす。今は、ヒゲが立ち去ってから言うだけマシだ。

試合でヒゲに怒鳴られても、周りのメンバーと違って返事もせずにつんと澄ましている。

どうもバレーに関しては闘争心が旺盛のようだ。その勢いが、阿部に対しても生かされてもいいものと思うが、本人は言えるはずがない。

「まあね。でも、性格とか色んなことをすでに全部分かっているから楽でもあるよ。また

一から自分を説明しなくてもいいでしょ？ 成績がばれるのは嫌だけど、どうせ先生達の間ではすぐに分かるしね」

香織は、部室からも持ってきたボールを階段でついた。このボールを持っていないと何

か物足りないのだ。電車の中でもこれは離さない。考える時や悔しかった時、トスをする

と平常心を保てる。一度、電車が大きく揺れ、ボールが満員電車の中を端から端まで移動

した時は参った。周りに白い目で見られるし、自分の身体の一部を失ったかのような不安

感に襲われたのだ。それ以来、数本電車を逃しても満員電車は避けている。弁当は食べる

瞬間まで忘れたことに気づかない時があるが、ボールがないと手がそわそわする。時々、

自分が病気ではないのかと心配になったこともあるが、生憎そんなものは聞いたことがない。

「あ、それは言えているかも。あたしなんて、今の担任に、お前は どうしてそうクネクネ 動くんだって言われたし！ ひどくない？」

美香が振り返って、体を海草が海の中で波打つように動いた。なぜ か口までがタコによ

うだ。香織が吹き出しそうになると、祥子が言った。

「でも、あたしはクラスでまで怒られたくないかも……」

ボールが床を突く音に紛れる声。それでなくても祥子の声は小さいのだ。

「でもさ、なんだろうね。髭の話って」

京子が、手の中あるチョコレートを頬張りながら言う。彼女は毎朝、大きな一枚の板チ

ヨコを平らげる。それでも肌が荒れないのが不思議だ。香織は、自分の額の中央に出来たばかりの二キビを指でなぞった。そして、隠すように前髪を整える。

「あたしも今日確か呼び出されていたよ。進路相談だって言っていたかな。クラスで出席番号の早いほうから始まっているみたいだし」  
若菜が答える。彼女はいつも先頭を歩く。それは目立つためでも、みんなを引っ張るためでもない。周りのメンバーが、話していると異様に歩くのが速いのだ。それは階段も例外ではなかった。若菜は他のものより三段ほど先を進んでいる。しかし、この始業開始直前

だと、ほとんどの生徒はクラスに入っているので、バレー部の声しか聞こえない。その分廊下によく響く。

「あーあ……。これからはテストテストテスト、か。大学行ってなんか分かるのかな。辛い受験をくぐり抜ける意味なんてある？」

千夏が吐き捨てるように言う。昨夜の両親との喧嘩が頭から離れないのだろう。今も、目には軽く濡れたタオルを当てている。

「まあ、なんとかなるよ。あたし専門でもいいし」

そう言う京子は、チョコレートをあつという間に食い尽くしてしまった。

「京子はモデルで生きていけるじゃん。結婚も一番早そうだよな」

美香が、香水をまた手に吹きかける。階段にも、美香の匂いが広がった。その匂いを分散させるように香織は右手を空中に数回振ると、少しだけ咽せて言った。

「千夏、今の心境を言ってみてよ」

「人間は自由という刑に処せられている。サルトルという人の言葉よ」

メンバーから感嘆の声が上がる。同意をする声や、サルトルという人物についての疑問を唱える者。香織は、それを耳の端で聞きながら、千夏の言葉を噛みしめていた。確かにそうだ。自由であるから、何を職業としても目標に出来る。目標があればあるほど、高ければ高いほど、周りの大人達からは認めて貰えるだろう。だが、自由である一方で人は縛られているのだ。一つ一つ小さな世界に属し、足をつ込み、肩まで浸かる。それに意味などあるのだろうか。だが、それが今自分たちの置かれている状態だ。自由とは、結局名ばかりなのだろう。

「ねー！ サルトルって誰！」

階段の最後を上り終え、美香の声が廊下に響いた時だった。

「お前達、早く教室へ行けー！」

階段の目の前は香織の教室だ。一足先に到着したヒゲが、ドアから顔を出して六人に叫ぶ。それまでは強気な発言を繰り返していた彼

女たちも、一瞬身体をびくつかせると、一目散に各自の教室へ走って散った。結局は、そんなものである。

進路指導室は、生徒が人生の中で前を向き明るい道を進めるようにと、南に面した部屋にある。その動機はこじつけのようで本当の話だ。しかし、不覚にもその部屋に光が入るのはとてもわずかな朝の時間しかない。というのも、部屋の前にはとても大きな木が何本も植林されているのだ。十数年前の卒業生が、卒業記念に植えたものなので切ることも出来ないのだ。植えた時にはまだ苗木で、ここまですで成長することも考えていなかったようだ。思いの外大きく成長した後、そんな理由で指導室を入れ替えることも出来なかった。結局進路指導室は学校で一番暗い場所になってしまったのだ。受験シーズン前になると、教師陣がその木を揺すっては早く葉を散らそうとするのだから見物である。大の男が三人がかりで木を揺らす。枯れればすぐに落ち葉になるのに、それも待てないのだろう。生徒からすれば、受験にも落とされそうで嫌なものである。しかし一日でも早く日の光を入れようとする彼らには、生徒の意見など聞き入れられるはずもなかった。そして一年中部屋のカーテンが閉められることもない。迷信とも言えるその行動は、一、二年生にとっては笑いぐさだ。それが、三年になると笑えない。一刻も早く木を切って欲しくなるのが常のようだから、人間など勝手なものだ。

「それで、どうするつもりだ。進路」

相変わらず日の当たらない指導室で、香織はヒゲと向かい合って座っている。テーブルの上には、数日前に提出した進路調査票が置かれていた。それに目を遣ることなく、香織は言った。他の教師は、昼休みを職員室で過ごすので、ここには二人きりだ。ヒゲも普段は自分の担当する日本史の資料室にいるが、この進路指導室は暗いのを覗けば参考資料は豊富に揃っていて使いやすいのだ。

「この通りです。もう決めています」



香織は、部活にいる時よりも緩んだ頬をしているヒゲに向かってきつぱりと言った。髭

は、鼻の下に生えている自分の髭を撫でつけながら、困ったように言った。眼鏡の下の小

さな垂れた目が、困ったように動くのを見逃さなかった。

「それは……確かに見えている。しかし、なんだあれば。本気か？ 親御さんはなんと云っているんだ」

進路調査票が配られたのは、新学期が始まった翌日のことだった。入学式の参列を終え、

まだ慣れないクラスへと足を踏み入れた時、机にすでに配られていた一枚の紙。香織がそ

れの記入に迷うことはなかった。

「いいんです。親には納得して貰います」

希望する大学名と、なりたい職業。なんとぞんざいな質問だと、その時香織は呆れてし

まった。まるで小学生に聞くかのように、職業の名など書かせるとは。OLと書いたらどうなるのだ。香織は、その職業に迷うことなく「刑事」と書いた。しかし、大学名は未記入のままだ。勉強もおろそかな今、自分の力もハッキリ分らないのにどこを狙うと言われても、結局は有名な所しか書けないからだ。そんなものは意味がない。

「納得って……、どうするんだ。お前の家は、お母さん、いないんだよな？ お父さんが知ったら喜ぶんじゃないか？」

香織の父親が刑事だと、家庭調査票でヒゲは知っているのだ。しかし、部員の仲間は知らないことだ。知って欲しくない。

「いえ、父には最後に言います。いつも仕事で家には帰って来ないし。それに、あまり喜んではくれないと思います。反対されて揉めるよりいいですよ。きつと三者面談にも来ないだろうし」

香織の様子を見たヒゲが、椅子にどっかりと座り腕組みをした。

値踏みをするように香織の顔を見つめるが、それは時間稼ぎに過ぎなかった。

「分かった。それじゃあ、これは先生がお父さんに聞いてみよう。電話、携帯なら出られるだろう？」

「え？ いいです。これはあたしの問題ですから。先生に迷惑はかけません」

半分本当。半分嘘だ。香織は、教師にも頼ることがうまく出来ない。片づけられること

は人の手を煩わせたくないのだ。香織が、驚いて言う。

「お前、それじゃあなぜ教師がいるんだ。部活はおまけ、こっちが本業だ。まかせとけ……」

……とは言えないが、話が出来ればお父さんの意見も聞いておこう」  
ここで反抗しても、結果は変わらないだろう。ヒゲの小さな目が、まだ自分を見ている

のを感じて、香織は渋々頷いた。朝、千夏から得た言葉が、香織の脳裏に浮かぶ。それが

勝手に口から飛び出した。

「先生。サルトルって知っていますか？」

「サルトル？ 俺は日本史の担当だぞ。……あの哲学者のジャン＝

ポール・サルトルか？」

「よく知りませんが。朝、サルトルの言った言葉を知ったんです。

人間は、自由という刑に処せられているって」

髭は、驚いたように香織の顔を見つめた後、先を促すように首を傾げた。何が言いたい

のか分からないのだろう。

「それを聞いて考えたんです。自由って何かなって。あたし達は今、自由に大学や職業を選べと言われていますよね。それって自由なのかって。サルトルは、自由に生きる道を選ぶほど難しいものはないと言いたいんですね。確かに辛いんですね。どこへ行くにも、何

をするにも自由って却って決めづらい。確かに、あたし達もそうして進むべき道を自由に選んでいいと言われています。でも、それって結局は見せかけじゃないんですか。大きな水槽の中に大人達は子供を飼っていて、進むべき道を自分の都合のいいように結局選ばせるんですよ。駄目だと思ったら、自分のいいと思う職業に進ませたり、大学を受けさせる」

「お前、水槽の中にいると思うのか？ 常に監視されて、つまり刑事になることも反対されて叶わないと？」

「うちの父親なら……そうですね。必ず。あたしは餌を欲しがって水槽を泳ぎ回る小魚ではないつもりです。でも、所詮そうなんだと思います。サルトルは、自由が刑だと言っている。でも、それって贅沢ですよ。進路も自由に決められない人間からしてみれば。自由に決めると言われても否定されればおしまい。あたしたち子供からすれば、自由という監視の元で自らを生かさねばならない束縛の刑ですよ」

香織が、一息にそう言い終えてヒゲの顔を見ると、彼は両目を見開いている。それがなんだか面白くて、香織はヒゲに向かって笑いかけた。髭に言うべきことではないのかもしれない。なんだかスッキリした気持ちで考えた。

「すみませんでした。忘れてください。」

香織は椅子から立ち上がると、耳にかかる髪の毛を後ろへどかした。座ったままのヒゲに浅くお辞儀をする。

「……お前の考えは分かった。もしかしたら、みんなが思っていることかもしれないが、そこまではつきりと言われたのは初めてだ。俺も、その答えを考えておくよ。あ、それとお前その髪もう少し黒くするんだぞ。阿部先生に俺が甘いと思われる。よし、ついでだから反省文書いておけ」

えーまたー、と今度こそ大きな反抗を見せる香織に、ヒゲは一枚の紙を放った。受け取り損ねたその紙は、テーブルから滑り落ちて床にひらりと舞った。仕方なくそれを拾い上げると、香織は振り

返ることなくその部屋を後にした。ドアをぴしやりと閉めた時、昼休みの終わりを告げるチャイムが、校舎に響いた。

\*

「ただいまーっと」

香織は、リビングに入ると、抱えていたバレーボールを床に置いた。ソファに座り、まずはテレビの電源を入れる。テーブルの上に置いたコンビニの袋から、パッケージに包まれたハヤシオムライスを取り出した。暖めて貰ったそれは、ほぼ温度を失っていない。蓋を開けると、ソースのかかった卵からもわっと湯気が上がった。蓋をひっくり返して、袋の上に置く。

「いただきますぁーす……」

スプーンの包装を破り、オムライスをすくう。通常のあいさつは一人でも自然と口にしてしまうが、言葉が空気の中に溶けた瞬間、静けさが際だつ。返事がないことで虚しくなるので止めようと思うのだが、誰もいないのが分かっていても期待して声に出してしまう。もしかしたら、ひょっこり返事が返ってくるかも知れない、そう考えて。

味つけの濃い米を口に入れると、それはまるやかだがどこか機械的な味がした。何回も噛むことなく飲み込むと、テレビのチャンネルをお笑いの番組に合わせる。それを見て笑えるわけではない。好きな芸人もいない。しかし、部屋のどこかで笑い声があると言うだけで、それがたとえブラウン管の中から聞こえるものでも、寂しさが増える気がした。香織はいつも、ご飯をこうして食べる。寂しいという感情も、ほとんどない。寂しくないことが悲しいことだとも思わない。これが一種の自立だと思う時もある。同情を買いたくなくて、周囲に言えないだけだ。高校を卒業して、結婚をして幸せな家庭に恵まれた時、きっとその時になれば話せることだろうと思う。あの時は、大変だったのだと。いつも一人だったのだと。しかし、困っているときには、なかなか周りには言い出せない。きつと、そ

れが近ければ近い存在であるほどに……。心配をかけたくないのも本心だ。だが、幸せに家族と食卓を並んでいる友達に、この悩みは話せない。おそらく分かつては貰えないだろうからだ。話を聞いてはくれても分かつては貰えない。可哀相だと思われたくない。あたしは可哀相ではない。これでいいのだ。耐えられる。何度そう思っ  
てこの家で眠っただろう……。寂しいと認めた時、その時が負けだ。香織は、掻き込むようにスプーンを口へ運び続けた。

その時だった。玄関の鍵が開けられる音がした。そして、すぐにドアが開けられる。廊下を歩く足音が、香織の耳に違和感をもたらす。もちろん泥棒などではない。しかし、それほどこの家に香織以外の人間が入ってくることはないのだ。香織以外の足音は、家さえも拒絶するかもしれない。

「なんだお前。そんなものを食べて。いつもそんなことをしているんじゃないだろうな」

久しぶりに会ったその男が発した香織への言葉は、挨拶でも気遣いの言葉でもなかった。

指摘。疑心。

「違うつて。今日だけだよ。部活が大変なの。帰ってくるなんて思わなかった。久しぶり」

しかし、男はそんな香織に返答することなく、向かいのソファにやって来て腰掛けた。何日間髭を剃っていないのだろうか。顎の下に生えるそれは、この男を余計老けて見せている。

男は、一度深く座り、両手を思い切り伸ばす。腰をぐいっと左右に捻ると、最後に大きな息を吐き出した。よれよれの靴下は、親指に穴が開いている。何日も変えていない証拠だ。だが、それを洗って縫ってあげようなどと気持ちは起こらなかった。

構わず香織はオムライスを口に運ぶ。男がいるのを無視するように、テレビの音量を上げた。部屋中に、テレビの中から聞こえる笑い声が響く。男は、すぐに浅く態勢を起こした。膝の上で、両手を組むと、食べ続ける香織をじっと見つめた。こういう場面が何度も

あった。だが、決まって男は何も言わないのだ。言いたいことがあるのかもしれないが、それが口から出てくることはない。それを分かっているので、敢えて香織から口を開くこともない。千夏の家と、こついうところは似ているかもしれないと思う。男親はそうなのだろうか。

しかし、今日は違った。

「……お前、進路を考えているのか」

男がこの話をするのは、香織が覚えている限り二度目だ。一度目は三年前。香織が高校受験の時だった。

「決めた。だから何？」

香織の答えに満足出来なかっただろう男は、首を左右に振った。男がここに戻ってきた

のは、香織が心配だったからではない。ヒゲが電話をしたのだろう。男の顔を睨み付ける。

よく見れば、その頬はこけている。食事をきちんとしているのだろうか、と気になったが、

聞くことはない。男が香織に聞かないように、香織も男に何も聞かないのだ。

「ダメだ」

不意に男の口が開いた。その声は、低くはつきりとしていた。話をするつもりもないだ

ろう威圧的な声。それは香織の中に選択肢として存在していた。そう、ヒゲが父親に話す

と言ったあの瞬間から。しかしこつなるのは、もう少し遅いと思っていたのに。

「そう。でも決めた」

視線をテレビに戻したまま、香織が言う。男が認めてくれるとは思わない。それならば、

もう突き通すしかないと思っていた。

「ダメだ」

男は、静かにもう一度繰り返す。それでも、香織が視線を合わせないと、無言でテレビ

のリモコンを持った。すぐに、電源を落とす。笑い声が響いていた部屋に、沈黙が落ちた。

その差が、大きすぎる。香織が飲み込んだハヤシライスがのど元を落ちる音までもが聞こえそうだった。それさえも止めたらずくに気まづくなってしまう。ただ、

無心に食べる。

「今日、担任の先生から電話を貰ったよ。お前の部活の顧問らしいな」

だから何？もう一度同じことを、香織は繰り返す。

「刑事は、やめろ」

そう言った時、男の胸ポケットにある携帯が音を鳴らした。ちつと舌打ちをして、男は

それを取り出し、耳に当てる。受話器から男の声が漏れてきたが、何を言っているのかははっきりしなかった。

「ああ、分かった。すぐ行く。……仕事だ」

電話を切ると、すぐに男はそう言った。家の物になにひとつ触れることなく、その場を

後にした。男の消えた家で一人、香織はハヤシライスに口をつけた。一度消えた音を付け

ると、余計に虚しくなるのを分かっている香織は、再びリモコンに手を伸ばそうとは思わ

なかった。最後の一口を食べ終える前に、スプーンを置く。どうしても、最後の一口だと

思うと手が止まってしまう。無理して口の中に入れると、なぜか吐き気さえ感じる時があ

るのだ。それがなぜだかは分からない。この一口を捨てるのこそ勿体ないはずなのに、香

織にとつては食べるのが勿体ないのだ。終わりが来るのが怖いのか  
もしれない。香織は、

家で一人ご飯を食べると大抵最後は残してしまう。お昼の弁当でも、  
誰かに何かを聞かれ  
る前にそつと蓋を閉じる。それでも、今の沈んだ気分の理由は分か  
っていた。

男は今日も帰つては来ないだろう。今日もここで一人眠るのだろう  
か。そう思うと、悲

しいというよりも無性に虚しくなった。明日の土曜日には、午後か  
ら模試が待っている。そのための勉強もしていないが、そんな元氣  
はなかった。勉強するには体力が必要だ。

こうして一人でいることには慣れている。寂しくないといえば嘘に  
なるが、苦ではない。

それなのに、時々こうして胸が苦しくなる。世界に一人だけ置いて  
きぼりにされたような、

もし自分が苦しんでいても誰も助けてくれないだろうという不安感。  
そして、今の自分の

置かれている状況が憎らしくなるのだ。制服を着たまま、香織はも  
う一度鞆を手にした。使用していないが、家の中のあらゆる火の元  
を確認して回る。これは一種の癖だろう。

確認してから家を出ないと、あとで不安になるのだ。戻ってくるの  
もバカバカしいので、

香織は嫌と言うほど、元栓が閉まっているのを確認するのだ。

一度、若菜に心配されたことがあった。戸締まりや火の元の確認を  
何度もしないと安心

できない病氣があるらしい。しかし、香織には自分がそんな病氣で  
はないと分かっている

ので鼻で笑ってしまった。彼女は、母親との思い出に浸っているだ  
けだ。母親は、出掛け

る前にいつも香織と二人で家中を冒険するように探検した。一番記



憶に残っているのが、  
その映像なのだ。

家を出ると、マンシヨンの廊下を走る。香織の住むマンシヨンは、  
この地域が発展する

ときに建てられたものだ。築十七年ほどで、ほとんどの戸数は埋ま  
っている。同じ敷地の中に棟が数個並んでいるので、かなりの住人  
が住んでいる。中学のときなどは、一クラスに何人も、このマンシ  
ヨンから通う生徒がいたほどだ。ひとつの集団だと言えるだろう。

しかし、案外そのつながりは希薄なものだった。一緒に帰るような  
友達がいたわけでもないし、ご飯をお裾分けし合うような近所づき  
あいがない。同じ建物だからといって、ひとつひとつに別の世界が  
あるに過ぎないのだ。そして、香織はその世界でも一人だった。父  
親は家に寄り付かず、母親は幼少の頃に死んだ。それ以来、香織は  
あの小さな箱の中で一人で生きてきたのだ。病気の時も、受験の時  
もいつも一人だった。しかし、今は逃げ場所を見つけた。

香織は、一度マンシヨンのエントランスを出ると、すぐに隣のマ  
ンシヨンへと入った。部屋の番号を押すことなく、鍵を差し込みエ  
ントランスを開く。エレベーターに乗り込むと、五階を押した。誰  
に会うこともなく、機械に表示された階数を見上げる。すぐに着き  
扉が開くと、目の前の部屋に今度は鍵を差し込んだ。カチャツと音  
を立てて開いた。

「あれ、何。来たんだ」

香織がノブに手をかけようとすると、内側からドアが開いた。そし  
て中から顔を出した  
のは、一人の男だった。

「うん。達也、ごめん。寝させて」

男の返事を待たずに、香織は猫のように脇をすり抜け家の中へ入っ  
た。靴を脱いで、廊

下をまっすぐ歩く。家の間取りは香織の家と正反対な位置にあるだ  
けだ。二ヶ月に初めて

来た時から香織は迷わなかった。ただ、たとえ位置が同じでも、置いてある家具、そして

それぞれの家庭の雰囲気は確かに違う。床に座ると、香織は玄関を振り返った。

男は、履いていた靴を脱ぎ、やってくる。

「ちょうどコンビニにでも行こうとしたんだ。まあ、鍵がなくてもお前持っているしな。」

親父さん、今日もないのか？ そんなに忙しい仕事だと大変だな」香織は、リビングのソファに座り、頭をもたれかけながら、横目で男を眺めた。

「いないよ。さっき帰ってまた出掛けた。どうせ話すこともないし」同じ建物に住んでいても、それぞれの生活は違っている。この部屋は、香織の家とは全

く違う匂いがある。優しい、家の匂い。達也はここに一人で住んでいる。それなのに、二

人の住人がいるはずの香織の家よりも温かい。

「ご飯は？」

男が聞いてきたことに答えず、香織は真顔で見つめ返した。

「ねえ、達也はどうしてここにいるの？」

香織のその質問に、男は一瞬吹き出した。そして、すぐに香織の表情を見ると、小さな咳払いを一つする。

「なんでって……。お前。ここ、俺の家なのだけど？」

「そういう意味じゃないって分かっているくせに。達也だけ、どうして日本に残ったの？」

いくらか不審気に香織を眺めたあと、男はいとも簡単な答えを出した。

「お前に会ったためさ」

そして男のまっすぐな気持ちを、香織は簡単にへし折った。

「そんなのは違うでしょう。達也と会ったのは最近じゃん。達也の

親が海外に行ったのは  
去年の話でしょ？」

「冗談に乗らない香織に向かって、男は肩を竦める。首の後ろを数回指で搔くと、諦めたように言った。

「ばれたか……。俺さ、あんまり話したことなかったけど、日本の歴史に興味があるんだよね。それだけ言うと、おたくっぽいから嫌なのだけどさ」

「日本の歴史？ 確か、達也は文学部だよな？」

「ああ。まあ、残った理由はそれが主だな。大学を休学するつもりはなかったし、出来れば大学院にも行きたい。今のところ海外に目は向かなかった。なにより、日本のことは日

本にいなけりや分らない。幸い俺は大学生だったから、一人暮らし出来て有り難い。妹

は高校も向こうのに編入しているさ。まあ、大学は戻ってくるみたいだけど」

そう言うつと、達也は香織に背を向け台所へ向かう。テーブルの上に置いてあった急須の蓋を開けると、ポットからお湯を流し込んだ。その湯気は、香織が買ったコンビニのハヤシライスより、温かくていい匂いがする。

「そうなんだ。ご両親に反対されたりとかは？」

「いや、家の親は結構放任なのだよ。昔から。……何？ どうしたの、急に」

香織は二ヶ月前に、京子の友達が開いた合コンに参加してこの達也に会った。高校三年

生と、相手は大学生だった。香織が進められても頑なお酒を断り続けると、達也が最後に言ったのだ。

「そんなに真面目に生きていると、ストレス溜まらない？」

馬鹿にしたようなその一言に、香織は無性に腹が立った。達也が持っていたグラスを強

引に奪い取ると、それを一気に飲み干した。あとで聞いたところによると、そのカクテル

はノンアルコールだったらしい。しかし、お酒を飲んでしまったという気持ちだが、香織の

気分を悪くさせた。店の中にいると吐き気が起こり、外の空気を吸うために外へ出た。出

たところでうずくまっていると、達也が追いかけてきたのだ。気分が悪いと言つと、達也

が送ってくれると言いだめた。一人だと不安だったので、途中までならと了承した。それ

だけだ。しかし、道のりが自分と同じことに気づいた達也の話で、同じマンションの別棟

に住んでいることが発覚したのだ。それから、なんとなくこの家に遊びにくるようになって

て、なんとなく付き合うようになった。付き合うきっかけなど、そんな些細なことで充分

なのだ。共通点があれば、居心地がよく感じられる時もある。それからなんとなく一緒に

いるが、香織は達也のことを何も知らなかった。

両親が仕事で海外に行っているというだけで、仕事の内容も知らないのだ。しかし、今

はそれでいいと思えた。知りたいとも思えないのだ。自分のことを話すのが苦手な分、人から何かを聞き出すのも得意ではなかった。

話したくなったら話してくれればいい。話さなければそれまでの存在だ。だからといって、自分からその距離を無理に縮める気はない。

達也を好きかと聞かれたら、分からないと答えるかもしれない。家

族と過ごせない時間を、達也で埋めていると言われても反論は出来ない。しかし、一度手に入れた安息場所を手放すには、手に入れた時の倍以上の勇気がいることを知った。

「香織さ、受験だろ？ どうかの大学に行くの？ 稲毛女子ならば進学だろう？」

偶然にも、達也は同じ稲毛駅にある男子校出身なのだ。駅が反対側なので関わりは全

くないが、お互いのレベルや卒業後の進路くらい大体把握出来てしまふ。

「んー、引かない？」

香織が、冷蔵庫の中を漁る達也に聞いた。自分をさらけ出して、嫌われるのが一番怖い。

自分に自信があれば、なんでも言えるだろう。評価など関係ない。自分を評価するのは自分だ。それが好きな人だと、余計に気は小さくなくなってしまふが、そう思うということは、達也のことが好きなのだろうか。香織は言いながらも、自分に問いかけた。

「え？ そんなこと分らない。何？」

達也はこういうところがある。決して安易に物事を肯定的に捉えないのだ。必ず自分で考えて、結果を出す。それがこの二ヶ月で知った、彼の一番いいところだった。

「あのね、あたし刑事になりたいの」

香織のその告白が、達也にどれだけの衝撃をもたらしたのかは、彼の反応で明らかだった。

た。冷蔵庫から取り出したキャベツを持ったまま振り返ったが、数秒香織を見つめたかと

思うと、それを垂直に落下させたのだ。衝撃で手に力が入らなくなつたのだろう。そんな

反応があると、何かやらかしているのかと若干不安になるではないか。

「どう思う？」

落ちたキャベツに視線を落とした達也に向かって、香織は窺うように聞いた。

「いや……、驚いた。女の子で刑事って初めて聞いたよ。いや、馬鹿にしているわけじゃ

ないんだ。ただ、そういう仕事は危ないから……」

達也はキャベツを拾うと、まな板を持ってリビングへやってきた。

普段は台所で料理を

するようだが、香織がいると彼はリビングのテーブルにまな板を持ってきては野菜を切ったりする。

「実はね……。父親がサラリーマンで嘘なの。父親は刑事。だから、あんなにも家にいないんだ」

「……そっか」

達也は、ただキャベツを刻む。彼なりに答えを出せないのだからだろうか。その後、

包丁がキャベツを同じ大きさの千切りになっていくのを、香織はただじつと目で追っていた。

父親のように反対をするわけでもない。かといって、彼は手を叩いて喜んでくれるわけでもない。何も言われないのが、一番苦しかった。自分は自分だ。

そう頭では分かって

いるはずなのに、感情が否定されるのを怖がっている。彼の答えを聞くのが怖かった。否

定されたら諦めるだろうか……。香織は自分に問いかける。結局、

こんな時も人間は自由

という名の服を着た他人の意見に、所詮左右されているのだ。

その時だ。鞆に入れてある、香織の携帯が音を立ててなった。画面を見ると、そこには

祥子の名前が表示されていた。

「もしもし？」

香織が出ると、祥子は疲れたように間延びした声で言った。

「あ、香織ー？ ごめんねー、明日の模試って、何時までだった？  
親に買い物頼まれち

やって。メールにしようかと思ったんだけど」

「お父さん？」

香織が答えようと口を開きかけると、横から達也が一言付け加えた。  
送話口を軽く手で

押さえ、首を横に振る。友達、とだけ口を動かした。そして電話に  
言う。

「明日の模試ね。五時までって言っていたよ」

香織が答えると、微かに電話の向こうに緊張した色が走った。

「香織？ 誰かと一緒？」

達也と付き合っていることは、部活のメンバーに話している。バレ  
ー部で参加した合コ

ンなので隠すこともない。ましてや、達也が香織を送ったことを知  
られていたのだから、

翌日は一日中からかわれるはめになった。

「あ、うん。達也」

「そうなんだー。はは。お邪魔しましたー。」

香織が答えると、祥子は電話をすぐに切ってしまった。

#### 4 第三次戦争

電話を切ってしまったあと、部屋で呆然と佇む祥子に声をかけたのは、母だった。

「祥子。お風呂あんたが最後だから、入ったらすぐに洗っておいてよ」

思わず電話を背中に隠すと、ドアの隙間から部屋に顔を覗かせる母親に曖昧に頷いた。その間から妹達の騒ぎ声が、聞こえてくる。

「あ、そうだ。あんた、明日空いている？」

母親は、ドアを閉めようとした直前に、思い出したように言った。その問いに、一瞬だけ心臓が高鳴った。伏し目がちで、申し訳ない思いを口にする。

「ごめんね。明日は練習試合と模試なの」

「そう。それなら仕方ないね。唯の幼稚園のお迎えが早いから頼もうと思ったんだけど」

「あ……ごめん」

母親は、特にそれ以上何も言うことなくドアを閉めた。祥子が忙しいのも分かっているのだ。香織がいくら長女とはいえ、彼女の責任ではないことも承知しているのだろう。しかし、それでも香織は心苦しかった。兄弟は下にあと三人居る。高校は公立に入れたからよかったものの、大学も出来れば国立に入りたいのだ。下に手もお金もかかるこれから考えると、自分は我が儘を言っではいけないと分かっている。大学へ行けるだけでも充分だ。自分は間違っている。祥子はそう言い聞かせる。しかしそのためにも、祥子は早く受験勉強をスタートさせたかった。

今、香織に電話をしたのも、本当は模試の時間を知りたいのではなかった。そんなものは配布されたプリント見れば分かる。電話をしたのは、明日の練習試合を上手く欠席したかったからだ。妹の用事を言えば、休めないことはない。総合大会が近いとはいえ、まだ



二ヶ月以上もある。ずっと焦り続けるよりも、今のうちに少しでも進めておきたいのだ。

休むことをキャプテンの美香に言うよりも、香織のほうが得策だと思えた。香織ならば、本当の理由に勘づくだろう。それでいいのだ。美香は、おそらく素直に信じてくれる。若菜に言えば、疑いを口にして叱られるかもしれない。京子と千夏なら、自分たちも休みたいと言いだしかねないだろう。一番の安全策は、キャプテンだ。しかし、それもまた気が引けるのだ。美香は、欠席の連絡を拒絶しない。風邪だと言っても、用事だと言っても同じ事だ。しかし、事実は異なるのだ。用事もなく、風邪も引いていない。そんな風な形で休んでも、結局は集中出来ない気がした。それならば、気づいたとしても口には出さないであろう香織に伝えたかった。いわば、自分の中だけでの共犯者を捜しているともいえるだろう。しかし、その作戦も失敗に終わったのだ。それに加えて小さな衝撃を連れていた。罰が当たったのかもしれない。数ヶ月前にあった合コンで、幸か不幸か祥子も達也に会った。言うなれば、一目惚れだった。少し真面目そうに見える外見を作っている黒縁眼鏡も、前髪が少しだけ跳ねているところも、奥二重の瞳も、なにかもが輝いて見えた。

しかし、彼が興味を示したのは、祥子ではなかった。予想よりも早く、香織は達也とつきあい始めたとバレー部で報告した。そこまでは我慢できた。一緒に喜んでいる振りもしてあげられた。しかし、それでも、心のどこかで泣いていた。運動だけでなく全ての生活において言えることかもしれないが、バレーも精神の安定があつて初めて納得のいくプレーが出来る。身体も軽くなるし、思わぬ好プレーにも恵まれる。上手くいけば、また気合いが入る。しかし、逆を言えば、負のスパイラルも一度始まれば尾を引くのだ。ただでさえ祥子はそれに嵌っていた。足を掬われる、まさにそんな感じだ。藻掻いても藻掻いても、気にしてはいないはずなのに、どこかでひっかかっている。打っても打っても決まらない。

そして、せつかく忘れていたはずなのに、今の声を聞いて全ては

振り出しに戻ってしまった。達也だ。香織は達也といえるのだ。時間を確認すると、もう十一時だ。こんな時間まで、二人は一緒なのだ。何をしているかなど想像もしたくなかった。ダンスの中からバスタオルを驚づかみすると、祥子は部屋を出た。足下に、幼稚園に通う妹がからみついてくる。頭を撫でてやると、祥子は洗面所のドアを閉めた。一人になりたかった。この家にいると、ゆっくり一人で考える時間もない。どこから音がして、一步步けば兄弟が絡んでくる。こうしてお風呂に入るときだけ、ゆっくりと考えることが出来る。なぜ、自分はここにいるのだろう、と。どこもかしこも不満ばかりだ。服を一枚ずつ脱いで、浴室に入る。なぜ、自分がお風呂を洗うのだ。まだ裸になると空気がひんやりと感じる。なぜ、兄弟のために国立を目指すのだ。もくもくと上がる湯船に、身体を沈めた。目を瞑る。どうして、こんなにも苦しいのだ。

周りの人間は、祥子をおっとりしていると評価する。それが間違っているとは思わない。人よりは、話すスピードも、動く早さも遅いだろう。それが試合で足を引く張り、落ち込むこともある。しかし、だからと言って、何も考えていないわけではない。むしろ、ゆっくりしている分、じっくり考えているのだ。周りもよく見える。計算して優しくしているわけではない。恩を売ろうとして人を手伝う訳ではない。しかし、その裏に何も無いといえば嘘になる。いつものことだ。隠しているわけでもない。それで、いつも上手くやってきたのだ。そのためにも、今のこの状態は予定外なのだ。これからどうするべきなのだろう……。祥子は、湯気のたちこめる天井に向かって大きく息を吐いた。

\*

「なんでそんなものも取れないんだ!!」

体育館に、ヒゲの怒号が響く。祥子が髭の前の床に転がっている。その周りには何個ものボールが散乱している。それを見守る部員達は、声も出せずに傍観しているか、かろうじて励ます言葉をかけて

いるが、それは祥子の耳には届いていなかった。翌日、午前中から始まった練習試合で、やはり祥子の調子はよくなかった。朝一番に香織の顔を見たときは、笑うことで精一杯だった。部室に入ると、軽く参考書を眺めている千夏にも焦りを覚えた。そんな中でプレーが上手くいくわけもなく、祥子は散々な結果を迎えていた。試合中にも何度もヒゲの罵声が飛び、その度に祥子の気は滅入った。祥子だけではない。レギュラー全員の気持ちが全く一つにはなっていない。結局数回出場した試合はどれも相手チームの勝利で、解散となっていた。

確かに、他の仲間も調子は悪かった。しかし、メンバーチェンジをされたのは祥子だけだ。しかも後輩とだ。そして今、猛烈なレシブ練習をさせられているのも祥子だけだ。試合が終わった時は、自分への反省、後悔とともに、安心感が襲った。

これで模試に向かえる。しかし、甘くはなかった。ヒゲは祥子指名指しすると、コートの真ん中に立たせた。構える余裕もなく、すぐにヒゲは力強いスパイクを祥子に打ってきた。反射的に身体はボールを追ったが、追いつける早さではなかった。床に、腹を打ち付ける。そして、顔を上げた途端、その数センチ手前にボールが落とされた。膝建ちをしていた状態で、すぐにまた滑り込む。突きだした右手の先に、軽くボールは触れ、右の方向へ飛んでいった。それが意地悪ではないのは承知だ。練習試合で祥子が足を引っ張ったのは誰もが口にしないだけで明らかなこと。それでも、この状況は理不尽だった。

「ねえ、ひどくない？」

「……先輩、がんばれ」

コートの端にボールを追って突っ込んで行った時に、後輩の声が、まるで耳元で叫ばれたように響いた。御礼を言う暇も、余裕もないコートに戻ろうとするときには、反対の方へ次のボールが投げられる。足が纏れながらも、それを追って滑り込む。猫がねこじやらしを追っているみたいに両手を出す仕草と、今の自分がシンクロする。

人間は、猫を遊んであげようとしているが猫は必死だ。ヒゲも遊んでいるつもりなのだろうか。こんなにも必死にボールを追っているのに、ちつともボールは上がらない。いつになったら終わるのだろうか。のど元から、血の味が上がってきた。

それから模試までの時間、必死で走るもボールを上げることが出来なかった。まだ受験まで半年以上はある。いくら模試とはいえ、教室内の空気はそれなりに穏やかだった。問題をお互いに出し合う生徒もいれば、参考書を開くこともなくただおしゃべりに夢中になっている者もいる。強者は化粧さえ直している。普段よりも教師が少ない今、学校は隙間をくぐるに適した場所なのだ。このあと遊びにでも行くのだろうか。走り回った疲れで机に突っ伏しながら、祥子は一番後ろの席からクラスを見渡した。バレー部の中でこの国立クラスにいるのは祥子だけで、必然的に部活のあとみんなとも別れた。着替える暇もなく席に着いたが、それは却って有り難いことだった。あんな風に一人だけ練習させられては拷問を受けているようだった。そしてなにより、祥子が悪いと分かっているのに、何も言わないチームメイトが腹立たしかった。祥子が謝ると、大丈夫だと慰めるその口と同じくらい、彼女たちの目は呆れているように感じた。そう感じただけでもしれないが。

それでも、祥子にとってはヒゲの練習よりもその目は心を抉った。いつそ本音をぶつけてくれと思った。へたくそなら、そう言ってくれたほうがまだよかった。そしてなにより、選手交代した後輩からのねぎらいの言葉が悔しかった。机に座っていても、落ち着かない足が痛み、眠気が増す。それでも必死で鉛筆を動かすのだが、面白いくらいに一問を解くのに時間がかかる。数分頭を下げていると、時計を見た時に目を見張る。驚くほど時間が過ぎているのだ。泣きたくなる気持ちを抑えて、紙を見つめた。ぐるぐる頭の中を回る映像は、ヒゲの怒った顔と周りの視線。自分は部活に必要ないのではないかという猜疑心。代わりもいる。部活にいると、勉強が気になつてうまくいかない。勉強をしていると、部活に身が入っていない

ようで後悔が残りそうな気がしてしまう。行き止まりだ。周りのみんなは明るい未来に向かって歩いているのに、自分だけが暗闇を彷徨っているようだ。どうしたらいいのか分からない不安と、現状とさえうまく向き合えない自分が喧嘩をする。その整理も出来ずに、時は刻々と流れていく。それを止めることもできず、未来を夢見ることにも叶わない。周りの席に座っている友達が、用紙に迷うことなく答えを記入していく姿を視界の隅に捉えると、自分が情けなくなる。そんな小さなことに悩んでいるうちに、チャイムは試験の終了を告げた。

模試の出来は、最悪だった。この結果が家に届くのかと思うと、祥子は憂鬱だった。

父親はまだしも、母親は下の兄弟の世話ばかりしながらも、祥子の成績だけはきちんと把握したがつた。祥子に変な悪さをしないと踏んでいるのか、生活に対して怒ることはなかった。それを肯定するように祥子は大人しく真面目に過ごしていると自分でも思っていた。禁止されたアルバイトもせず、ライブや合コンに行ったことなど片手にも満たない。試験を終え、家に帰れるにも関わらず、祥子は足が向かなかった。帰れば、この気持ちとじつくり向き合うこともなく、ただひたすらに家事をしなければならないう。こんなに気分が沈んだ時に、行く場所がないなんて惨めな話だ。風呂だけで考えるのでは時間が足りない。この気持ちを誰が分かってくれるだろうか。そして、慰めてくれるだろう。自分を必要としてくれるのだろうか……。教室は、教師達によって閉められてしまう。一人でファーストフードの店に入れば、余計に気が滅入りそうだった。周りの騒音が、鬱陶しい。

そんな時だった。昇降口を出てとぼとぼと校舎を出て歩いていると、F1の灯りが見えたのだ。二階の隅の部室に電気が点いている。祥子の学年はすでに引退している部活が多いし、今日は模試だった。おそらくグラウンドのどこかの部活の二年生がしゃべっているのだ。

ろう。F1の鍵は、顧問が帰るときまでに返せばいいのだ。彼女たちが残っているということは、まだ時間があるのだろう。

靴の中に入っている携帯が着信を知らせる。それはバイブ音だったが、確かな振動があった。靴から取り出して見ると、そこには母親の名前が表示されていた。やはり幼稚園に行けというのだろうか。それとも、早速テストの出来を確かめようとしているのだろうか。今は、誰とも話したくなかった。とくに、責められるのは嫌だ。そつと靴に戻すと、数秒後にその振動は途絶えた。一人になりたいのに、なぜか寂しかった。誰かに話を聞いて欲しいのに、放って置いてほしかった。祥子は、F1のドアを開くと、廊下をまっすぐに進んだ。

二階とは違い、一階には誰もいないようだ。どの部室も静まりかえり、カーテンも閉まっている。鉄筋で出来たその建物は、コンクリートがむき出しだ。汗をかいて戻ってくる時や、みんなでご飯を食べているときには気にならないのに、一人でいるととてつもなく拒絶されているような寒さがあった。部室の鍵を開けて中に入った。昨日は最後にここを出たのが祥子だったので、ちょうど部室の鍵を持っていてよかった。靴を脱いで上がると、大の字に寝そべった。普段は、祥子は一番奥の隅に居て、この部室の汚さに愛想も尽きていた。京子の食べるお菓子は散乱しているし、どことなく美香の香水の匂いが鼻につく。香織はいつもボールをついているし、若菜は指摘ばかりする。千夏はふざけてばかりだ。それでも、そんなメンバーに不快感を持ったことは不思議と一度もなく、隣にいてくれると安心する存在に知らぬ間になっていた。周りの人間をそれほど気にしたことなどなかった。いるのが当たり前で、文句をいうのも、勝利を喜び合うのも、有り難いと思わなかった。しかし、祥子はここに来て初めて思った。誰かと話したい、と。

その時だった。F1の扉がまた開く音がした。寝っ転がっていた祥子は、思わず驚きで身体を起こした。ひたひたと歩く靴音。ボールを床に付く音。誰かが近づいてくる。ボールの音は、テニスボール

ほど軽くなく、バスケットボールほど重くはなかった。もしかして……。祥子が身体を強張らせると、誰かがそのドアを開けた。上半身がカーテンに隠れ、下半身だけが見える。

「……あれ？」

祥子よりも前に、向こうの人物が驚いた声を上げた。カーテンを上げて部室に入ってきた。

たのは、香織だったのだ。試験に集中するためか、長い髪を後ろでひとつにまとめている。

香織の試合での調子は決して悪くなかったはずなのに、その顔は曇っていた。

「香織……。どうしたの？ 忘れ物？」

祥子は、慌ててスカートの裾を直しながら言った。普段着替えるときには下着姿もみせているくせに、なんだか一人で大胆な格好をしているのは恥ずかしかった。しかし、そんなことをまるで気にしていないかのように香織は入ってくると、いつもの定位置に座った。

祥子が丁寧に座り直したのに対抗するように、胡座を掻いている。目の前にいる祥子には香織の下着も目に入り思わず目を逸らしてしまった。

「うっん。そういう訳じゃないの。あたし何かあると、こここうしてゆっくりしてから

帰るんだ」

この数年間、一緒にいて初めて知る事実だった。香織が帰りたくなくなるようなことを

抱えているとも思わなかったし、部室に一人で残ることなど考えもしなかった。祥子がここへ来たのは、気分がどん底にいる気分だったからだ。もしも、香織がここへよく来ていたならば、それを味わっていたというのか。気づきもしなかったではないか。

「……香織って、もっと毎日を楽しんでいるのかと思っていた」

え？と香織が鞆からノートを出す手を止めて言った。テストの復習でもしようとしているのだろう。こうして彼女は淡々と物事をこなしていると思っていたのだ。不満などひとつも抱えずに。そんなこと、あるはずがないのに。香織の口元に笑みが残る。

「……そんな風に見える？」

香織は、楽しんでいような、それでいてどこか悲しそうな表情をした。

「ごめんね。でも……。正直、香織って色んな人に大切にされている感じ。そんな匂いがする。両親に大切にされて、彼氏もいて、部活でも大事なポジションを任されて……」

「そつなく色んなことをこなして、不満がひとつもなくて、何にも悩んでないって？ いつもボールで遊んでいる暇人じゃないのかって？」

「香織……。あたしそこまで言っ……」

一気にまくし立てるように言う香織に、祥子がたじろいだ。香織から顔を背けるようにして、その顔の向こうを見る。香織の背中には小さな本棚があり、先輩が残していたものや自分たちで集めたものが並んでいる。それでも香織の勢いは止まらない。

「教師にたてついて、男と遊んで、周りを冷めた目で見ているって？ そんなわけないじゃない」

二人の間には冷たい空気が流れた。祥子は、そんなに軽く香織を見ているわけではない香織も、祥子が本当にそんなことを思っていないことなど分かっているはずだ。それなのに、動いた口は止まらなかった。祥子には、それが試合で上手くプレーできなかった事が、香織を苛つかせているのだと思った。謝ろうと口を開いた時、香織が再び言った。

「……ごめん。ちょっとイライラしていた」

香織は、前髪をかき分けるようにして手櫛を通すと、祥子の顔を見た。その声から尖った響きは消えていた。それでも、今は楽しく話せそうにない。この場所を譲ろうかと考える。しかし、



「なんだかさ、高三で思ったよりも大変だね。あたしなんて生理が来るだけで腹が立ってくるよ。全てを邪魔されている気分」

自嘲気味に言う香織には、この空気を変えようとしている雰囲気があった。祥子も、無理に声を出して笑って頷く。すると、不思議なことに少しだけ空気が柔らかくなった気がした。少しだけ。香織が、安心したように微笑む。祥子も微笑み返そうとしたその時だった。二人なら、このあと夕飯を食べて帰っても良い。そこで普段の愚痴を思う存分吐き出せばスッキリするかもしれない。祥子が誘ってみようかと思った時、足音もなく部屋のドアが開いたのだ。

誰もF1に入ってきたことに気づかなかった二人は、驚きで小さな悲鳴を上げた。しかし、もっと驚いたのは、ドアを開けた人物だった。彼女も、まさかここに人がいるとは思わなかったのだ。カーテンを開き、そこに立っていたのは、またもやチームメイトの姿だった。

「きゃああつ」

カーテンを持つて、驚いた顔をしていたのは千夏だった。元から黒めの肌は、なにやら興奮しているようで頬が真っ赤に染まっている。そして、その顔には涙の跡がついていた。

「なに、どうしたの、あんた……」

先に口を開いたのは香織だった。試合で負けた時、悔しい思いをすれば涙する。それは選手にとっては当たり前の出来事だったが、普段の生活の中で泣いている姿など見たことがなかったのだ。泣いているその姿は可哀相だった。しかし、祥子の胸は弾んだ。初めてマイナスイな感情を吐き出しあえる気がしたのだ。聞いてもらうのと分かってもらうというのは別なのだ。今なら、きっと分かり合えると思った。

「……え？　なんで二人ともここにいるの？　っていうかさ、もう最悪！」

千夏は、目元を手で拭いながら部室に上がってきた。彼女がどこから泣いてきたのか気になったが、聞ける雰囲気ではない。香織が

広げていた自分の荷物を引き寄せ、いつもの千夏が座る場所を空ける。そこにどつかりと腰を下ろすと、千夏は言った。

「ねえ、あたしたち受験生だよな？」

香織と祥子は、いきなりのその言葉に思わず顔を見合わせたか、頷いた。それを確認して満足そうに千夏も頷き、あとを続ける。

「別にさ、受験して大学に行かせて貰えるのも有り難いことだし、恵まれている。そんなこと分かっているよ。特別な待遇なんて望んでいない」

うんうん、と二人も相づちを打つ。

「でもさ、親ってなんであんなにもあたし達の気持ちを分かってくれようとしなないわけ？」

香織には、千夏が怒っている理由が分かった。数日前、彼女は両親と喧嘩したと言っていた。それが部活をいつまでやるのかという些細な言い合いから発展し、家での態度に拡大したということも。反抗したいわけではない。どこかで自分に非があることも認めているのだ。それでも、大目に見て欲しいというのは甘えか。自分がとても苦しい状態にいて、精神を安定させるのも一大事だと分かっている。貰おうとするのは我が儘なのか。香織は、それが千夏の我が儘だとは思えない。しかし、それならば自分はどうなのだろう。家族に對しての文句を言っているわけでも、金銭面の文句を言っているわけでもない。それなのに、なぜ……。どうして、将来選ぶ仕事を否定されなくてはいけないのだろうか。香織が考え込んでいると、千夏が投げやりに言った。

「香織。あたしさ、この間親と喧嘩したじゃない？」

祥子にも心当たりはあった。千夏が部室に早く来て、髪を濡らして沈み込んでいた時だ。

「うん。あ、祥子。この子がドライヤーここで使っていたでしょう？ あの日よ」

香織が祥子に向かって言うと、千夏は思いきり顔をしかめる。そうだった、と呟きなが

ら両手を打った。

「そうなの！ 前の日の夜に喧嘩してね。お父さんがすっごい怒鳴ったわけ。もう殴られ

そうな剣幕で。信じられる？ あたし、女なんだけど！」

千夏は、他の部活の生徒がいないのをいいことに、叫んで怒りを吐き出した。それは廊

下まで突き抜けるほどだ。祥子は、二階にまで聞こえているのではないかと、若干心配になる。怒られることはないが、ここで喧嘩していると思われても堪らない。

「でも、百歩譲って……。百歩譲って自分の悪い所を見つめ返したのよ。それだけでも進歩でしょ？ 親に謝ろうと思っただの！ だって、家中の空気が悪いのよ。それを親の両方があたしのせいだ、みたいな目で見るの！ 目が、責めているの！」

両親のその目を思い出したのか、千夏は壁の一点をただ睨み付けている。彼女にとっては、今何を見ても敵に見えることだろう。

「それが、どうしてあんたは怒っているわけ？ 反省したんじゃないの？」

香織が、先を促す。促し方としては褒められた言い草ではないが、千夏を現実に戻すことには成功したようだ。鞆の中から無造作にしまわれた箱を取り出した。

「これ……買ったのに」

その箱に記載されている名前は、有名なケーキのチェーン店だ。しかし、その箱はそこかしこが潰れている。千夏は、怒りを吐き出し過ぎた。怒りを通り越して、それは悲しみに変わり涙を零し始めた。「これ、買ったんだよ。これを食べて仲直りしようと思ったのに……。試験終わって疲れているのに……。三十分も並んで買ったのに……。」

「うんうん。凄いな。偉いな」

祥子が千夏に近寄りると、その頭を撫でる。意外と彼女の髪質は細く、撫でているのが

気持ちよかった。しかし、悔しそうに眉をひそめるその千夏の顔は、泣き叫びたいのを必

死で堪えているようにしか見えなかった。

「お父さん達はどうしたの？」

千夏の様子から、神妙に謝る作戦が失敗したのは間違いない。祥子の問いに、千夏は鼻

水を嚙る音でまずは答えた。次に、祥子が悪者のように睨みつけたかと思うと、その顔は

ぐしゃりと歪んだ。それは一瞬で出来事だったはずなのに、祥子の目には千夏の顔が右側

からゆつくりと潰れていくようにスローモーションで見えた。

「……いない」

そうして、その箱をずいっと祥子と香織の前に押し出した。香織は、わざと気にしてい

ない風を装って箱を開けた。せつかく買ったのにもつたいない。しかし、千夏を苦しめる

ものなら早く消化してしまったほうがいいのだ。そのほうが気持ちをおさめるのも早いだ

ろう。香織は、箱の中にある潰れたシュークリームを手を取った。周りの生地は潰れ、中

からカスタードクリームと生クリームが漏れてベトベトだ。ただ、ケーキでなくよかった

と思った。ケーキならこれではすまなかったはずだ。汚れてしまった鞆のように、千夏

の心は荒んでしまっただろう。

「はい。もう食べよう。」

香織は、祥子と千夏に一つずつそれを渡した。箱の中には三個しか入っていない。

「ありがと。二人も気にしないで食べて。でさ、あたしが部活やっていて、今日が模試な

の、親は知っているわけ。普通さ、おいしい夕飯でも作っておいてくれない？ それであ

たしがこれを出して、謝る。仲直り。上出来なシナリオでしょ？

それが、さっきメール

が来たの」

「なんて？」

聞きながら、香織がシュークリームにかぶりつく。手の端からこぼれ落ちそうになった

カスタードを舐め取る。

「ちよっと待ってね」

千夏は、汚れた手の指先をティッシュで拭き取ると、ポケットから携帯を取り出した。

床に開いて置くと、人差し指だけでボタンを押し、メールの画面を開いた。

「えつとね。今日はお兄ちゃんのところに行きます。泊まりです。

……それだけ。改め

て見るとまた腹が立つな」

千夏から喧嘩の内容を聞いていない祥子にとっては、それほど怒ることなのかと一瞬首

を傾げそうになった。それを行動には移さなかったものの、顔に表れてしまったのだろう

香織が困ったように笑った。

「この間の喧嘩の時ね、お父さんが最後に、お兄ちゃんはそんな子供じゃなかったって言

ったんだって。千夏のお兄ちゃん、この春大学生になったけど、すごいいい大学入ったし

ね」

頬を膨らませながら、千夏が香織を見る。しかし、香織は肩を竦めただけだ。事実ですよ、とばかりに。

「そっか……。そうなんだ。千夏も大変だね」

「そうだよ。だってさ、お兄ちゃんに対してあたしがコンプレックスを持っているのは親も知っているんだよ？　その上、その対象物と比べる暴言を吐いて、すぐにそこへ二人で泊まりに行くってどうなのよ！？　あたしは、何！？　部活もやっちゃいけないわけ？

そんなにいい大学に入るべき？……もうやだ。それで、ちよつと拗ねてここに来たの。本当に偶然。一人で家にいるのもなんか嫌だし、話を少し落ち着いたのか、千夏は手についたシュークリームを舐めた。味は、評判通り最高だ。自分が安定すれば、この場の違和感に気づく。今日の部活は終わったのだ。なぜここに三人も集まったのだろう。

「あれ？　どうして二人はここにいるの？　あたしは鍵がなかったから半分諦めていたの。鍵が閉まっていたら、廊下のござの上で休んで帰ろうと思っていたんだよ？　まさかこの顔で電車に乗れないし」

千夏が、香織の顔を見る。香織も、最後の一口を大口で食べ終わると、もぐもぐと口を数回動かした。ごっくん、と喉を鳴らして飲み込むと口を開く。

「私もそう思っていた。でも、試しにドアを開けてみようと思ったの。それに、なんだか気配を感じたというか……。吸い込まれるように来たっていうか」

香織が、今度は話し始めた。

「そうしたら、ドアが開いて中に祥子が座っていたのよ。私も悩みがあつてここでゆっくり考えようとしていた。……実はね、今まで黙っていたけどうちの親、刑事なの」

この告白は、F1を揺らすほどの衝撃を与えた。千夏と祥子は、今まで暗かった空気を吹き飛ばすように思い切り驚きの悲鳴を上げる。耳が裂けそうになり、香織は両手で耳を塞いだ。

「それにね。うち、お母さんが死んじゃっているんだよね」

次の告白は、今度は部屋の空気を一気に暗くした。丸二年一緒にい

て、誰にも言えなか

ったのだ。もちろん友達を家に呼んだこともない。同情されるのが、嫌だった。香織に気

づかれないように、千夏と祥子が一瞬視線を交わす。経験してない物にはなんと言葉をかけてあげればいいのか分からない。

「私の悩みはまた千夏と違ってさ。比べられる兄弟もないし、父親は家にほとんどいな

いから自由だし、これって普通は文句ないよね。でもね、だからといってそれなら私の進

む道くらい自分で決めさせて欲しいの。でも、そこだけは譲ってくれない。どうして頭ご

なしに反対されなきゃいけないのよ。父親だって同じことしているくせに。信じられない。

腹が立つ、というか、虚しいよ。反対するというなら、父親は今の仕事に誇りをもっていないんでしょね」

今度は、香織の前で千夏が大きく頷いた。

「何を言っているの！ いいじゃん、かつこいいじゃん！ 刑事。女刑事。拳銃もってさ、犯人を追いつめるの！」

香織はふつと息を吐いて微笑む。その横顔は、祥子から見て同じ歳とは思えないほど大人びていた。普段、香織がどこか同学年より一歩先を歩いている感じがするのは、そんなことが由来しているのだろうか。祥子は、黙って聞きながら考えた。

「千夏。刑事だからといっていつも拳銃を持てるわけでもないし、そんなに凶悪な事件ばかりあったら大変でしょう？ 刑事なんて言うほど危険じゃないのよ。大事な場面で切り抜けさえすれば。たとえ、もし仕事で死ぬことがあったとしても……それはそれよ。残される者の気持ちなんて考えていたら、働けない」

「まあねー。そうかもしれないね。いいじゃん、やりたいことをや

ろうよ！」

千夏は、さつきまで怒っていたのが嘘のように輝いた顔をした。香織の方へ拳を突き上げているのだから、どうやら気分が盛り上がっているのは間違いないらしい。しかし、祥子にはそれが小さな問題だった。

「自分のために進路を決めるのって、当たり前だと思う。それに、やりたい仕事を見つけるのも大切なことだと思う」

祥子が、手の汚れを見つめて言うと、視界の隅で二人が祥子を見つめるのが分かった。意図せずとも、その声はどこか緊張してしまつたようだ。そして多少の嫌悪感を含んでいたのかもしれない。

「……でもさ、香織。結婚したらどうするの？ ううん。それよりも前、刑事になって彼氏が出来たら心配させても平気？ もっと前、今よ。今この時、もしも達也くんに嫌だつて言われたら？」

「……達也？」

香織は、意外にも言葉を失った。いくらか視線を泳がせたあと、いつものように少しだ

け肩を竦める。香織にとっては、達也など今この時を形成する一部分に過ぎないのだろう

か。父親が刑事で、母親がいない。その事實は驚きをもたらしたが、祥子にはただ羨まし

かった。好きな人が側にいてくれるのに、職業などなんでもいいではないかと思つてしま

う。香織は、何が大事なのか分かつていないのだ。祥子は、そう思いながら香織の答えを

待った。

「……達也ね。分からないよ」

そう言い、考え込む香織に、祥子はどこか虚しくなつた。自分ならば、もしも達也と付

き合つたなら、まずは彼の気持ちを先に考えて行動するだろう。それは、毎日の日常においてから、将来に渡るまで。付き合えば、そ



れが当然ではないのか。その考えは育った環境が影響しているのもあるだろう。普段から相手の顔を窺い、そしてなにより周りの迷惑にもならず、少しでも役に立てばと思う祥子なりの考えだった。香織はそのあと、頭を悩ませているのか口を閉ざした。

「まあ、それじゃあ。香織の問題はそれとして。祥子は何を悩んでいるわけ？」

千夏が、今度は祥子に視点をあてた。まるでカウンセラーにでもなったように、胸の前でしっかりと腕を組んでいる。祥子は、言葉に詰まる。祥子の問題は、二人と違ってそれほど大きなことと思えなかった。ましてや、達也に関してのことを香織に言うわけにいかない。

「実は、あたしそんなに大きな理由があるわけではないの。でも、すべてにおいてバランスがうまく取れないだけ」

「バランス……？」

千夏が繰り返し、香織も祥子をじっと見つめた。

「……うん。バランス。二人の問題と似ているとも言えるけど、一番大したしたことないし仕方ないこと。家も勉強も、……部活も。家、兄弟が下に三人もいるでしょう？ 学費がかかるから、出来れば国立に行きたいの。でも、今そんな勉強する時間ないでしょう？」

「分かるよ。それだけでストレスだね。……で？」

千夏は、元気が出てきたようで、食べ終えたシュークリームの箱を丁寧につぶし始めながら聞いた。

「うん。それで、最近は勉強をしても部活のことが気になって集中出来ないの。でも、部活に来ると勉強が気になってしまうの。どっちもうまくやりたいのに。それに……」

祥子は、恋愛の不安定さもうち明けそうになり、慌てて口をつぐんだ。話をすり替える。

「練習……。練習試合ね、今日もめちゃくちゃだったでしょ。身が入らないの。確かにあたしがへたくそで迷惑をかけた。でも、後輩にチェンジをされた。それなら……、あたしはこの部活にいない

んじゃないかな……って」

話が進んでいくうちに、祥子は涙ぐみ、千夏は目を見開いた。

「何を言っているの……？」

先ほどの様子と一転、千夏の言葉には少しだけ剣があった。千夏は、自分が部活において勉強する時間がないので迷っただけだ。自分の存在価値に悩んだことはなかった。

しかし、目の前で泣いている祥子は自分が必要ないと悩んでいるというのだ。理解出来ない一方で、それが間違った判断だというのが千夏には分かる。それを言葉で順番に説明したいのに、怒りの方が先に沸いてきてしまう。それをフォローするように香織が引き継ぐ。「祥子。確かに、あんたの今日のプレーは最悪。足は動かない。声は出ない。相手からの攻撃スパイクも、確実に狙われていた。あれは交換するしかなかったよ」

香織の指摘は容赦ない。しかし香織のいいところは、あとに救いの言葉も待っている。

「でも、それはよく分かるよ。つまり、祥子は間違っていないって事」

「間違っていない……？」

祥子が首を傾げる。千夏の反応が当たり前だと思っていたので、若干驚いた。

「そうだよ。誰でもこの時期不安になっている。受験だけでもよ。それなのに、うちの部

はあと二ヶ月以上は最低でも拘束される。どれも完璧にこなしたくなればなるほど不安に

なるのよ。適当な人間ならそうはならない。別に祥子が弱いわけでも、へたくそなわけでもない」

「ちよつと、香織。香織だって分かっているでしょ。この子のこの雰囲気チームを支え

ているよ。負けそうでみんながピリピリしている時も、この子がみ

んなを励ましているじゃない！　いらなわけない。それをこの子はちつとも分かっていない！」

千夏が香織に食ってかかる。それを冷静に頷き返すと、香織が言う。「だから、言っただしょ。今日は最低だったけど、間違っていない。今は、祥子が自

分を必要じゃないと思いこんでいるということ、私達が必要だと言うこと。この二つが

正反対の位置にあるかは別問題よ」

「ああ、もういい。香織の言うことはたまにややこしいよ。難しいから簡単にして続けて」

千夏が、さじを投げる。それを聞いて香織は笑った。

「千夏が言うこともたまにややこしいよ。つまりね、ここであんな私達が祥子が必要だよ！

と言っても変わらないって事よ」

祥子も、首を傾げる。自分の気持ちさえも、分析など完璧にできないのが普通だ。千夏

が、ぎゅっと目を瞑り最大限に脳を使って絞り出した答えを言う。

「つまり、こういうことかな。私達にとって祥子は必要だけど、それを自分で認めなければいけないってこと？」

香織が、持っていたボールを千夏に投げた。それを千夏が受け取り、足の上に乗せる。

「正解。そこよ。今千夏が言ったように、祥子は不安になっているの。ううん。これは私達二人にも言えることよ。不満は不安に繋がるし、ストレスはマイナス思考にもなる」

「あたしは、お兄ちゃんと比べられるのを嫌がっている」

「そう。絶対に聞けば親は答えるよ。千夏の両親だってね。あなたもお兄ちゃんも同じくらい大事なの。でも、そのままそっくり信じられる？」

「うーん、信じないわけではないよ。でも、行動は伴っていないと思うな。少なくとも。……今日のことを見てよ！」

また熱くなり始める千夏に、香織は両手で制止をかけた。

「まあまあ。そういうこと。言葉って大事だけれども、言葉だけでは不十分なのよ。結局ね。私だって……まあ同じようなもの。うちは言葉にも辿り着かないだろうけどね」

香織は、大きくため息を吐いた。香織でさえも、不安になるときはたくさんあるのだ。

「じゃあさ、どうしたらいいと思う？」

千夏が、香織に言う。

「え？」

香織は、ここまで論じたものの、だからと言って解決法があるわけではなかった。千夏の膝からボールを取ると、それを指で回しながら考えた。どうすれば、自分の存在を確認出来るだろう。これから未来へ向かって歩む道を、確実に選べるだろう。そんな方法、あるのだろうか。

「ねえ、結局はわたしが強くならないといけないのかも……」

祥子が、さらに落ち込んだ声で言う。香織も頷く。

「確かに、自分で自信を付けないと前には進めないよ。でも、今はその自信の付け方もわからない。そうでしょう？　がむしゃらにボールを追っても、鉛筆を持っても、胸につかえが あつたら集中出来ないよね。打ち込む時は、とことん！　……よし。それなら、自信をつけさせてもらえばいいんじゃない？」

香織の言葉に、千夏は驚いた。

「どういうこと？　戦争でもするつもり？」

千夏が言うと、香織はボールを回すのを止めてにやっと笑った。口角だけが上がっているのを見て、祥子の背筋が寒くなる。

「戦争か……。それもいいかもね」

香織は、片手を顎の下に置いて考え始めた。部屋の中には、食べ終えたシュークリーム

の甘い匂いが広がる。

「ちよつと……。あたし今日淒くむかついていたけど。結構スッキリしたよ。戦争なんて。そんなこと出来るの？」

千夏は、威勢はいいが、引き際も早い。強気で飛び出す割には、びびって逃げ帰る試合  
もしばしばだ。

「出来るかは分からない。作戦もないけど、とりあえず考えてみるのも面白いね。これも  
ひとつのストレス解消よ」

そう言つと、香織は楽しそうにくくと笑つた。釣られて千夏も口  
だけ笑みを浮かべる。

「だから、千夏が祥子を怒る理由はないの。だって、祥子は間違つ  
ていないんだから」

千夏は、口に浮かんでいた笑みを引つ込め、罰の悪そうな顔をし  
た。小さく謝る。

「いいよ。千夏がそんな風に思ってくれていたのは嬉しかったし」  
祥子が大げさに両手を顔の前で振ると、香織は笑つた。そして千  
夏に向かって言う。

「じゃあ、今のこの場面を文学的名言で表してよ。千夏」

「はあ？」

香織の言葉に千夏は一瞬たじろいだが、すぐ握り拳を作つた右手  
を突き上げてに言つた。

「『人は得てして自分の不幸に敏感なものである！』かな」

思いの外千夏の声は大きく、演劇部にでも入れそうなほど抑揚の  
付けられたものだつた。

しかし、名言とは知る人ぞ知る、理解出来るからこそ意味のあるも  
のだ。これを二人が

知る由もなかった。香織がすかさず突っ込む。

「それ、何？ 誰の使い回し？」

千夏は高く宙を彷徨う右手を下ろし、苦笑いをした。祥子は今日この部屋に来て、何度首を傾げたことだろう。

「これは日野原重明という作家兼お医者さんの言葉よ。まさに今のあたし達。どう？」

「間違っではないけれど、今のあんた凄い顔をしていたよ」

声を上げて二人が笑う。そんな彼女たちを、祥子は少しだけ呆れた気持ちで見つめた。

戦争など出来るはずない。やはり自分の悩みが一番大きい気がしてきて、祥子は一人溜め息を吐いた。

## 5 第四次戦争

京子は、お弁当を食べ終わるとすぐに日の当たる教室にやって来た。ここは進路指導室と違って部屋中に太陽の光が降り注ぐ。廊下を、数人の女子生徒が楽しそうに笑いながら過ぎて行くのが聞こえた。グラウンドからは、昼休みに練習する部活の音が響く。温かい春、光を浴びるだけで瞼が重くなる。しかし、目を閉じたところで、頭の上から声が振ってきた。

「おい、お前。練習さぼっているくせに、ここで寝るのは許さないぞ」

京子が、机につきそうになった頭を上げると、目の前には見慣れた顔があった。

「せんせえ……。でも眠い。こんなに日当たり最高の部屋にいるなんてずるい……」

「あほか！ そんなに眠いなら早く部活へ行け！ お前、昨日の練習で、まだ肘が曲がっていたぞ。スパイクを打つ姿勢はこうだ」

そう、ここはヒゲの担当する日本史の教師がいる資料室だ。日本史を専攻している京子は、月に数回授業の後にこうしてヒゲに補修をしてもらうのだ。特に日本史の点数が著しく悪いので、ヒゲも京子が昼の練習を休んで来ても文句は言わずに教えてくれる。それほど、京子の点数は危険指数なのだ。しかし、実際京子は日本史が苦手な訳ではなかった。

「はい」

そう言っ、京子も机に座ったまま腕だけを振り上げる。時々、こうして補修をしているうちに、最後はバレーの補修をしていることもある。だが、それも京子にとってはさして問題ではなかった。ただ、ヒゲには問題のようだ。再びスパイクのフォームを練習しかけた京子を横目で眺めると、すぐにヒゲは自分の前に並べていた教科書を閉じたのだ。

「お前。本当に体育館へ行け。今すぐ走ってこい。スパイク五十本だ。夕方の練習までに治せるようにしておけ」

髭は立ち上がると、京子の右腕をそのまま掴んで立たせた。そうして二人が並ぶと、モデルをする京子のほうが大きかった。多少視線を下げて、京子が不満そうに髭を見た。男の目はごま粒のように小さく垂れている。どれくらい周期で剃っているのかは不明だが、鼻の下の髭は自由にのさばっている。薄い唇に、薄くなりかけている毛髪。人から見れば、ただのオヤジに過ぎない。それでも、京子は食らいついた。

「先生。でも、今度の日本史の成績が悪かったら、どうしてくれるの？」

京子は、教科書を嫌々胸に抱えながらヒゲに言う。ヒゲは、左手だけを机の上に置いて言った。

「知らん。お前、もっと勉強しろ。部活終わって帰ったら、すぐに寝ているだろう」

「もしかして……。見ている？ あたしの部屋……」

京子が首を少し縮めて、まるで不審者扱いをするように目を細めてヒゲを見た。それが

癪に障ったのか、ヒゲはさつきよりも大きな声で言った。

「ほら！ 勉強しないなら早く部活へ行け！」

今度は立ち上がり、京子の背中をぐいぐい押す。そうなのは、もうここに居るわけに

はいかなかった。他の教師は、大体昼休み職員室にいたので資料室は二人だけだ。もしも

誰かに見られたら、京子は怪しまれるだろうか。部活の顧問と部員。日本史の教員と生徒。その間には、数ある他の教科の担任よりも密接な線ができあがる。多少甘くなるところ

もあるし、その線があるがゆえに無駄な仕事を任されることも多い。それでも、京子にと

ってはそれが嫌なことではなかったのだ。ここへ来ることが一つの



目的。ここでヒゲに会

うことが、一つの安定剤だったのだ。決して報われることはない、この儚い気持ちのゆく

えはどうなるのだろうか。その答えを貰えぬまま、結局京子は資料室を追いだされてしま

った。背中すれすれのところでドアを閉められる。京子がその中を振り返り、ドアにはめ

込まれたガラス窓から中を見ると、ヒゲが太陽の光の中をすでに背中を向けて座っていた。

こんな挑戦を繰り返して何になるのだろうか。京子がここへ来る目的を、ヒゲは分かって

いるはずだ。しかし、無言でそれ以上先へ進むことは拒絶する。言葉にしたわけでも、されたわけでもない。それでも、ひとつひとつ、些細な動作で意図してくるのだ。たとえば、今日もそうだ。机の上に乗せた左手はわざとだ。京子に左手の薬指に嵌る指輪を見せるためだ。無言の圧迫。その意味を理解すると、何も言えなくなってしまう。ヒゲはそれを承知であり、それを納得した行動を求めているのだ。京子はこの関係をどうにかしたいと思っているわけではない。しかし、気持ちだけでも知って貰いたいと願ってしまう。それも、報われないのだ。

「あれ？ 京子？」

呼ばれた声にびくつと肩を奮わせ振り向くと、廊下の隅から美香が顔を出した。階段を上がってきたのだろう。ジャージ姿で、おだんごに結んだ髪の毛からは何本かが肩に落ちている。昼の練習メニューを終えたのだ。頬は赤く、息も上がっているようだ。

「休むって聞いたけど、やっぱり日本史か！。苦手なのが受験教科だときついよねー。あ、一緒に部室行こうよ！ ちょっと待ってて」

京子の手の中にある教科書に視線を走らせると、美香は渋い顔をして言った。

「あ、ごめんね……」

こうして仲間が頑張っている姿を目の当たりにすると、自分が無駄にさぼっている罪悪感で押し潰されそうになるのだ。しかしこの気持ちを誰かに話すことも出来ず、うち明けたところで分かっては貰えないだろう。気持ち悪がられたらどうしようと不安になる。

「いいって！　ちよつとそこにいてね！」

美香はすつと京子の脇を通り抜けると、資料室のドアを三回ノックした。返事が聞こえ

る前にドアを開けると、すつと顔だけ覗かせる。顧問が参加しない朝と昼の練習は、こう

してメニューを終えるとキャプテンが報告に来るのが習わしとなっている。それを美香が

今まで長い月日やり続けていたのは知っていた。しかし、こうして手慣れた動作でこなさ

れると、どうにも羨ましくなる。二人の、お決まりの作業になっ

ているのだろう、と。だからといって自分がキャプテンに向いているとは思えない。責任感があるわけでも、他人

より声を出すわけでもない。

セッターに上げられたボールを、打って決めるだけだ。それも、この身長のおかげで。

そんな卑屈に物事を考えていると、美香が資料室から顔を引っ込めた。美香の報告をす

る声のあとに、ヒゲが何かを言ったがはつきりとは聞こえなかった。美香が返事を返してドアを閉める。すると、勢いよく京子の方を向いたかと思うと、走って抱きついてきた。

「うわ！　美香、あたし制服！　汗つくじゃん！」

京子が身体を離そうとすると、それでも美香は腕を掴んできた。「ヒゲがねー」

その言葉に、一瞬京子の身体が固まる。しかし、次に放たれた言

葉は現実でしかなかった。

「夕方の練習は、京子に最初スパイク五十本打たせろってー。きついねー」

最後のあの言葉は、そんなにくだらな内容だったのだ。思わず、京子のため息を吐く。それを、スパイクを嫌がっているのだと勘違いした美香は、自分よりも十センチは高いであろう京子の頭に手を伸ばして撫でた。

「大丈夫、おまけしてあげるから。さ、ちょっと部室行こう。まだ昼休み少しあるし」

部室を使う時間は、もう残り限られている。自分たちが引退すれば、あの部屋は後輩のものになるのだ。自分たちの皆のように思っていたが、結局は一時的な回し物。そう思うと、なぜかそのあと少しの時間を大事にしたくなる。しかし、美香がこんなにも部室に誘うことは珍しい。

「ねえ、どうしてそんなに部室行きたいの？ 夕方でいいよ。なんかお腹空いちちゃった……」

京子は、諦めて自分腕を美香に絡めながら言った。頭を撫でられたら、少しだけ甘えたくなった。力が抜けた半身を美香に預け、階段を下る。体育館までは、あと一つ階段を下りるだけだ。

「そう言うと思った。あのね、千夏が京子のために購買でお菓子を買っただけだよ」

その言葉に、京子の目が輝いた。

「早く行こう！」

今度は、美香を引っ張るようにして歩く。お菓子があるならば、一刻の時間も無駄には出来ない。全てを腹におさめたいではないか。「でね、なんで部室に行くかっていうと、今面白い話があるわけ」美香が、先を急ぐ京子の背中に言った。京子は階段を駆け足で下りると、美香を見上げて眉をひそめた。

「……面白い話？」

「うん。ここだと誰かに聞かれるから、部室に行って話すよ。多分、香織が上手く説明し

てくれるんじゃないかな」

そう言っていると、美香は歩きながら頭のおだんごを整え始めた。

部室では、すでに緊急ミーティングのような雰囲気だった。とはいえ、下学年の後輩が

いるわけでもなく、そこは部活前の談笑とさほど変わらない。違うことといえば、メンバーが定位置に制服で座り、真ん中には一リットルのペットボトル入りジュースと紙コップが並べられている。誰かの誕生日でもないはずなのに、こんなにきちんとコップが準備されていることは未だかつてない。

「……何？ どうしたの？」

部室のドアを開けた途端、四つの顔が自分に集中したのに、若干京子は驚いた。その背中を美香がそっと押して中に入れた。

「閉めて、閉めて」

二人が入ると、千夏がドアをしつかりと閉めたことを確認する。昼の練習を終え、後片

づけをしている他の部活の声が、廊下から聞こえた。お菓子を中心に、円陣を組んで座る。

しかし誰も、何も話さない。京子の目には、好物のビスケットにチョコレートが乗ったお

菓子しか見えなかった。そっと手を伸ばす。さっき美香は、千夏が買ってくれたといって

いたはずだ。だが、その手が袋に触れた時、千夏が言った。  
「……待つて」

京子の手が宙で止まる。他四人も相手の顔色を窺うかのように顔を見合わせている。

「京子、これは作戦会議なの。ただお菓子を食べる集まりじゃないよ」

京子は、何のことか分からないまま出していた手を引っ込めた。作戦会議。バレーの試

合についてだろうか。それならば、余計お菓子を食べながらの方が頭も働かし、体育館の

コートで練習しながらのほうが効率的だ。

「作戦？ 県大のフォーメーションとか？ あたしのスパイクが最近鈍っているのは認め

るよ。とりあえず、夕練もスパイク五十本も入るし」

そう言ってから、京子は美香を確認するように見た。美香は、京子にお構いなしにお菓子

子だけを見つめていた。なんだ……。なんだというのだ。

「……実はね、京子。最近、ストレスない？ 家に対してとか。学校、受験に対して」

香織が、今まで下げていた視線を京子に合わせて言った。

「ストレス……？」

お菓子にいつ手を伸ばそうかと考えていたが、京子は膝の上で両手をぎゅっと握る。香

織は京子の言葉に頷いた。そして、千夏へと視線を移す。

「そう。ストレスだよ。京子、さっきも日本史を聞きに行っていたんでしょ？ 京子は

モデルもしている。勉強して部活。それだけでも大変でしょう。時間が足りない。それな

のに大人達はすべて完璧にこなせとうるさいじゃない。自分たちは何が出来ているのよ。

……とにかく、自分の価値を見いだして、周りに必要とされていることを確認してみない？

大人達はおしつけるだけでしょ？ あたしたちだって怒っている、自分の意志を固める意

味を込めて爆発させてみようよ」

千夏が張り切って一気に言う。彼女の中では、何か一大イベントが

始まりかけているよ

うだ。だが、訳が分からない。京子は、困ったように香織を見た。  
「そついうこと」

香織も肩を竦めて一言付け足す。京子は、祥子と美香と若菜を見たが、三人とも異論は

ないようだ。大人達を心配させる……？京子にとって、なぜそんなことをするのか理解で

きなかった。疑問を一つずつ頭の中で整理して口に出す。

「ちよつと待つて……。みんな何を言っているの？ そりゃ、あたしはモデルも忙しいけ

ど、やれる範囲だけだから辛くはない。それに高校を出たらもつと自由に出来るようになる

るし今は別にいいの。受験も……、日本史はそりゃ点数が取れないからあんな補修みたい

なことをしているけど。やめようと思えばヒゲも何も……言わないと思う」

周りには敢えて言わないが、京子が自分から押し掛けているようなものだ。ヒゲは、京

子が行かなくとも恐らく心配などはせず、むしろほつとするだろうと考えて少し悲しくなる。

「それに、うちの親は放任主義だし、いい大学に入れとも言われな

い。将来は不安だけど、

悲観はしていない」

京子は、助けを求めるように美香を見た。部室に連れてきたのはこんなことが理由だと

言うのか。くだらない。今すぐ腰を上げようとする、祥子がそれを見破ったのかコップ

にジュースを注いだ。半ば、京子の手に押しつけるようにして引き留める。

「え？　じゃあ、京子は毎日に不満はないの？　この息苦しくて、狭苦しい世界に満足している？」

美香が、初めて意見を述べた。助けを求めるつもりが、押されてしまふ。しかし、それ

は押しつけるようなものではなく、あくまでキャプテンの立場と同じだった。京子の根本

的な、心の潜んだ潜在意識を引き出そうとする。美香はセッターだ。周りの人間の技術を

よく見ている。アタッカーがどの位置にボールを貰えばいいスパイクが打てるのかを熟知

し、それを引き出す。自分でも気づかないものを、美香は呼び起こすのだ。それは静かで、

的確だった。京子は渋々頷いた。ジューズを一気に胃へ流し込む。

「んー、ないわけではない。でも、みんなはどんな不満があるの？」その問いに、周りが顔を見合わせた。これは、京子がここへ来る前にすでに話し合われ

たことなのだろう。香織が回りに目配せすると、小さな咳払いをしてから話し始めた。千

夏が家で兄弟と比べられる上に、受験のストレスで部活に集中出来ないこと。香織が刑事

になりたいのに、父親の反感を得ていること。そして、祥子は国立に行かなければいけな

いプレッシャーと家族の手伝いに追われている。さらに、部活での存在意義まで見失いか

けていること。一時は愚痴を言うだけでスッキリしたが、若菜と美香に話したら、なにか

楽しみながら大人達に反抗する企てに話が発展したことを説明してくれた。香織が、そん

なことを言い出すのは京子にとっては意外だった。彼女は、どこか

周りとは違っしてしうけた部分があると踏んでいた。ダメなら諦める。反抗されたら上手く切り抜ける。それが彼女をより大人っぽく見せていると思った。しかし、この話をしてる時の香織は、真剣な癖にどこか子供っぽかった。おもちゃを取り上げられて泣いている子供のようにも見えたし、それなのに目は輝いていた。香織が全て話し終えると、京子は言った。

「大体分かったよ。ちよつと午後の授業で考えさせて。私には、それが意味のあるようにはまだ思えないの。でも……、みんなが困っているし、何かしてみたい気持ちもあるのは確か。今日の練習が終わつたら、私なりの答えを言うよ」

京子は、それだけ言うつと我慢できないように菓子の袋を開けた。中のクッキーを口の中

へ放り込む。かみ砕く音が部室の中に響いた。

校庭にも響く音で、予鈴のチャイムが鳴った。それぞれが教室に帰らなければならぬ。

固まつて部室を出たが、朝とは違つてそのうちに別れて階段を上るのが常だ。京子が歩いていると、後ろから美香がやつて来た。

「京子！　ねえ、なんとなく部室に連れて来ちゃったけど、無理はしないでね。何か行動を起して、先生や親にばれて怒られることになるつと、推薦を希望しているなら内申に響くでしょ。やばいよね」

参加しないのもあり、ということか。京子は曖昧に頷く。

「うん。分かつている。でも、私推薦は狙つていないの。だからといって、あまり張り切つて賛成でもないのよね……」

京子は、校舎までの道を歩きながら、ため息を吐いた。メンバーに言つた言葉は事実だ。そこまで反抗する理由は、今の京子に見当たらないのだ。



「まあ、順調に物事が進んでいるならいいんじゃない。幸せなことだよ」

美香は、綺麗にまとめたお団子頭を、縦に揺らして頷いた。外見が整っているがゆえにモデルが出来ても、そういう才能がない京子には、美香の髪のアレンジ力が羨ましい。どうなっているのかを、覗き込むようにして見た。

「といっても、幸せを感じるほどでもないんだけどね。そういえば、美香は何の問題あるの？」

京子達は、体育館からの渡り廊下を抜け、校舎に入った。北向きであるこの場所は、じめつとしていていつも寒い。美香は、京子の問いに一瞬顔を曇らせたかに見えたが、次に窓からの光に顔を照らされた時には、その表情はいつもと変わらなかった。一瞬白目をしてとぼけると、京子の肩に腕を回す。

「まあ、我が家にも色々あるってことよ」

美香の曖昧な返事に京子も深く聞こうとはしなかった。先ほどの三人の話を聞いただけでもかなりお腹がいっぱいだ。それでも、本当の自分のお腹はまだ幾分余裕がある。京子は、授業が始まるまでもうひとつお菓子が食べられないかと頭の中で算段してみる。

「でも、京子って恋愛については不満がないの？」

「え……？」

京子は、驚いて美香を見たが、彼女はもう笑っていた。京子の絡めた腕に、ぎゅつと力が入る。

「……そういえば、最近ヒゲもきついことやらせるよねー。ま、試合が近いし当然だけどさ。あたし達のありがたみも分かってほしいって。本当に」

聞き間違いだろうか。京子は、自分の好きな相手を誰かに相談したこともないし、態度には充分気をつけているつもりだ。

「あ、教室着いちゃった。じゃあ、また放課後ね」

「え？ ちよつとっ……」

美香が言ったことはどうということなのだろうか。京子の隠してい

る気持ちを知っていてあんなことを言ったのか。知られてしまったのかと思うと、急に心臓が高鳴る。さつさと教室に入っていてしまった美香は、すぐに他の友達と話し始めていて声もかけられない京子も席につかないと間に合わなくなってしまふ。しかし、最後に言われた一言は、京子の気持ちを傾けるには十分すぎるものだった。

\*

午後の授業は、京子にとって集中できないものになってしまった。最後に美香の放った

言葉を考えれば考えるほど、それは今がチャンスだと思った。ヒゲにとつて、自分がどれくらい大切なものなのか確かめたかった。この作戦を実行すれば、何かが変わるのではないか。ヒゲの中で、自分はただの生徒でしかないのは分かっている。もし何も行動を移して貰えないなら、それで諦めがつくと思えたのだ。出した結論、それは香織の意見に対して、賛成するものでしかなかった。

しかし、京子は放課後に部室へ行ってもメンバーに結論は言わなかった。スパイクを集中して言われた通りの本数を決めた。肘を伸ばして、腹に力を入れる。何度かやるうちに、癖が一度直ったと自分でも思えた。しかしそう思っても、体調やコンディション次第でまた戻ってしまう。一瞬の動作は、指導者でないと分からなかったりもする。ヒゲは、部活が開始されるとすぐに参加した。コートの隅から、自分のフォームを見られてみると、緊張で身体が固くなってしまう。ヒゲは京子のスパイクを見ていたが、何も言わなかった。褒めてもくれない。注意もしてくれない。彼は、いつもそうだ。他のメンバーには、必要以上に指摘することがあっても、京子に対してはミーティングや試合の時でしか注意をしない。呼ぶこともない。どうしても、京子にはそれが許せなかった。自分だけが好きな相手に従っているようで、馬鹿らしくなった。そう思えば思うほど、京子はヒゲを見てしまふ。メンバーは、京子がヒゲのことを睨んでいると見ている者も少なくなかった。横目でヒゲの視線を確認しながら

ら、京子は今日もスパイクを打った。そんな気持ちで集中できるはずがなかった。

練習試終わる頃、京子の気持ちは次第に固まっていた。有り難いことに、誰も京子の答えを聞こうとはしなかった。ゆっくりと考え手貰おうと気を遣われているようでもあった。しかし、それ以上に自分には悩みがないと思われているような気もした。この悩みは、誰にもうち明けることが出来ない。なにせ陰で、メンバーは口を開けばヒゲの悪口ばかり言っているのだ。そんな中で、京子がヒゲに好意を抱いていると知ったらなんというだろうか。からかわれるだろうか。この計画をやめようとするだろうか。いや、そんなことはないだろう。好きな理由を聞かれるだろうか……。そんなものは京子にも分からなかった。怒られてばかりで、優しくされたことなど記憶にはない。毎日顔を合わせているのに、交わす言葉も少ない。それなのに、気が付いた時にはヒゲの指輪を目で追っていた。自分のスパイクを打つ瞬間を見られるのだと思うと緊張した。怪我をして足を見せる時などは、拒絶した。触られたら、平常心を保てるとは思えなかったのだ。好きになるのに理由はいらない。初めてその言葉が理解できる。様々なことを考えている間に、夕陽は静かに沈んでいった。赤い夕日の光が体育館の床を照らす。そうして気づくと、外はいつのまにか真っ暗になっているのだ。

練習が終わったあと、静かな作戦会議が行われることとなった。静まりかえった部室で、

香織が京子を見つめて言った。

「じゃあ、京子も賛成って事でいいのね」

その言葉に、京子はしっかりと頷いた。額に浮かんだ汗を、大きなタオルで拭う。まだ四月だというのに、気温は上昇が続いている。今年の夏も暑くなりそうだ。そう考えた次には、もう夏にはこの体育館にいないのだと悟った。高校にいるのに、体育館に通わないことを想像するだけで違和感があった。

「よかったよ。これで全員だ。でも、反抗運動って何をするの？」

まさか窓ガラスを割ったりするわけじゃないよね？」

千夏が、着替え終わった制服のブラウスの袖を捲りながら言った。その頬はうつすらと赤く上気している。京子は昼に飲み残したジュースを、コップへと注いだ。

「何を言っているの、千夏。そんなことしたら、本当に罪になるって」

その脇から美香が言う。美香は、腕に再び香水をかけているが、もう誰も文句を言わなかった。ただ、若菜の目がちらりとその瓶を追う。一度文句を言おうとしたのか口を開いたが、彼女は諦めたように首を振って閉じた。

「それじゃあ、いつそ勉強をやめようよー。みんなで最悪の点数を取るの。それか、今から部活の合宿をするとかー」

祥子が提案する。彼女の目的は家族であり部活だ。家族に勉強が来ないことを見せつけ、今の不自由な実態を晒す。その上で、バレーの自信をつけ自分の存在を確かめる。部活での絆を確認出来たら尚更良かった。技術が向上出来れば文句ない。しかし、それもまたもや美香の反撃を食らった。

「駄目だよ。そんなの。この作戦のターゲットの中には、ヒゲも含まれているんだよ。合宿なんかしたら思う壺だよ。あたしたちの今の状況は、決して分かって貰えない」

「そっか……」

祥子は首を縮ませた。なかなか全員の希望通りに行うのは難しいのかもしれない。自分の願っただけではない。この辛い状況を、分かってもらいたっただけなのだ。それに高校生が、犯罪にかかわらずに悪事を成し遂げるなど限られている。誰もがそう思った時だった。

「ねえ、聞いてくれる？」

今までずっと黙っていた若菜が、初めて声を出した。みんなが話している間、ずっと一人考え込んでいたのだ。他の五人は、若菜の次の言葉を待った。

「あのね、誘拐作戦っていうのはどう？」

若菜が、真剣な顔ではつきりと言った。

「……え？ 誘拐作戦？」

最初に言葉が出たのは千夏だった。

「ちよつと……。それは危ないんじゃない？ みんなでどこかへ隠れに行くってこと？」

れだとエスケープになっちゃうよ。……ま、それもいいか」

千夏は結論を焦りがちだ。誰かと話していても、途中で割って入りその結末を知りたが

る。それが、勝手に推測する。読書好きの彼女は、必ず最初に本のラストを把握してしま

うらしい。それが一番興奮するといふのだから、京子には理解できない。

「行くってどこへ？」

「それはやりすぎかもよ？」

祥子も美香も不安がる。顔を見合わせて、苦笑いを浮かべる。

「あたしは食料さえあればどこでもいいよ。つまり金銭面に困らなければね」

京子は、賛成した。むしろせっかく行動を起こすと決めたのなら派手にやったほうがいい。

「……違うよ。みんなで逃亡してどうするの。学校や部活をさぼって、いざ帰ってきたら

大騒ぎ。退学にはなりたくないからね。どこかへ行つて警察に保護されても恥ずかしいでしょ」

若菜が、みんなの前に人差し指を出す。よく聞きなさい、と顔が言っている。

「この中で、一人の犠牲者を決めるわ」

若菜の言葉で、部室に緊張が走る。

「えっ！ ……犠牲者？」

千夏が悲鳴のような声を上げ、隣に座っている香織に窘められた。廊下にいる後輩に話

を盗み聞きされたら困るのだ。

「つまり、一人が誘拐されるの。といっても犯人はいないよ。言うなれば、残りの五人が

犯人。みんな、やるからには中途半端でいいと思っているの？ 適当に親に反抗して、ま

た押さえつけられるの？ 嫌々部活を続けるの？」

犯人がいらないとはいえ、一人が姿を消し、周りは口裏を合わせる。ニユースになるだろ

うか。退学になるだろうか。余計な不安をしよいこむことになってしまわないか。若菜の提案を、誰もがすぐには肯定できなかった。

「若菜。そんなことを言うからには、何か考えがあるの？ 若菜はバレーの推薦を貰うんだよね？ 大学の推薦権なくなるかもしれないよ？ それに、誰が犠牲になればいいってこと？」

香織が、的確に問題点を上げていく。ここからは、もうふざけ半分ではない。覚悟を決めなければいけない、という張りつめた空気に変わっていく。慎重な祥子は、ノートにメモをしようと鞆から紙を出したが、すぐに若菜に止められた。あとで証拠になるものを残すわけにはいかないのだ。

「じゃあ、今から話すね。祥子だけでなく、何もメモをしないで。時間はない。問題点や反論があれば、相談していこう。目標とする日は一週間後。そう、ちょうどゴールデンウィークの初日。そうすれば、少なくとも学校を休まなくて済むわ。勉強や単位に影響を及ぼさない問題はクリア」

ごくろ、誰もの喉が鳴った。作戦会議の時間も限られているのだ。その中で、精一杯戦わねばならない。若菜が、確認するように頷き、再び口を開いた。

## 6 第五次戦争

「要は簡単なこと。みんな自分の存在を確かめたり、誰かに心配してほしいのよね？ あ、ここでの反論は今はない。つまり、まとめるとそういうことなわけ」

若菜の言葉に、千夏が口を開いたのを彼女が見とがめ、先に牽制した。

「で、どうやったら心配してもらえるか。結果を考えて、その間の方法を並べればいいだけ。それだけ。ザツ・オール（that is all）。そのためには、身を危険にさらせばいいの」

「危険に……？ 何をするつもり？」

京子が聞く。

「だから言っただでしょ。誘拐されるの。ただ、危険と言っても実際は違う。危険な振りをするだけ。あとで被害者の振りをして出てくればいいだけよ。ただ、どれだけの責任を負うかは、私にも分からない。罔だけでは無い。周りの人間も同罪よ。これが罪になるかは……、刑事志望の香織にあとで聞いて」

香織が、不安げな顔で頷いた。そんなに危ないことまでやるのか、と言いたげだ。刑事を志望しているからこそ、犯罪に関わるなど命取りだ。先程の千夏に向けて牽制したように、もう一度若菜が全員に片手を上げ、意見を押しとどめた。再び口を開く。

「みんな今朝のホームルームで、何を聞いた？」

「今日？ なんか言っていたっけ？」

千夏が首を傾げる。

「あ、生物の岡田が入院したって」

祥子が言う。

「あー！ あのハエみたいな顔した小さい男ね。眼鏡かけて、ひ弱そうだしね」

千夏が両手を叩き、思い出したように言う。

「違う！……中央通りの先で、最近痴漢がよく出るって注意があったでしょ？」

若菜が、千夏よりさらに大きな声で言う。話が進まないことに苛立ちが窺える。

「あー！ あったあった！ でも、ここら辺は不審者多いからね」京子が言うと、千夏が溜め息を吐いて同意した。

「そうそう。この世の中は痴漢に溢れているからね。気持ち悪いけど、仕方がない。男が

いる限りその存在は消せないのよ。あ、女も痴漢になるか。……それなのに、世の中に痴

漢はたくさんいるのに……あたしが痴漢にあつたことがないのは、なぜ？」

「小さくて黒いからじゃない？」

「京子だつて、黒くて大きいじゃない！」

「はい！！ 終わり！」

千夏と京子のふざけたじゃれ合いに、若菜の渴が飛んだ。その怒号と鋭い睨みに、全員

がすくみ上がる。一同に睨みを聞かせてから、また若菜が話し出す。千夏と京子は無意識

に正座になった。

「つまり、そういうこと。この辺で変質者が出没しているというところが重要な。それを

みんなが知っているしね。被害者には、その囫になって貰う」

「……痴漢に遭うのを待つていうの？」

祥子が、小さな声で聞く。まさか、自分から被害に遭うのに名乗りを上げる者はいない

だろう。自分がその役をやるとなれば、内容が内容だけに息が詰まる。

「うつん。まさか。それじゃ、本当に危険でしょ？ それを工作するのよ。言っただしょ。」



筋書きはこうよ。囧の誰かは、部活が終わったあとに襲われる。：

…振りをする。悲鳴を

上げる必要なんかはない。ただ、帰らなければいいの」

「でも、それだと、ただの家出だと思われない？」

美香が聞く。夕方の練習で乱れた髪の毛のおだんごも、お昼の時と同様に再び綺麗にまとめられている。

「家出だと思われないような物証を残すのよ。つまり、囧は帰る意志だったのに、それが叶わなかったと見せかけるの」

「……どうやって？」

再び美香だ。若菜が、美香に向かって人差し指を立てた。

「家の近所で囧の物を落としておくこと。それが一つ」

そこに、中指も足す。

「二つ目。それに、周りの人間の証言ね。帰ったことと家出するようには見えなかったこと。それを周りに話すの。だから、一心同体になる」

「それで同罪ってことね。でも、囧は実際には被害に遭わないのだからどこに行くの？ 誰か他の人の家？」

再びの美香の質問に、今度は香織が言う。

「待って。みんなの家は、両親必ずいるでしょう？ うちの父親は、普段帰ってこない時が多いから都合がいいけど……。もしその日に限って返ってきた時、刑事だし都合悪いな」

香織の脳裏には達也の部屋が浮かんだが、それを口には出さなかった。彼を巻き込むわけにはいかないし、なにより刑事になりたいと言ったばかりだ。その香織がこんな真似をすると知ったら幻滅されるだろう。香織でさえ、まだこの計画に賛成するか迷っていた。刑事になる考えを突き通すために犯す、罪。すると、若菜が言った。

「違うわよ。ここよ。囧は、一度学校を出て、帰る振りをしてこのF1の中で一晩過ごすの。合宿をしても校舎に泊まるし、夜はこの建物の鍵も体育館の二階の教科担当室に返さなくてはいけない。も

ちろん、部活を終えた顧問が鍵の返却も確認するはずよ。そして、建物もね。つまり……」

「……ここは、密室になる。密室のここで、一人で過ごすのね」

祥子が言う。ごくり、と誰かの喉がまた鳴った。

「そう。それに、ここは運が悪いことに学校の中で唯一電波が悪くて携帯も通じない。それに怪しまれないためにも、何もしてはいけないのよ。この中に閉じこめられる。それに我慢しなければならぬ。窓を開けて逃げるなんて論外よ」

若菜が、重要なことを上げていく。ほとんどが心構えのようなものと、加えて行動パターンだ。周りはそれを頭にたたき込む。

「あとは、教師がどう動くかね。ほとんどバレー部と組になるのはバスケ部。そうなれば、髭だけでなくバスケの顧問、野村にも注意しなくちゃ。ほとんど練習に來ないうちの副顧問と、バスケの副顧問の清原ちゃんは問題ないと思う」

若菜が、注意すべき教師の名前も確認する。

「じゃあ、あとは誰がその苦痛に耐えられるかって話ね」

千夏が、全員の顔を見回すようにして言う。誰もが、他人が名乗りを上げるのを待っている。この光景には、誰にでも覚えがあった。春に学級役員を決める時と同じ空気だ。自分は視線を下にして、被害に遭わないようにする。

「もちろん、ここでやりたい人間がいなかったらこの案は破棄。違うことをやることにしようよ。あたしは実際なんでもいいの。でも、これはかなり試せる内容だと思う」

若菜の言葉に、誰もが顔を見合わせた。確かにそうだ。

「あの、あたし……。図をやってもいいよ」

全員の視線が、その声を出した一点に集中した。

「美香……？」

祥子が目を丸くする。自らのストレスを言い始めたのは祥子だけではない。誰もがそれぞれの想いを抱えている。そして、この案を考えたのも美香ではない。それなのに、なぜ美香がやると言い始め

たのか、理解出来なかった。誰もが、行動を移したくても名乗り出ることが出来ない。心のどこかでは、この案が無くなることを願っていたのかもしれない。何かやってやりたいが、そこまでは出来ない。愚痴だけで終わりにすればよかったと、半ば後悔し始めた時だったのだ。

「……あたし、やるよ。だってまず危険じゃないでしょ。それに、あたしは元々成績悪いから推薦は狙っていない。国立を狙うほど勉強もしなくて平気だし、内申なんて気にしない。ヒゲに怒られるのも慣れている。それに……あたし、やっぱり頼りないけどキャプテンだしね」

美香の言葉に、誰もが反対の言葉を言わなかった。かといって、すぐに喜んだわけではない。立候補があった時点で、この計画は動き始めるのだ。より輪郭が確かになってしまった。それに、幾分の動揺が走る。沈黙が部屋に流れた。次の言葉を言ってしまうえば、戦いの幕は上がるのだ。

「美香。ちょっと聞いて。これは一歩間違えば犯罪よ。ううん、あたしたち笑えないことをしようとしている。まず狂言自体は軽犯罪法違反の虚偽申告になるの。誰かを犯人として陥れば虚偽告訴罪。まあ、どれも警察に言われた場合ね。これで公訴されなければ平気なんだけど……、嚴重注意はされるでしょうね。それでも、やるなら、やってみよう」

香織が、そのあとにもいくつかの刑法を並べたが、所詮それに興味の無いものは理解が出来ない。そもそも、それを考えては戦争を起こすことなどできないのだ。罪を被るということは、戦争に負けた時に発生する事態だ。負けるつもりで戦う者はいない。美香がこくりと頷いた。もう部活が終わってから三十分は経った。着替えて少しだけ休憩を取るのが常で、もうそろそろ限界だ。これ以上ここにいると、鍵を確認して早く帰りたいヒゲの催促をくらい、あとで注意を引いてしまうだろう。六人は、計画実行を心に誓い合い、その夜、部室をあとにした。誰もが不安に思っていた。しかし、心の

隅ではこれからの戦いに次第に胸が弾んでいった。大人達を騙せるのか。そして、自分の存在を確かめられるのか。帰る足取りは、それぞれの想いを抱え、確かに地面を踏みしめていた。

若菜は、一人家路を辿りながら考えた。校門を出ると、美香だけが大通りを左に自転車で向かう。若菜と京子、祥子の三人は大通りを横切って、まっすぐの道を自転車で進む。しばらく走ると、少し進んだスーパーの角を、京子と祥子が二人が曲がり、若菜が一人になるのだ。その方向には、団地が広がっている。そして、大通りを右に歩いて帰るのが香織と千夏だ。駅まで歩き、電車に乗る。この帰る状況を見れば、囷になるのは美香が一番合っていた。それでも、まさか本人が自分から名乗り出るとは思わなかった。

自転車を軽快にこぎながら、若菜は思った。美香は自転車とはいえ、いつも一人で登下校する。その分、誰かと会話をしているわけでもないのだから、一目につきにくいだろう。それに、ホームルームで注意を促された、変質者が出るという場所も、美香の帰る方向なのだ。大げさに伝えてはみたが、実際若菜が考えたこの作戦は大したことなどなかった。ただ、一日帰らないだけだ。携帯は念のため、若菜が預かるつもりだ。若菜の中には、もう一つの隠れた作戦がある。警察に言うことは全く考えてなどいない。

シナリオは出来ていた。美香から携帯を預かった若菜は、夜になって美香の母親の携帯に電話かメールをする。もちろん、美香の携帯だ。そこで、変質者にあっただけど無事であることと、帰り道が心配だから友達の家泊まると伝える。さぞ、両親は心配することだろう。そうしてその夜、他のチームの家の者に連絡を取るのだ。みんなには、美香が上手く隠れたようだと言報告し、そして各親には美香が行方不明だと伝えるように言う。そうすれば、親は子供を心配するだろう。

・チームメイトの悩みは理解できる。受験のこと。それが部活のせいで勉強出来ないこと。

親に心配してほしいこと。進路を認めて貰えないこと。どれも、気持ちは分かる。しかし、納得は出来ない。そんな小さなことに悩んでいる時間ももつたいなかった。そんな時間があるなら、スパイクの一本でも打ちたい。そして試合に勝ちたかった。そのためには、メンバーに邪念を払って貰わなければならないのだ。こんな一般の公立高校の部活で、大学にスポーツ推薦で行こうという若菜が、周りとは違っていたのかもしれない。中学の頃から始めたバレーで、若菜はすぐに上達した。持ち前のジャンプ力と、瞬時にこなす判断力がバレーに向いていたのだ。高校受験をするときにも、強豪高校からスカウトの話はあった。しかし、学年の中でも上位の学力を持っていた若菜は、バレーだけで高校生活を無駄にはしたくなかった。ある程度の学力をさらにつけ、いざ大学を受験するときにもう一度考えようと思っていた。そして、その心が決まりつつあるのだ。大学では、バレーをさらに続けて強いチームでレギュラーになりたいと思うし、それなりの実力があるはずだ。試合でも、スパイクの決定権はほぼ香織と若菜にある。それが重みでもあり、嬉しいことでもあった。そして、推薦を貰うためにも、今、結果を残さねばならないのだ。そうしなければ、すべてが水の泡になってしまうのだ。部室でそれぞれが今の不満を話している間、若菜はそのチームメイトに不満を持った。作戦も、考え抜いたわけではない。ただ、そうすれば親に心配してもらえ。彼女たちの気も済むと思った。これでいいのだ。いいはずだ。若菜の頭の中は、すでにこれからの計画よりも、試合での反省点ばかりが浮かんでいた。

## 7 全面戦争

ゴールデンウィーク初日前夜、その夜がやって来た。何度かの簡単な打ち合わせを経て、

六人は今部室の中で円陣を組んでいた。それぞれの人間の右手同士が、親指と小指で繋がれる。いつもの試合前の円陣の組み方と、なにひとつ変わらない。

「それじゃあ、美香はここに残ること。今日も自転車で来てくれたよね？ 自転車は置いておこう。今日は歩いて帰ったことにするのよ。……よし。美香の鞆は、あたしが向こうの公園に行つて置いておくから。誰かに気づかれたら、それでよし。もし明日の朝まで置き去りだったら、あたしが拾いに行く。もしも警察に届けられたら、明日の朝、被害に遭った顔をして出てくればいい。一晩監禁されていた、と言つてね」

若菜の声に、美香が頷く。その決心した瞳とは違い、彼女の右手は微かに震えていた。一人の手が震え、それは静かに伝染する。美香は、囧になることで他のだれよりも緊張していたが、誰よりも若菜と綿密な相談をしていた。携帯の電波がないこともあり、全て若菜に預けることになっている。美香は、ここにいればいいだけだと自分に言い聞かせた。

「よし、大丈夫ね。ほとんど大事なのは、みんな明日よ。千夏と京子は、明日の朝出来るだけ早く来て、この子を救出してあげて頂戴。警察に言われて騒ぎになったら、あたしが二人に連絡するから、その時は発見した美香に付き添っている振りをしてね。それで、ちょっと制服にドロとか付けて……」

不満そうに、美香が唇をすばめた。

「分かった。制服を汚すのが嫌ならジャージでもいいから。とりあえず、必ず誘拐された風に装って、先生のところへ連れて行って」「了解」

「まかせて」

京子と千夏の声が重なる。

「あ、くれぐれも京子は、朝お菓子を食べないように。緊張感がなくなるからね」

若菜の指摘に、京子がもう一度わかったよ、と呟いた。

「それと。その時に、二人も変な人間をこの建物の近くで見、襲われそうになったとでも言えば尚更上出来」

それに、二人が頷く。

「だけど、それも自然に怪しまれない程度にね。……香織は、お父さんが帰ってきた場合、さりげなく美香が家に帰っていないことだけ伝える。変な事件に巻き込まれたかもしれない、とね。帰らなかった場合は、香織にまかせる。このデモ活動をどう結果に残し、普段の不満解消に繋げるか、それは自分次第よ。失敗しても、成功しても文句いっこなし。晴れてこれからの試合に専念するの。いい？」

誰もが、こくりと頷いた。

「……あの、あたしは？」

祥子が若菜に向かって言う。

「祥子。祥子は、言ったでしょ。兄弟もいるし、普段通りにして。でも、家がここから一

番近いでしょ。あたしが美香の家に連絡を取ったあと、すぐに祥子に連絡をする。その時は、慌てる。家族に、それを言うの。きつとご両親も祥子を心配するよ。その時に大学受

験への不満も話もしちゃえばいいよ。部活に関しては、あたしは頑張れしか言えない。

祥子が必要なのは、言っても言わなくても同じ。自分でけりをつけないきや」

「……分かっている。でも、家族が騒いで、警察とかに行ったら……」

「大丈夫よ。そのために、香織の父親の名前を使わせてもらうの。祥子が、もし親に警察

のことを言われても、香織の家の親が刑事だから大丈夫って言うの。親は、自分の子供が

被害に遭ったらって思うわ。普段、毎日子供が戻ってくる有り難さが分かるわよ」

「うちの親は、大丈夫かな……」

美香が弱音を吐きかけた。しかし、すぐにそこに若菜が声をかける。「大丈夫。美香が変態に襲われたことも、ヒゲや香織の父親がいてくれるから大丈夫って

言うよ。明日無事に帰るっていえば大丈夫。ま、その反応を見たいっていうのもみんなあ

るんじゃない？ 美香の親には、それなりの心配。周りの親には、被害者が出たことで自

分の娘が危険にさらされるかもしれないという心配。でも、それぞれの親は連絡を取り合

うほど仲良くない。上手く口裏を合わせれば成功出来るの」

全員が、お互いの顔を見合わす。

「これは親に対してのデモよ。それに、ヒゲに対しての。そうでしょう？ 大きく言えば、

変質者を逃す警察に対してもよ。……っと、刑事志望の香織、ごめんね。あんたの未来に

期待している。……つまり、これは誰か一人でも失敗すれば終わり。バレエの試合と同じ

よ。信じて行動しないと、みんなが自滅だよ。大丈夫。あたしたちはお互いの行動をちゃ

んと読めるでしょ。高校に入ってから、家族よりも多くの時間を一緒に過ごしてきた。

ここも一緒に乗り越えられる。誰がボールをレシーブして、トスして、スパイクするか。



同じ事よ。簡単だわ。信じればいいの。メンバーと、自分をね。最後には周りの大人も信じたいじゃない？」

それは演説といっても良かった。若菜の言葉が、六人全員の円陣の手にも力を込めた。

美香の胸の高鳴りも、徐々に収まっていく。そう、朝までここに居ればいいのだ。仲間を

信じて。明日の朝には、千夏と京子が来てくれ、夕方家に帰れば両親が温かく心配してくれるだろう。

「じゃあ、いくよっ！」

一度大きく振り下ろすように下げられた六人の右腕は、次の瞬間に突き上げられた。

美香は、全員が部室をあとにすると、一人部屋の真ん中で座り込んだ。この作戦で、家

族がまた一つになることを願っていた。

美香の家族は、少し前から親が離婚するかもしれないと揉めていた。単身赴任の両親の

間に、愛情がなくなるのは早かった。美香が中学の時までは、周囲が驚くほど仲がよかった。

たのだ。三人で一週間に一度は風呂に入ったりもした。他人には驚かれることもあったが、

それは美香にとっては普通のことであった。幸せなことだとも気づかなかった。それが自

分の手から抜け落ちるまでは……。この地元から、父親が転勤の辞令を受けたのが三年前。

初めは、母親と二人になることが不安だった。父親と仲のよかった美香は、自分が父親と

二人でいるのは幸せだったが、母親が父親と二人で仲良くしている

と腹を立てることもあ

った。一種の小さな嫉妬だ。母親からしてみれば、そんなのは子供の甘えでしかなかった

だろう。しかし、美香にとっては重要な感情だった。父親がいてこそ、三人で釣り合いが

とれていると感じていた。それに男の人が家にいないというのも初めてで不安だった。初

めのうちは、外でした小さな物音にも驚いて、玄関の覗き穴からマンションの廊下を窺っ

たものだ。週末になると帰ってくる父親に、母親がケーキを焼いているのが好きだった。

しかし、いつの間にか気づいた時には、父親は帰ってくるのが少なくなっていた。意識を

しななければ、二ヶ月姿を見なくても平気になってしまってもいたのだ。それでも不信感など生まれなかった。数年がたてば転勤など終わると安易に考えていたのだ。まさか、父親が転勤先で愛人を作るとは思っていなかった。おそらく、母親も。それでも、母親は気丈な素振りを見せていた。母親が事態に気づいてから、美香が気づくまでにはかなりの時間があつたはずだ。その間、母親はおかしな様子を見せたことはなかった。おそらく、美香が学校へ行っている間に一人思い悩んでいたのだろう。全てが分かったのが、二ヶ月前だった。

一人の女からとうとう家に電話がかかってくるようになったのだ。それも、一時間おき

に。女は、電話に出た美香に対しても臆することなく悪事をばらした。あの高い声は、し

ばらく美香の耳から離れなかった。自分が、転勤で来た父親に惚れてしまったこと。父親

も、母親と離婚してその女と結婚していいと思っているということ。会社に状況を話せば、

父親の身が危ないから誰にも言つなということ。美香の電話の様子に違和感を持った母親が受話器を奪い取った。声を荒げるその姿を見て、母親が何度もその女と話したことがあるのだということを感じた。それから、急激に家の中の空気は冷えていった。テレビを見ても、笑ってはいけない気がした。料理を食べても味がしなかった。毎日テーブルの上に置かれているお弁当が、日に日に色を失っていった。それでも、美香はそのことを誰にも相談出来なかった。毎月買う雑誌で、ラッキーカラーを確かめて、いくら派手な色でもそのカラーのパーカーを買った。制服の上にパーカーなら着てもいいことになっている。私服なら毎日着られないが、それならば文句を言われずに身につけることが出来るのだ。しかし、そんな努力が身を結ぶこともなく、家も弁当も完全に色を失ったある日、父親はひよっこりと家に帰ってきた。美香が一緒にいるとき、両親が喧嘩や言い合いをすることは決してなかった。しかし、水面下で着実に事が進行しているのを、美香は知っていた。離婚が決まった訳ではない。むしろ、父親が謝罪の言葉を発しているのを聞いた。しかし、そのたびに母親がヒステリックな声を上げるのだ。もう、意味が分からないほど子供ではないのだ。もうどうするともできないのだ。諦めかけていたある日、部内でこの騒動が始まった。千夏と祥子と香織が、模試を終えたあと、偶然この部室に足が向いたというのだ。

そしてそこで、家や学

校へのストレスをぶつけた。自分だけが、ストレスを持っているわけではないことをそこ

で初めて知ったのだ。三人は、それから時間が許す限り愚痴を言ったらすすきりしたよう

だった。

それを聞いた時、閃いたのだ。戦えるかもしれない、と。すでに愚痴を言ってスツキリ

としたという三人に、何かをしようとたきつけたのも美香だ。三人は、それなりに話には

乗ってきた。そして、京子を巻き込んだ。

美香は、京子が人知れず恋をしているのを知っていた。他のメンバーがどれほど気づい

ているのかしれない。いや、気づいていないだろう。美香が昼の練習メニューを終えて曰

本史資料室に行くと、時々京子の姿が廊下にあった。そして、彼女はじっとその中を見つ

めているのだ。初めは何をしているのか分からなかった。ヒゲに怒られたのかと心配した。しかしそうではないと気づいた時、美香は声を掛けることが出来なかった。京子の泣き

そうなその横顔が、美香の脳裏に蘇る。京子は、普段見せないその瞳で、切なそうに佇む

のだ。その姿を見ると、美香の足はいつも止まってしまった。髭に想いを伝えられずにい

る京子を、美香は助けてあげたかった。しかし、出来ることなどないのだ。これは、彼女

にとってもきつといいチャンスだったに違いない。そうして、京子は話しに食いついた。

予想通りだった。

それでも、若菜がこの提案を考えるととは思わなかった。少なからず

意外だった。それで

も、自分がやろうと思ったことに迷いはなかった。メンバーに言った、キャプテンとしての

責任からではない。自分が襲われたと聞いた時、親がこういう反応をするか確かめたか

ったのだ。親が、今友達が被害に遭ったというだけで驚く余裕がないと思った。美香の願

いは、両親共に心配して駆けつけてくれることだ。もしそれが叶わなくとも、どうにかし

て家族を元に戻したかった。

これが悪いことだとは分かっている。あとでいくら怒られてもいい。大学など行けなく

とも構わない。それでも……、今できることやりたかったただけなのだ。美香は、着ていた

制服を脱いだ。

誰かに明かりを見られると困るので、電気を付けることも出来ない。真っ暗の中、本も

読めない。携帯も、若菜に預けてしまったので、メールやゲームも出来ない。窓から差し

込む夜の月の光は、少なすぎて抵抗できない。

今日は部活の練習も、この計画が気になって集中できなかった。それでも日増しに上が

る気温に、身体から出る汗の量も増えていく。自分の着ていた体操服を、汗くさくなる前

にビニール袋に入れ、口を結んだ。布団がないので、適当に置いてあったあるタオルケ

ットを敷いた。まさか、このカーペットの上にそのまま寝転がる勇氣もない。その上に転

がると、思いの外身体が疲れていたようだ。足の裏がじんじんする。すぐに眠気はやって

来た。しかし、目を閉じてもなかなか眠りに落ちることは出来ない。瞼の裏に浮かぶのは、両親の顔。今、心配してくれているだろうか、という小さな期待が膨らんでいく。くだらないことだと自分に言い聞かせ、首を横に振る。それから少しして、眠れる、という感覚があった。このまま自然に任せてしまおう。そう思ったとき、美香のお腹が、きゅるんと悲鳴を上げた。

\*

美香の目が覚めたのは、突然だった。初めはなぜ自分の目が覚めたのかさえ分からなかった。

つた。しかし次の瞬間、身体に痛みが走る。眠りに落ちる直前に聞いた腹の虫は、空腹によるものではなかったのだ。目が覚めた直後、痛みとともに左腹から何かが移動するような音がした。その音とともに感じた不快感は、美香をパニックへ追いやる。こんな事態は想定外だ。携帯もないので、今が何時かも分からない。それでも、美香は痛む左の腹に手を当てて起きあがった。ここに閉じこめられるということは、助けも呼べないのだ。いや、鍵さえ開ければ外には出られる。しかし、それはこの計画を全て無にすることを意味していた。また、若菜の言葉が蘇る。

「……朝のホームルームで聞いたこと覚えている？ 変質者が出るらしいよ」

そうだった。外では何が起こるのか分からない。それに、ここは学校で、住宅ではない。

夜になれば人がいなくなるのだ。言ってみれば、襲われた時には一番危険だとも言えるのだ。それに気づいた途端、余計な冷や汗までもが出てきた。美香は、そっと身体を起こすと、トイレに行こうと部室のドアを開けた。廊下は真っ暗で、かすかに土臭さが混じって

いる。口の中が干上がる割に、余計な唾が奥のほうから出てくる。変質者を理由に、大人をからかおう、いや戦おうとした罰があつたのだろうか。もうしません、と痛みと引き替えに反省の言葉を漏らす。だから助けてください、と。トイレのドアをそっと開けた。

中には三つの個室のトイレが並んでいる。その前に、洗面台も同じ数だけある。一番手前のトイレに入ったが、個室のドアを閉める時間もなかった。とりあえず早く用を足したかったのだ。急に、ここでもっと具合が悪くなったら、という不安に押しつぶされそうになる。しくしくする痛みは、考えてみれば普段の腹痛よりもひどい気がする。明日、京子と千夏が来るまでもつだろうか。いや、それよりも彼女たちよりも先に、誰か他の人が来た時にどう言い訳すればいいのだ。意識がなくなり廊下に転がっていたら……。考えれば考えるほど底なし沼だ。次の瞬間には、こんなことやらなければよかった、と思う。そして、やったって意味はないんだ、と叫びたくなる。その感情に答えるように、腹も悲鳴を上げる。美香は、座りながら低く呻いた。後悔で涙が出そうになる。思ったよりも辛い夜になりそうだ。鼻水をすすり上げた、その時だった。

確かに、足音が聞こえたのだ。しかも、すぐ近くで。腹痛に耐えるのに精一杯で、美香は周りに神経を尖らせていなかったことを後悔した。しかし、その場から立ち上がることも出来ない。……この辺り、最近変質者が多いらしいよ。再び若菜の声が頭を過ぎった時だった。顔を上げた美香の視界は、大きな陰にふさがれてしまったのだった。

\*

部室を出たあと、他のメンバーは計画通りに行動を起こした。若菜は、美香から預かった携帯を持って公園に向かった。少しでも時間を夜にするために、あちこち寄れる限りの店に顔を出した。自分が

被害にあうわけでもないのに、姿を見られても構わない。それよりも、変質者の出没する時間に合わせなければならなかった。そして公園に、高校生の姿を現しておく必要があったのだ。そして、若菜は公園に着き、自転車から下りた。しかし、それはただの行動に過ぎなかったのだ。これから一つの結束を固めようと言う時に、まさかまっすぐ家に帰るには流石にメンバーに申し訳なかった。若菜には、周りの志気を高め、大人達を煙に巻いたという事実さえ手に入ればいいのだ。そうすれば、少しは部活にも身にはいるだろう。若菜は、今度は鞆から美香から預かった携帯を出した。履歴を押して、母親の番号を探す。

美香の母親の携帯の番号は見あたらない。どこにかけるべきか、確認して置くんだったと、小さく舌打ちする。ここで、家の者に知らせないと、美香の目的は遂げられないのだ。電話帳を開いて名前を辿っていくと、そこには自宅と登録された電話番号があった。ほっと息を吐き、若菜はその番号にかける。しかし、何度かけても留守番電話に繋がってしまうのだ。小さくとも証拠を残すのは芳しくなかったが、こうしていても始まらない。若菜は、留守番電話にメッセージを残すことにした。

「変質者に会っちゃった。帰るのが怖いから、友達の家泊まります」

敢えて心配しないで、とは伝えなかった。電話を切るともう一度ため息を吐く。演技ではなく、緊張して本当に声が震えてしまった。そのおかげであまり声に見分けはつかないだろう。なによりも、電話の練習は美香と数え切れないほどしてきた。メンバーにも確認してもらい、相当似ていると言われるまでになった。大丈夫だ。若菜はベンチを立ち上がると、自転車のペダルに足をかけた。あとは家に帰り、メンバーに報告すればいい。一仕事終えた若菜の足取りは、いつもよりも軽かった。



「千夏ー！」

千夏が、昨夜若菜から電話を貰った時は、すべてが順調だった。若菜は、美香の家に電話を入れ、自宅に着いてから連絡をくれた。

千夏は、香織と駅まで歩いている途中、興奮している気持ちとは裏腹に、どこか不安で

会話は弾まなかった。確認するように計画の順番を確かめあったが、いつもは何を話しているのかさえ忘れてしまった。それでも家に帰って報告を貰った時、

親にはすぐに話した。父親とは、あの一件以来口を利いていなかった。母親は、翌日弁当を作ってくれなかった

ものの、その次の日からは滞ることはなかった。あの一件に触れることもない。ただ、

黙っているのだ。はしゃぐわけでもない。ただ、じっと千夏の身の回りのことをこなすこ

とだけ目標にしているようだった。そんな両親に、千夏は言いにくい気もした。しかし、

意を決して事情を説明すると、二人とも顔色を真っ青に変えた。

誘拐、という言葉を想像して警察に行こうとする両親を、美香にも母親がきちんという

こと、部内の香織の父親が刑事であることを伝えるとやっと落ち着いてくれたのだ。両親

の慌てようは千夏が初めて目にするものだった。

それで、充分だった。千夏は、朝起きた両親に、充分注意するように言われて飛び出して

きた。そして、美香の安否が分かり次第連絡をするようにと言いつけられている。

学校にいる美香にすぐに報告したくて、千夏はいつもより二本早い電車に乗ったのだ。

京子と連絡を取り、F1で美香を助けることを決めた。そうして、駅に着くと走って校門までやって来たのだ。

朝少し早いうえに、ゴールデンウィークの初日とあって電車はすいていたし、なにより

も身体が軽い気がした。兄を両親がかわいがるのは当たり前だ。それでも、自分も忘れて

いないということを確認したかっただけ、今思い返すとただの我が儘だったと思うのだ。

自分の感情さえ満たされれば、全てを受け入れることが出来た。両親に、もっと兄に会い

に行けばいいと思えるほどだ。なんと勝手なことだろう。犠牲を追ってくれた美香に感謝

の意を込めて、駅前のドーナツ屋で奮発したものを箱で買った。おそらくお腹もすかせているだろう。

そんな明るい気分をぶち壊したのが、校舎の方から走ってくる京子の姿だった。その顔

色は悪く、慌てているようだ。校門で待ち合わせしたのに、先に行ってしまったのか。証言の関係も一人より二人。一緒に行動しなければならぬはずだ。

「何、どうしたの？　ねえ、京子はどう。うまくいった？　あたしの家さ、すっごい心配してくれたよ。もう美香に感謝！　これ、ドーナツ買って……」

京子の顔色はやはりおかしい。千夏の顔を見てから、一度ドーナツの箱へ視線を移し、今度は千夏の手を掴んだ。かと思えば、その唇は震えている。

「……どうしたの？　なんかあった……？」

これで、何かないはずがない。

「美香……美香が……」

京子が言うには、学校へ来てすぐにF1へと向かったらしい。昨夜雨は降らなかったも

の、雲は厚く、空には稲妻が走った。一人でその恐怖に耐える美香が心配だったようだ。しかし、学校へ来てみれば、そこに美香がいなかった。美香の体操服は置き去りにされ

たまま、姿だけが消えているのだ。そして確かに、建物の入り口の鍵も閉まっていたというのだ。

「……はやくつ。早く……みんなに知らせなきゃ！」

千夏は京子から大体的内容を聞くと、伝染するように震え出した手を抑え、携帯の発信

ボタンを押した。それを見て、京子も別の人間に電話をかけ始めた。三十分もしないうちに、全員が部室に揃った。

そして、そこにはもう一人、顧問のヒゲもいた。慌てる部員を見てヒゲの方から部室に

来たのだ。美香の消えたF1に沈黙が落ちる。後輩には連絡をして、至急部活は休みにな

った。ゴールデンウィーク初日。予定とは大きくはずれた不幸の幕開けだった。世の中は

浮き足だって旅行にでも旅立っていることだろう。それと正反対の空気に包まれたここは、

誰もが目に涙を溜め、自分たちの犯したことを後悔していた。ヒゲは、部室の入り口に立

ち、溢れる怒りをため込んでいるようだった。

「……どうしてこんなことになったんだ。お前達。誰がこんなことを考えたんだ。昨日、

確かに鍵は返していたよな？ 閉め忘れたというのか？」

ヒゲが、凄みの聞いた声で言う。普段、コートの中で聞く怒声のほうがマシだった。誰

も何も言えずに下を向いている。

千夏は、そんな周りを見回しながら、正直に言おうか迷っていた。しかし、なんという

のだ。ヒゲや周りの大人達をからかおうとしていた、とでもいうのか。殴られるどころで

はすまないかもしれない。まさか、美香がこんなに忽然と姿を消すなどと考えていなかった

たのだ。ヒゲに話したのは、美香が昨夜ここから消えてしまったということだけだ。

昨夜、最後に見た決意に満ちた顔を思い出す。美香が怖くなって逃げたのかもしれない

と、最初は京子と千夏で考えた。しかし、美香の家の電話は繋がらない。美香の携帯にか

け、若菜に繋がったそこで初めて美香が携帯を持っていないことを思い出した。どうして

こんなことに……、と舌打ちしたくなるのをぐっところえた。おそらく、みんなの気持ちも大して変わらないだろう。なにより、

千夏の頭の中には両

親の顔が浮かんだ。あんなに心配した顔も、作られたものだを知ったら、本当に呆れ、

嫌われるかも知れない。千夏は、自分の目から涙が一粒零れたのがわかったが、恐怖で拭

くことも出来なかった。

「お前達。先生方が、この辺は最近変質者が、夕方以降に多いから気を付けるように、そ

して無駄な行動は慎むようにと注意するのを……聞いていたはずだ。

ここで、夜のパーテ

イーでもしようとしていた……のか？」

ヒゲが、一人一人を端から睨み付けていく。

「違います……」

祥子が、小さな声で呟く。ヒゲの、鼻の下にある本物の髭がぴくりと動いた。

「それじゃあ、合宿でもしようとしていたのか？ え？」

ヒゲは、もう一度部室の中の人間を見回した。

「違います……」

祥子が同じ言葉を繰り返す。

「じゃあなんだ！ お前達は、何をしたんだ！」

ヒゲの怒鳴り声が響く。周りの部活は、バレー部に関係なく始まっているようだった。

外からは楽しそうな掛け声が聞こえるし、廊下で足音を殺して歩く人の気配を感じる。そ

れもヒゲの怒鳴り声の後、その誰かはそそくさと消えていった。

「……お前達、反省するんだ。自分たちが何をしたのかを。お前達の処分はそれからだ。考えて、答えが出たら言いに来るんだ」

ヒゲはそれだけ言うと、部室のドアを開いた。カーテンを捲ろうとして、一瞬触ることを迷うように手が宙を彷徨う。半ばくぐるようにして腰を曲げ廊下へ出ると、ぴしゃりとドアを閉めた。中には静寂が広がる。外との世界も、昨日までのじゃれあいもストレスも全てが夢のようだ。予定では、すでにヒゲを心配させて煙に巻いているつもりだった。ここでジュースで乾杯をして、お菓子を平らげていたはずなのに。こんな事態になるとは思わなかった、その考えしかない。鼻を嚙る音が聞こえた方に千夏が目を遣ると、祥子が鼻水をずるずる流して泣いていた。京子は、千夏が買ったドーナッツの箱に視線は集中しているが、それも定まっていなかった。唇の青さが、彼女の内面を写しだしていた。

「どうしてこんなことに……」

初めて口を開いたのは、そして最も避けたい言葉を言ったのは若菜だった。キャプテンが不在の今、頼るは彼女なのに。

「若菜っ。そういえば……、昨日鞆を公園に置いたんだよね？」

千夏が、掠れる声を絞り出す。横にいる香織も顔を上げた。今ま

では体育座りをして、顔を伏せていたのだ。じつと若菜を見つめている。その視線を避けるように若菜はドアの方を向くと、首を横に振った。横だ。

「え？ 若菜、美香のカモフラージュのために、公園に鞆を置くて言っただよね？ 両親にも、美香のことを伝えるって言っただよね？」

若菜は視線を逸らしたままだ。今や京子と祥子の視線も若菜に注がれている。

「……若菜？」

祥子が、膝建ちになり若菜に近づく。美香を失うかもしれないという恐怖に、部内は殺気立っている。

「ねえ？ なんて黙っているの？ 若菜は、鞆を置いて美香の親を心配させるんだっただよね？」

若菜の片目から涙が零れたが、彼女は咄嗟に脇に顔を背けてみんなに見せないようにした。

「ねえっ！ 言っただじゃない！ 大丈夫だって……。美香はここにいただけだって！ お

互いを信じればいいんだって！ 若菜が言っただよ……」

祥子が、普段大人しい彼女が、若菜の両肩を掴む。

「なんとか言いなさいよ！ あたしは、昨日の夜に若菜から連絡を貰って、親に言っただよ！ 親は心配して、あたしや他の兄弟みんなと一緒に寝てくれたよ！ 嬉しかった！ でも、どこかで悔しかったよ。情けなかったよ。こんなことでしか愛情を試せないなんて、自分が馬鹿だと思ったよ！ どうしてこんなことになったって？ そんなの、あたしが聞きたいわよ！」

「やめなっ！」

祥子の肩が、大きく震えた。彼女を止めたのは、香織の鋭い声だった。

「だって、若菜が……。大丈夫だって」

「祥子、とりあえず座って。いい、初めから考えてみようよ。美香が消えた。おそらく何者かに連れ去られた。でも、なぜ？ 美香は密室にいたのよ。美香が出ない限り外からの進入は不可能なのよ」

香織が順序立てて話していく。

「待って。そこ違う」

今度は京子の声で、一斉に視線が変わる。

「京子？ どういうこと？」

千夏が、眉を寄せて尋ねる。京子の様子がおかしいのは何かを隠しているからだったのか。

「ここは密室なんかじゃなかったのよ」

「え？ ……どういうこと？」

千夏が首を傾げる。思い当たる節はない。

「私、見たのよ。朝一番に来た時、確かにF1の鍵は閉まっていた。でも、……トイレの窓が開いていたの」

「え……」

千夏は、京子のあとに来た。そして動転していたこともあり、そんな小さなことには気づかなかった。

「そこまでは誰も見なかったでしょ。きっと、変質者はあそこから入ってきたのよ……」

「そんな……」

千夏も床に崩れた。

「美香……」

祥子の涙も止まらない。

「侵入は可能だったってことね。すると、残すは犯人が誰かってことよね。つまり、きつ

と変質者……その手がかりは目撃証言しかない。あの子がどこにいるのかも分からない。

これは確実に警察が入ってくるはず。うちの父親に、ヒゲが連絡を取ると言っていたの。

そのほうが交番を通すより早くて確実だわ」

香織が泣くことはなかった。それよりも、今なすべきことが分かっている。千夏は、じ

っと香織を見て言った。

「でも、それだと香織が怒られない？」

ふっと微笑むと、香織が返す。

「あたしは普段怒られることもないから。親と顔も会わせないし、たまにはいいかもしれない」

千夏に言う香織の顔を見て、彼女の戦いは始まっていけないのだと分かった。おそらく昨

夜、香織の父親は帰ってこなかったのだろう。香織は一人で夜を迎えたのだろうか。大事

にされ、心配されたい千夏とは違い、香織は……怒られたいのだ。

しかし、そうなる話は別ではないか？千夏は、困ったような顔で笑う香織を見て考え

た。美香の血が、ここにあるわけでもない。誘拐されたとしても、

何か連絡があるわけで

もない。それならば、美香はどこへいったのだ。考えられるとすれば、美香に頼んで、香

織は家に呼んだのではないか？そうして、騒ぎを起こし、父親に怒られようとしているの

ではないか？いや、そうすると、メンバーを巻き沿いにすることが分かっているはずだ。

やすやすと怒られる道を辿るだろうか？いや、思い起こせば香織は、この作戦がたとえ成

功しても怒られることを覚悟しろと言っていなかっただろうか？これも最初から作戦のう

ちだったのだろうか？そう思えば、千夏には、香織の困ったような苦笑いも、自分たちを



嘲っている微笑みにしか見えなくなってきた。香織を信じたいはずの気持ちも揺れる。

「そっか……。でも、香織の父親ならきつと美香を救ってくれるよ」祥子の声が千夏の耳に響く。香織から祥子に視線を移し、考えた。祥子でもあり得るこ

とではないか。彼女は確かにメンバーを大事にするタイプだ。それが兄弟を大切にすると

ころとも似ている。しかしそれならば、余計に美香を心配して匿っているのかもしれない。

朝、美香を早く連れてこようとしてなんらかの事情があったか。それとも、引っ込みが

つかなくなつて泣いているのか。疑心暗鬼になると、全てが黒く見えてしまう。京子も、あんなに震えているのは尋常ではない。まさか、何かの恨みがあつて、京子が美香を……？そう考えて、千夏は大きく息を吐き出した。これでは何も始まらない。そもそもそんなことを考えれば自分も怪しまれるだろう。そういえば、発案者の若菜は……。千夏が、若菜に顔を向けると、彼女はもう視線をずらしてはいなかった。

「ごめん。これ、あたしのせいだ」

唐突に放った若菜の声には、後悔しかなかった。

「どういうこと？」

香織が鋭く突く。

「実は、あたしは、計画は現実のものとしていなかったの」  
「……どういうこと？」

香織に重なるように、京子が言った。

「若菜、あんた何をしたの？」

祥子もじつと見つめる。

「何もしていないよ……」

若菜が答えると、今度は香織が怒鳴った。

「何もしていないわけがないでしょ！ この時点で、あたしたちは、

やっているんだよ！

若菜、どういうつもりでやったの？ あたしたちに提案したの？」

「……ごめん。本当はあたしなんでもよかった、みんなが真面目に部活をやってくれれば

よかったの……。何も考えなかったし、何もしていないの。あたしは親にも不満はないし、

受験勉強もしないつもりだし。バレエの学校推薦を狙っているから早く練習に打ち込みた

かった」

「なんでもよかった？」

千夏は驚きで素っ頓狂な声を上げた。そんなのは一言も聞いていない。他の三人も目を

丸くしていた。あんなにも完璧だと思っていた計画は、初めから無計画だったのだ。

「実はね……。でも、それには県大でどうしてもいい成績を残したかった。でも、みんな

は勉強をしたくて、部活に身も入らなくて……。あたし、どうしたらいいのか困って」

「確かに……。あたしたち、少し部活をないがしろにしていたよね。それが当然だとさえ

思っていた」

祥子が呟く。

「でも、あたしも勝手だった。たきつけるように……。みんなが食いつくって分かってい

ることを提案した。ごめんね……」

「でもさ、なんで？ 結果はどうなると思ったの？」

京子がまだ聞く。

「変質者のニュースを利用して、誰かが囷になれば、親が心配するだろうと思ったのは本

当なの。そうすればみんなが満足して部活に打ち込んでくれると思

った。受験の悩みは解

決しないけど、ひとつでも満足できることがあれば、色んなことを頑張れると思った。そ

れに、……これは勝手なあたしの意見だけど、みんなも何かを望んでいると思ったの。自

分自身や、親に対して何かを試したがっているって。それならば、機会を作ればいいだけ

だと思った。背中を押す人間が必要なのだって」

「確かにね」

千夏も頷く。

「それでも、本当にこんなことにするつもりはなかったの。あたしは鞆を公園に置くつも

りもなかった。美香のご両親にもうまく言うつもりだったの。でも電話が繋がらなくて、

結局留守電にした……。あそこの時点で、やめて美香を迎えにいけばよかった……」

「やめな。今更後悔しても仕方ないよ」

若菜が後悔の声を滲ませると、香織がきっぱり遮った。

「なにか、香織に考えがあるの？」

千夏の言葉に、香織がこくりと頷いた。

「だって、おかしいじゃない。どうして美香はこんなにあっさりと連れ去られたの？ 美香を捜すわ。もちろん、美香が変なことをされる前にね」

香織が言つと、少なからず部室にはほつと息を吐く音が聞こえた。「それでも、あたしはこれやって、なんだか自分が恥ずかしくなつたよ。それに、なにより、あたしたちは六人いないとだめだよ」祥子の言葉に全員が頷く。そう、美香のぽっかり空いた場所が、違和感を起こすのだ。

全員が、自分の位置にいて、初めて輪になれる。

「美香……。お母さん、ごめん。帰ってきて……」

「祥子。もう泣かないで。香織のお父さんも、何か分かったらきつと教えてくれるよ」

千夏の励ましで、祥子もかすかに頷いた。

「そうだね。あたしたち、何かが間違っていたんだよ。自分で何かをするのを恐れて、人にして貰おうとしていた。自分の力を生かせない小さな不満を、解決も出来ないんだよ。けりをつけるなら自分で付けなきゃね……」

熱くなる京子に、全員の視線が集中した。

「何……？ どうしたの？ 京子」

千夏が声をかける。明らかに、彼女は少しいつもと違っている。

京子はみんなの視線が集中したことに、顔を赤らめると、恥ずかしそうにはにかんだ。

「とにかく、ヒゲも言っていたでしょう。この話は他の部活にまだ話すなつて」

香織が、その空気を引き締めるように言う。全員が頷く。

「戦いはまだ終わっていない。この話が親にいけば、まず怒られる。そこから覚悟するんだよ。」

だよ。今日は部活もない。このゴールデンウィークは幸せにしめくくるんだよ。絶対に」

そう続けると、香織は部室をひとりあとにした。

## 8 終戦

香織には、ある考えがあった。父親に知られるのは構わない。しかし、美香だけは助けたかったのだ。父親へのうさをこんなことで晴らすことはできないと確信した今、むしろきちんと話したかった。携帯を出すと、香織はある番号にかけた。

「あ、達也？ 悪いんだけど今から高校に来てくれない？」

すぐに達也が来てくれると、香織は校庭の中や、校門付近を探った。それでもなかなか何も発見することは出来ない。当たり前だ。小説やドラマでは探偵や素人の主婦が事件をさらりと解決してしまう。そんなこと、普段の生活で起こるはずがないのだ。ただ、才能は生まれ持った技術であるというのも間違いではないと香織は思っていた。バレーなどのスポーツでも職業でも同じ事だ。これが、自分の進むべき道の確認になるかもしれないのだ。刑事になるには、周りの人間が巻き込まれたとしても、冷静に対処しなければならぬのだ。

「香織。呼ばれたから来たけど、さっきからお前は何をしているの？ 学校の中あちこちうろついてさ。俺、女子校の中になんていてまづくないの？」

達也が、きよろきよろ辺りを見回しながら言う。香織は、茂みの裏を確認していた顔を上げると、値踏みするように男を上から下まで見た。

「あたしが今、事件の調査をしているといったら、達也は驚く？」

「……え？」

達也は、きよろきよろと見回していた目を香織に定めた。さつきまでは、早くバイトに行かないと間に合わないと呟いていたのが嘘のようだ。

「……それ、まじ？」

達也の言葉に、香織は両手についた土を軽く払うと、人差し指を

くいくいつと手前に動かして、達也を呼び寄せた。そつと達也が香織に寄る。身長が高めの香織より、さらに達也の方が高い。腰を屈め、彼女の口元に耳を持つてくる。

「本だよ。実は、友達が事件に巻き込まれたの」

「……はあっ!？」

達也は、香織の耳に向かって大きく叫んだ。香織はその音量に驚き、飛びずさる。そして

て、叫ばれた右耳を手で覆うと、顔をしかめた。

「いったゝ……」

「あ、ごめんごめん。驚くだろう、そんなこと言われたら」

「もー。ここに達也を呼んだのは、話があつたからなの」

達也は、急に神妙な顔をする香織に首を傾げた。電話で呼び出されてここに来たものの、

香織の様子はどこか違っていた。梅雨にじりじりと近付くこの季節、じつとりとした湿気

が肌にまとわりつく日もたまにある。そう、今日はまさにそんな日だった。何かがいつも

と違っていた。

「話つて？ 嫌なこと？ 別れたいとか？」

達也は、急に高鳴り始めた心臓に気づかぬ振りをして、わざと明るく聞く。まだ、香織

のことをほとんど知らないといつてもいいだろう。それなのに別れ話か。

何か気に障ることをしただろうか、そう達也が考えた時だった。

「違うよ」

まっすぐに視線を合わせて答える香織に、達也はほつと胸をなで下ろす。気づかれない

ように、鼻から安心の息を吐き出した。思ったよりも緊張したらしい。息は数秒間溜まっていた。

「……でも達也は、あたしのことを嫌いになるかもしれないよ」

高校生、いや女の子特有のいい方だろうか。男は、嫌われないように必死になる。女は、男に嫌われる不安をぶつけ消化しようとす。どちらが正しいのかは分からない。それでも、そんな風に気持ちをはき出せる香織を、達也は羨ましくなった。そつと彼女の腕を取り、自分の胸の中に抱きすくめる。ここが、彼女の通う高校だとは、今はどうでもよかった。

「ちよつと達也、離してつてば」

香織は、両腕で達也の胸を離した。

「ごめんごめん。大丈夫だよ。……その話、聞くよ」

達也は、側の植え込みのある花壇の縁に腰掛けた。

「で？　なんでこんなことをしているの？　何を探しているのか教えてくれないと、俺も手伝えないじゃん」

達也は、顔を赤くして周囲に目を走らせる香織の顔を覗き込んだ。

やはり、場所が悪か

ったようだ。香織も、達也に促されてその隣に腰掛ける。むしろ、

顔が見えないほうが都合

合がよかった。後悔で歪むその顔を、彼には見られなくなかった。

「実は、あたしも何を探せばいいのか、分からないの」

香織のうち明ける言葉に、達也は声を失った。それではこの数十分、香織は何をしていたというのだ。

「え？　この天気の良い休みの日に、意味もなくこの植木やグラウンドを漁っていたの？

なら、遊びに行こうよ。俺、バイトを誰かに代わって貰うし。部活、終わったんだらう？」

もつと重大な話だと思った達也が、香織の肩に腕を置く。何を探せばいいか分からないのなら、探す必要がないのだ。

「うつん。違うのよ。そうじゃないの」

「……どういうこと？」

「実は、美香が。あの合コンにもいたよ。頭をお団子にしている子」

「……ああ。なんか派手なパーカーの？ あの子がどうした？」

「行方不明なの。昨日の夜から」

「行方不明！？」

達也の、香織の肩を掴む腕に力が入る。美香のことは、おぼろげだが達也の記憶にもあった。

「信じられないかもしれないけど、本当の話だから。軽蔑したかったら構わない」

達也には、この話し方が気に入らなかった。要点を話さないのに、嫌われると心配されても仕方がないではないか。

「だから、何？ 美香ちゃんはどうしていなくなったの？ 嫌われるかなんて分からないだろ」

達也は大きくため息を吐いた。それを咎めるように、香織は一度達也を一瞥したが、すぐにこれまでの経緯を話し始めた。要点をいつまんで話したが、決して都合のいいようには言わないことを心がけた。香織が話し終わり小さく溜め息を吐くと、達也が言った。

「つまり、君たちバレー部のメンバーが、愛情不足や勉強、部活への鬱憤を晴らそうと、美香ちゃんを部室のある建物に隔離したということ？」

達也は、初めこそ香織の心配をして緊張しているようだった。そしてそれは変わることがなかったが、それでもだんだんとその表情に疑心の色も混じっていった。

「そう。計画を提案したのは若菜だけど、みんな同罪。今日の朝、美香は忽然と姿を消したの。で、変質者の疑いが濃い。なにか証拠となるものを求めて、あたしはその何かを探しているってこと。ごめんね、巻き込むつもりはないから」

香織は、話し終わると、達也から一人が入れるほどの間をあけて座り直した。

「巻き込むって……。そんなことより、香織はなんで俺のこと呼ん



だの？」

香織の耳には、達也の声が冷たくなったような気がした。一瞬、心が冷える。また、一人で夜を越える日々が来るのだろうか。しかし、それならば仕方がない。むしろ、この先を続けやすくなった。

「達也を呼んだのは、別れ話ではない。でも、あたしの気持ちを話しておきたかったの。」

この事件になる前に、部員のメンバーに聞かれたの。なぜそんなに刑事になりたいのかって。つまり、両親が反対してもなりたいたのかって。」

「それは。香織のオヤジさんは、心配なんだろう。だから、反対する。違うか？」

達也の冷静な分析に、香織は頷く。

「そうね。そうだと思う。普段夜に帰っても来ないのに、勝手だよね。それで娘がなりた

いていった職業を反対するなんて。でも、あたしはそれでもなりたいたいと思う。答えは、

イエスなの」

達也が戸惑ったように目を泳がせた。

「そのあと、その子は言った。それならこれから結婚する時は？」

それよりも前、今、達

也が反対したらどうするの？ ってね」

達也は、顔を下に向けたが、その両目は閉じられている。この出した答えが、二人のこ

れからを左右することもあり得るだろう。どちらかなど選べるはずがない。千夏の両親の気持ちと同じだ。どちらも大切。選べという方が難しい。父親も、達也も、これからの将来も、どれも香織にとっては手放せないと思えるものだ。その気持ちを押しつけるのは簡単だ。しかし、それで相手に我慢させ、苦しい想いをさせながら一

緒にいても、それはうまくいかないだろう。出した答えに、今度は相手の答えが欲しかった。

今、将来を変えることは出来ないだろう。それでも、もし今この手の中にあるものを失っても、受験までの長い期間があれば傷は少しでも癒える気がした。勉強をしていれば悲しみも紛れるはずだ。「それで？」

達也が、顔を上げる。その瞳はまっすぐに香織を射抜いていた。答えを口にする強い気持ちが一瞬揺れる。

「変わらない」

香織の一言で、達也の瞳も一瞬揺れた。しかし、その動揺がすぐに消えたのを見ると、

彼も分かっていたのかもしれない。ぐっと両手の拳を握りしめる。

「変わらないの。あたしは、たとえ達也が反対しても、必ず意志は通す。それが無理だと思

うのなら、達也が答えを出して」

ずるいと思った。自分が出した答えは、達也にとっては質問でしかないのだ。香織は、

それでも、そうするしかなかったのだ。一緒にいてほしい。応援してほしいというのは簡単だ。しかし、彼のことを考えれば、そこそひどい女になる気がした。いつなれるのかも、なったから安全だという保証もない。男でもないのに待っていて欲しいとも言えないそれに、彼は大学生だ。もっと遊べるはず。香織は受験で遊べなくなる。それが、心のどこかで申し訳ないという重荷だったのだ。手放すことは悲しい。けれど、しがみついても前には進めない。

「……分かった」

達也が、唐突にその一言を放った。

「え……？ そんなに簡単に？ いいの？」

香織が、ほっと息を吐こうとしたときだった。

「待つて。これは答えじゃない。香織の考えは分かったよ。……俺、

実際に今混乱しているんだ」

達也の方へと動かし掛けていた手を、香織はそっと引き戻した。こんな答えがくるのは、ある程度分かっていたことだ。傷つかない。悲しくない。

「ちよつと考えさせて。いい？」

「……うん」

達也は、香織が頷いたのを見ると、満足そうに、半ば困ったように笑った。縁から立ち

上がり、ジープンのお尻についた土を軽く払う。

「別に反対しているわけじゃないよ。俺たちまだ学生だし、ずっと一緒にいたいけど、い

つどうなるかも分からないだろう？ でも、俺は中途半端に一緒にいるわけじゃない。た

とえ、香織が夜さみしくて俺のところに来ているだけだとしても、俺も遊んでいるわけじ

ゃないから。そうやってきちんと話してくれたからには、俺もちやんと考えてみる。それ

で……どうなるかは。待つて」

達也の顔は、笑っている。しかし、それは未来に向かっての希望の笑顔ではないと受け

取れた。この場をやり過ごすための曖昧な笑い。香織が傷つかないようにと気を遣う仮面

の笑み。恋愛など脆いもの。連絡をしなければ、それで終わる恋もある。相手のため。自

分のため。理屈をいくらこねても、結局は確実なものなどないではないか。

「もういいよ……。分かった」

香織も立ち上がると、達也を振り返ることはなかった。どうしてだろう。こんなにも、

子供の世界にも壁はある。家庭の環境。学校のレベル。将来選ぶ職業。見えない壁で立ち

ふさがり、すべては価値観という一言で片づけられる。確かに、それは存在するものだ。

だが、自分に関係ないときや、自分が優位に立てる時だけそれは役に立つ。自分が下位

になってしまえば、ただの腹立たしい無限のループに見えてしまう。どうして境界線があるのだろう。どうして、分かり合えないのだろう。

「おい。香織っ。変質者が出るなら、送っていくって」

達也が、立ち去ろうとした香織の腕を掴む。それを、瞬間的に振り払うと、香織は言った。

「あ、ごめん。でも、大丈夫。まだ明るいし。達也バイトでしょ？」

わざわざ来てくれて

ありがとう」

その顔は見られなかった。顔を少しでも上げれば、悔しさで涙が溢れそうだった。何が

悔しいのか。認められない進路も。見つからない友達も。裏切られるかもしれない不安も。

分かって貰えないと思うのなら。捨てられるかもしれない不安になるなら。いつそ自分

から切り捨てたほうが楽だった。優位にどちらが立つのかわからないなら、その席は早い

者勝ちだ。さきに、切り捨てれば勝ち。そんな気がした。出会いがあれば別れもある。そ

れは、両親を見てわかっていたことだ。別れるなら出会わなければいい。香織は昔からそ

う思っていたのだ。それなのに、達也は強引に割り込んできた。いつのまにか居やすい場

所になろうとしていた。それも、もうおわり。実際に空はまだ明るい。変質者が本当に近くにいるという実感は強まったが、今はそれよりも達也の隣にいるほうが怖かった。自分を否定されるのが怖かった。

「あ……っおい！」

後ろから達也が呼び止める声が聞こえたが、香織は振り向かなかつた。振り向けば、後

悔するのが分かっていいるから。しばらく歩いて、再度校舎の陰からやっとなり向いた時、

達也の姿はそこにはなかった。追いかけてくれるとは思っていなかった。しかし、こんな

にもあつさり手を離されるとも思っていなかった。こうして、香織の恋は、作戦とともに

破れた。

\*

ぽーんっ。ぽーんっ。体育館に、ボールの跳ねる音が響く。夕方の練習も終わり、体育

館には誰もいないはずの時間だ。

「美香……」

しかし、祥子はひとり黙々と壁に向かってずっとスパイクを打ち続けていた。ボールを高くあげ、落ちてきたところを打つ。ジャンプも踏み込みもしないので、これは手首の練習だ。床に落ち、壁にバウンドして舞い戻ってきたボールを、同じ形で打つ。その繰り返しである。うまくいけば同じ位置に戻るし、少しでも手首や捻りかたが乱れれば足が移動せざるを得ない。これは一人で出来るバレーの練習だ。香織のように、いつもトスの練習をしていたわけではない。若菜のように、推薦を狙っていつも人の倍以上走り込みをして、

練習したわけではない。京子のような身長と、生まれ持った素早さがあるわけではない。美香のような柔軟性を持ったトスを上げられるわけでも、千夏のように俊敏にボールの下に入り込めるわけではない。祥子は、悔しかっただけなのだ。それが今、ボールと向き合っ  
て分かる。自分は、逃げていたのだと。自分が必要とされないことを怯えていたのではない。周りが努力をしているのを横目で眺め、ただ自分は上手ではないと胡座をかいていたのだ。本当は、香織のようにトスを四六時中やり、若菜のように走り込むのは自分のやらなければいけないことだったのだ。それを棚にあげ、自分を可哀相だと思っただけだ。祥子の打ったボールが、軌道それで、体育館の入り口へと転がっていく。

「はあっ」

遣りすぎると、肩の筋肉が張る。それと同時に、腕も筋肉痛になるのだが、それでも祥子はやめようと思わなかった。逃げることは簡単だった。忙しい。大変。そう言葉で吐き捨て、次には事情を説明する。それでも自分は精一杯だと思っていた。出来ないことを棚に上げて、周りをうらやんでいた。家族に対してもそうだ。なぜ、昨夜自分が情けなくなっただのか、今ならば分かる。祥子は、ずっと自分が逃げていると言うことを分かっていたのだ。家族のせいにして、心の隅へ隠れていた。大したことも、思い返せばしていない。

このままいけば、おそらく国立がいざ受からなかった時、すべてのせいにして逃げただろう。家族の手伝いをずっとやらされたから。部活が忙しくて、自分だけやめられなかったから。その時、色んなもののせいにして、また仕方ない、その一言で気持ちにけりをつけるのだ。部活を辞める勇気もないくせに。中途半端なことをしているのは、自分自身なのだ。その情けなさを認めると、涙が頬を伝った。

「うっ……っ」

その悔しさをぶつけるように、ボールを打ち付ける。しかし、構え

もうまく出来てない今、祥子の打ったボールは言うことを聞かなかった。拗ねるように、また先ほどと同じ方向へと逃げていく。それを追いかけていると、不意に足の力が抜け、踞った。涙が止まらない。声が漏れそうになって、両手で口を塞いだ。どうしても、美香を捜し出したい。変質者の魔の手に関われる前に。もし、彼女に危害が加えられたとしても、自分たちで助け出してあげたかった。そのあとは、美香をどう救えるのだろうか……。それを考えると、胸が苦しくなった。自分たちは恨まれるだろう。バレー部は大会になど出られないかもしれない。簡単に撒いたはずの罪が、何十倍にもなって重くのしかかる。

「あら、なにやっているの。あなた、小笠原祥子？」

声のした方にはつと顔を上げると、そこに立っていたのは、バスケ部の副顧問だった。

「清原先生……」

清原は、体育の教師であり、その中では唯一の女性の体育教師だ。ふくよかな身体は、

生徒に愛される肝っ玉母ちゃんの象徴ともいえる。この厳しい校則の中で、時々目を瞑って

てくれるのも、好かれる所以である。だからといって、甘いわけではない。厳しい口調で

叱責するときもあるのに、なぜかそれは嫌味も恐怖もないのだ。

「なにしているのよ、こんなところで。バレー部は今日休みになったんでしょ……。つて、

何。泣いているの？」

清原先生は、踞った祥子の目の前に来ると、その顔を覗き込む。

「すみません。ちょっと色々あって……」

祥子が立ち上がると、清原は、その頭に手を置いた。その手は柔らかく暖かい。

「バレー部、大変みたいだね。早く帰りなさい。このあと、ご両親たちが集まるみたい

だから」

清原は、祥子の頭を撫でながら言う。

「え？ 親が？ 本当ですか？」

清原は、祥子が知らないということに驚いた顔で見下ろした。

「何、聞いてなかったの？ 早川のお父さん、刑事さんなんだってね。連絡をとったら、なんだか招集になったみたいよ。私も一応参加するけど。今日学校へ来て驚いたわよ」

「そうなんですか……」

祥子の足が、小刻みに震えていた。もう、親たちに悪事がばれる瞬間はすぐそこに迫っているのだ。どうしようもない後悔が、怒られる恐怖へと姿を変えていく。それをみた清原は、何を勘違いしたのか、祥子を抱きしめたのだ。ふくよかなその身体は、まるでソファに身を沈めたような心地よさだった。しばらく、誰かこうして抱き合うことなどなかった。こんなにも安心感をもたらしてくれるものだったのだ。

「……大丈夫。きっと美香のことは、先生達も探し出すから。あんなたちは心配しないで、大人しくしていな」

またその言葉で涙が出る。先生の胸のあたりで涙をしていると、そつと離された時、そこに小さなシミが出来ていた。

「ごめんなさい……。跡……」

祥子がそれを謝ろうとすると、清原は大げさに手を顔の前で振った。

「ああ、こんなの平気よ。じゃあ、あんたはまっすぐ家に帰ること。いいね？」

清原が、人差し指を祥子の顔の前に突き出す。唇がきゅっとしまり、目が真剣だった。

それに頷いて答えると、その頬がほっと緩んだ。やはり、これ以上被害を増やすことを

心配しているのだろう。香織の父親を伝って、どれほど警察が介入してくるのかはわからない。しかし、普通の家出ではないのだ。捜



査員が増えるのも時間の問題かもしれない。清原も警察やマスコミがくるのを恐れているのかもしれない。もしもそんな大事になれば、自分たちの内申どころか、高校のイメージまで悪くなる。後輩が何代も推薦を受けられな

くなり被害が広がる。今まで、この高校を卒業していたことを誇りに思っていた先輩の恥

になるかもしれない。考え出したらきりがない。この波紋は、どんな広がっているのだ。

「じゃあね」

清原が、祥子の前を立ち去ると同時に、祥子もいきなり走り出した。全ての後悔と恐

怖を振り去るように、腕を一心に振り、全速力で自転車置き場まで行く。鞆を籠に突っ込

むと、一息吐いた。足をペダルにかけ、座ると、一気にこぎ始めた。今できることは、言

われた通りに大人しくしていることだ。家に帰ろう。親が来るということは、怒られるこ

とだ。まずはこの罪を認めよう。そう思えた。それからまた考えよう。どうして大人達は

こんなに近くにいてくれたのに気づかなかったのだろう。勝手に手を引っ込めていただけ

なのだ。それを伸ばせば、すぐにあんなに温かい胸があつたのに。

祥子は、清原に抱き留

められた感触を思い出した。その時感じた懐かしい匂いに、祥子は自転車をこぎながら目を細めた。

\*

若菜は、覚悟を決めていたのだ。この作戦を提案したのは自分だっ

た。なによりも、安

易な考えで実行してしまったこと。みんなが思うより、これを真面目には一番考えていなかったこと。部活に集中してほしかったこと。すべて、言い訳でしかないが、若菜には大事なことだったのだ。美香のことは心配だが、これで部活を諦めるつもりもなかった。

「……それで、他のやつらの悩みは知っているのか？」

若菜は、部室でみんなが解散したあと、一人体育教官室に来ていた。部活での報告があるとき、呼び出されるのは美香だったが、彼女が休みの時や、用事のあるときは副キャプテンの若菜の役目だった。ヒゲが、そんな若菜をじつと見つめる。

「知っているものもあります。ただ、知らないものもあります」

若菜が、椅子に座る髭の前に建ち、下を向きながら言った。部室でみんなが帰ると、若菜はひとしきり涙を流した。その跡は、今も残っている。だが、決めたのだ。この責任は、自分で取るうと。

「なんだ？ 中途半端だな。そんな気持ちでこんな騒動を起こしたのか！？ 一人姿を消したんだぞ？」

若菜の喉がごくりと鳴った。そんなことは分かっている。だが、大人はいつもこうだ。

子供の悩みはたいしたことがないと決めつけている。仕事で悩み、家族を守ることに必死になる自分たちが、一番正しくて悩み抜き、そして生きていると勘違いしている。子供だって親の顔色も窺えば、何かを手伝おうと必死になる。心配もするし、自分で生き抜こうと考えている。それを、分かっている。標的は、まだ目の前にいるのだ。自分たちの兵士を一人失ってもなお、敵は元気に生きている。そして、自分を責めているのだ。罪は認め、怒られるつもりだった。しかし、それも見下されるような視線でぐらつく。それが視線に現れたのだらう。ヒゲが、若菜に顔をしかめたかと思うと、大きくため息を吐いた。

「そんな気持ちと、言ったのは、悩みについてではない。事態についてだ。そして、無謀な行動についてだ」

ヒゲは、いつも怒鳴った。いつも怒っていた。若菜は、困った顔を見るのは初めてだった。それが、今度は動揺となる。

「どういことですか」

「お前達は、友達を一人犠牲にしても……その身までかけて、得たかったものは、何だ？　それが悩んでいたものだろう？　それを解決するのに、あいつの命を捧げたようなものだ。それで、お前達は得られたのか？　え？　お前の悩みはなんだったんだ」

ヒゲは、もう怒鳴っても怒っても居なかった。ただ、切実に若菜に問いかけていた。若菜の欲しかったもの。それは……。推薦状だ。それもヒゲに書いて貰いたかったもの。それで、大学へ行けたのだ。将来に必要な一枚の紙。それだけだ。そのために必要な実力も、結果も残してきたつもりだ。それなのに、最後の大事な大会の前に、仲間も秩序が乱れ始めた。この提案をした時、若菜は確かに自分のことしか考えていなかったのだ。自分が得ることが出来るのなら、多少の犠牲は仕方ないとまでで思っていたのだ。まさかここまでとは思わなかったが、大小は関係ないだろう。仲間が裏切っている気がしたが、実は、自分が裏切っていたのかも知れなかった。

「欲しい者は、手に入っていません」

その続きは、若菜の口から出てこなかった。どうすればいいのだ。失ったものは、もう元には戻らない。それならば、どう償えば……いいと言うのだ。ヒゲも教師とはいえ、その答えをくれることなく、ただじつと若菜を見つめていた。

\*

「ただいまー」

千夏は、いつもと同じように玄関のドアを開いた。周りの空気というのは、自分の感情次第でいくらでも変化する。昨夜、あんなにも暖かい色をしていたこの家は、今は寒々とした青い色が立ちこめている気がした。そこへ、母親がさらに青い顔で飛び出してきたのだ。ドアを閉めた千夏は、靴を脱ごうとして身体が止まった。

「お母さん？ どうしたの？」

もう問題が知れ渡ったのだろうか。殴られるか、否か。ぐっとこれからの戦争に向けて奥歯を噛みしめた時だった。

「千夏……。美香ちゃんが……」

母親は、受話器を片手によろよと千夏の方へと歩いてきた。歩いてくる途中に、スリ

ッパが片方脱げ、もう一つも脱げる。口をあんぐりとだらしく開き、千夏へ手を差し出す。

なんだというのだ。その手を思わず掴み、千夏は自分の肩へ回すように導いた。

「どうしたのっ！ お母さん、美香が何！」

見つかったのだろうか。しかし、この様子で明るい話題を提供してくれるとは思わない。

母の手から子機を取ると、千夏は耳に当てた。しかし電話の向こうには誰もいない。それを

を放り出すと、母を抱えて居間に入った。

「おかーさんっ。どうしたの？ 何があったの？」

母をソファに座らせて、台所へ走る。水道の水を並々とグラスに注ぐと、今度はソファ

へ走った。

「電話があつたわよ……」

母親が、美香の手から取ったコップに口を付けてから言った。おそろく学校からだ。千

夏は、顔を背けて頷いた。

「顧問の先生からよ。香織ちゃんのお父さんが、色々やってくれたみたいなんだけど」

「……けど？ けど、何？」

母親は答えを知っているのだ。早く、早く教えて欲しかった。美香は無事なのだろうか。

「血痕が、出たらしいわ」

そう言い終えると、母親は泣き崩れるようにしてソファに顔を埋めた。肩が震えている。

千夏はそんな母親を宥めることも出来ず、呆然と宙を見つめた。血痕……血液ということ

は、美香が怪我を負ったのだ。

「そんな……そんな、美香。警察……」

「大丈夫。大丈夫よ。詳しくは帰ってきてから話すから」

「帰ってきてからって。どこかへ行くの？」

母親は頬を手の甲で拭くと、すぐに無理矢理微笑もうとした。

「そうよ。学校へ保護者で呼ばれたわ。血痕は見つかったらしいけど、美香ちゃん本人は

見つかつてはいないらしいの。だから、これからどういう措置をとるか、相談するらしい

わ。お母さん、なるべく早く帰ってくるから。お父さんが戻るまで玄関は開けてはだめよ。

それと」

母親の言葉に、千夏はひとつひとつ確認するように頷いた。これ以上悪いニュースがあるのか。

「あのね、まだこのことを公にはしないらしいの。誰にも話しちゃダメよ」

そんなことか、と千夏はうなだれた。言われなくても、話すつもりなどなかった。自分たちの悪事から始まったことだ。言えるわけがない。母親は、ずっと立ち上がると、服を簡単に着替えて始めた。電話は、ヒゲから来たのだろう。それならば、千夏達が何をしでかしたのか母親には伝わっているはずだ。詳細までは知らなくても、悪事を企んでいたことは分かっているのだ。母親の背中を見てそこまで考えてから、その思考は中断した。

美香の血痕が見つかったということは、益々事件だと確信されたことになる。そうなれば、美香がなぜ校内にいたかは別としても、ま

さかメンバーも絡んでいると知らされていないのだろうか。本当に、ただ事件に巻き込まれたと、そう知らされたのかもしれない。それは、千夏にとっては有り難い話だ。せつかく大事にされているのを時間できた途端、再び迷惑な子供の烙印を押されてしまうのだからそれならば、美香には助かって欲しいが、このままでも悪くないという感情が湧いた。しかし、本当に犯人はいるのだ。これから夜まで、この家にいなければならぬ。なぜ、変質者はF1に美香がいたのを知っていたのだろうか。メンバーではない身内にも、犯人がいるのだろうか……。考えながら床の一点を凝視していると、視界に母親の姿が入った。ふと顔を上げると、彼女の目は先程の動揺が嘘のようにまじまじと千夏を見つめていた。

「……何？」

思わず、声が裏返りそうになる。母親は、千夏の言葉に魔法が解けたように動き出すと、肩までの髪の毛を撫でた。そして小さく首を振る。

「ううん。何でもないの。ちょっと千夏が心配になっただけ。行つて来るね」

千夏が頷くのを待つて、母親は家を出ていった。それを見送ると、千夏は二階の部屋へと移動した。部屋に荷物を置くと、ベッドの上に座り考える。香織も言っていたではないか。何かがおかしい、と都合良く考えれば、確かに母親は全てを知らずにいるだろう。

しかし、そもそも誰かがあの狭い空間に美香がいることを知っているとしたら、どこかで計画を聞いていたはずだ。全員で計画していたのは、部室だけだ。千夏は思い出しながら布団に潜り込んだ。一階に一人でいるのも怖かった。もし、バレー部がなんらかの理由で狙われているとしたら、いつ自分に魔の手が襲いかかるか分からない。恐怖で叫びだしたかった。これなら、みんなと固まっていればよかった。何をするにも怖い。外に行くなど以ての外だ。

「あ……」

千夏は、ひとつ思い出したのだ。香織と下校途中。あれは三日前だ

つたろうか。多少の興奮が身体を包み込みながら、二人で計画について話していた。その時、後ろを歩いていた男が一人いたではないか。あのときは気にならなかった。しかし、いつの間にか後ろにいたあの男は、どこか挙動不審だったとも思える。

もしや、あれが変質者なのだろうか。姿はぼんやりとしか思い出せない。それでなくとも、夜だった。千夏は、我慢できずに携帯を手にした。他の者に話すなど言われたが、内部なら構わないだろう。それに、今の恐怖をうち消してくれるのは、やはり香織の存在しかなかった。発信ボタンを押して数秒待つと、その音は途切れた。

「もしもし？ 千夏？ 大丈夫？」

携帯を持つ手が震えて仕方なかったが、香織のその一声を聞いただけで、口が開いた。

「香織……」

電話の向こうは、まだ外らしい。千夏の声も、向こうの車の音にけされそうになる。この交通量の激しさだと、学校前的大通りだろうか。

「今……どこにいるの？」

千夏の声は、やはり聞こえなかったようだ。

「え？ なに!？」

その声に従い、今度は幾分大きめの声で繰り返す。

「ああ。あたしはさつき学校を出たところ。千夏は家に着いた？」

さつき学校を出たということは、一人で駅まで歩いているということだろう。やはり、香織は怯えることがない。だからこそ、香織に電話をしたかったのだ。きっと落ち着かせて貰えると思った。

「うん。さつきね。でも、お母さんが学校へ行ったから怖くなって……」

「え？ 学校？」

香織は、保護者が呼ばれていることを知らないのだ。千夏に、事情を求めた。

「うん。みんな親が呼ばれたらしい。きつと香織のお父さんから説

明があるだろうって。だって……美香の……、美香の血痕が見つかったっていうんだよ。信じられない……」

「血痕！？ どこにっ！」

香織は、すぐにその話題に食いついた。しかし、千夏もはつきりと聞いたわけではない。

「ごめん、そこまでは……。でも、多分学校の中だと思うよ。それに、それなりの……」

「変ね。おかしい」

「香織？ おかしいって何が？」

千夏が聞いても、香織は黙り込んだ。香織は、みんなと別れて何をしていたのだろうか。

千夏の脳裏に疑問が浮かんだ時、電話の向こうから再び声がした。

「千夏。明日も多分部活はないと思う。でも、話したいことがあるの。学校へ……うっん。

部室に来て。」

「……話したいこと？ でも、家の親がなんていうか……」

「大丈夫。なんとかごまかして来てよ。犯人がいつ見つかるかわからないのに怯えてばかりいたら、家から出られないよ。家だって安全じゃない。平気。

何かあったらすぐに電話して」

「うん……。じゃあ、他のみんなには連絡しておく。香織……危ないことをするのは……」

「大丈夫！ もし、あたしに何かあったら、すぐにヒゲのところへ行ってちょうだい」

「ヒゲ？」

千夏は、警察と知らない香織に、若干の疑問を持った。なぜ、警察に頼らないのだ。香

織が美香のように姿を消して、それでもまだヒゲを頼れというのか。ヒゲを頼って……何



になるのだ。

「そうよ。いいから、警察よりも前に、ヒゲのところへ行くの。それに大丈夫。あたしの

ことは、心配しないで。じゃあね。また明日ね」

慰めて貰うどころか、余計な疑問をもらってしまったようだ。香織は言うだけ言うと、

すぐに電話をきってしまった。

「あ……。男のことを聞くの忘れた」

かけ直そうかとも思ったが、とりあえず言われた通りにしようと思った。この行動が美

香を助けることになるのなら。千夏は、メンバーに連絡を取ろうと、携帯を再び開いた。

\*

おかしい。何か違和感が残る。だが、それがどこなのかが分からない。香織は、しばらく

く公園のベンチに座るとただじっと考え込んだ。ずっと握っていた電話をポケットに戻し、立ち上がる。まだ、帰れない。香織は学校へ戻ろうと思った。公園には、数人の親子が遊んでいて、制服の香織のほうがおかしかった。桜の花びらはとうに散ってしまった。いつの間にか緑の葉を茂らせている。それを見上げながら、香織は考える。何かがおかしいのだ。どこから、おかしくなったのだ。足並みが、だんだんと早くなっていく。なぜ血痕だけが見つかるというおかしなことが起こっているのだ。それに、それはどこに？ 香織は、達也が来るまでの間、来てからと、学校のあちこちに何かが残っていないかと探した。それでも、何も見つけれなかった。血痕はどこにあつたのだ。いや、香織が探したのは、おもに体育館の周りと、校門周辺だ。それ以外にあつたとしたら……一体なぜだ。夜は校舎に入ることも出来ない。窓ガラスを割って侵入したのか？ それならば、犯人は一度学校へ入ったというのか。いや、そう決まっ

たわけではない。ゆつくりと歩きながら、首を縦や横に振るのを見て、すれ違う人間達は、一様に不思議なものを見るような目で眺めた。それでも、疑問をひとつ浮かべてはうち消す作業を、香織は繰り返した。学校へ着くと、体育教官室に走る。まずはヒゲに、そしてもしかしたらもう父親が姿を見せているかも知れなかった。校門脇に止めてあるその車は、香織も何度か見たことがある。父親が家に帰ってくる時は、これに乗っているときがあつたのだ。その車の中を覗いて見ると、何日も帰っていない様子が、まざまざと表れていた。この車の中で生活出来るのではと思うほどに、後部座席には衣類がある。そして助手席には、車の中で待機するときには飲むのか、ココアや水筒まであつた。他にも、何の料理をするのかという食材があり、香織がため息を吐いた。あの夜、久しぶりに帰ってきた父親は、香織が食べているコンビ二のご飯に文句を言おうとした。それに恥じるほどの食事を自分もしているではないか。母親がいればこんなことはなかったかもしれない。そう思ったところで、香織は首を思い切り横に振った。こんなことを考えても、前には進めないのだ。香織は、無性にボールをつきたくなった。

今日は、そういえばトスをしていない。香織にとって、そんな日はなかった。ボールがないまま、上を見上げた。歩きながら、額の上に手をかざす。フォームだけをしていても、まるでボールがあるのではないかという感触に襲われる。ふ、と笑みがこぼれる。こんなにも、身体に染みついているとは。早く、チームでプレーがしたいと身体が疼いた。あんなにも練習は苦しいのに、もはや中毒だ。教官室に着くと、すでに親は数人が集まっているのが見えた。香織が、中へ入ろうかと迷っていると、不意に肩を叩かれる。振りかえると、そこに立っていたのは、千夏の母親だった。

「香織ちゃん、早く帰らなきゃ駄目じゃない」

「あ、すいません。こんにちは」

久しぶりに会うというのによく覚えていたな、と内心舌を巻く。思わず身体をするりと千夏の母親の背後に回したが、思いの外母親

は小さかった。その直後、ドアが開く。

「お、なんだお前。まだいたのか」

ヒゲが、ドアの間から顔を出した。千夏の母親の声が聞こえたのだろう。そつと外から聞き耳を立てたかった香織は、思わず顔をしかめた。

「香織、何をしているんだ？」

その太い声に嫌な予感がして顔を上げると、ヒゲの脇から顔を出しているのは、あろう

ことか香織の父親だった。

「父さん。ねえ、美香の血痕が見つかったって、本当なの？」

香織は、隣で千夏の母親が驚いた顔をしているのを横目で身ながら父親に言った。父親

は、最初大きなため息を吐いたが、諦めたように頷いた。微かに苛立っているようにも見えた。

「本当だ。学校の裏で見つけたさ。でも、今は人がいるから行くんじゃない。お前はさ

つさと家に帰るんだ。外へ出るな」

大人達は、同じことしか言わない。中を覗くと、保護者が円になって座っている。きつ

とメンバーはみんな、家で寂しく不安な気持ちを抱えているのだろう。

「分かった。美香は？ 無事なの？ 誘拐ってこともありえるの？」

香織は、それでも最後の質問だとばかり詰め寄った。しかし、父親は軽く首を振っただ

けだった。それを、これから保護者に報告するのだろう。下唇を噛みしめ、香織は父親を

睨み付けた。香織が何かをするのと同じく阻むつもりなのだ。

「もついい……っ」

香織が背中を向けた時だった。

「早く帰れ」

父親のその一言だけが追いかけてきた。そして、その隙間から見えたのは、清原までも

が泣いていることだった。普段は気丈な先生までが、ハンカチを目頭に当てていた。

すぐに、ヒゲは千夏の母親を部屋に入れ、そしてドアを閉めてしまった。ドアに耳をつけたが、中からは何も聞こえない。清原が泣いているのは、香織の胸に深くトゲを刺した。

泣いている。なぜだ。警察は、もう美香の身柄を手に入れたのではないか。それも、最悪な形で。香織の足が、初めて震えた。本当に、失ってしまったのだろうか。香織は、震える足で階段を下った。裏庭へ向かう。確かに、さきほど香織は裏庭へは行かなかった。なぜなら不自然だからだ。どうして裏庭なのだ。F1から校門とは正反対のほうにあるそれに、なぜわざわざ行かなければならない。香織の頭にはそれがなかった。しかし、事件とはこうなのだろう。人間の感情が読めないと同じくらい、事件も先が読めないのだ。血痕がいつのものは分からない。自分がもしも、もっと早くに裏庭にも行けば、何かが違ったのかも知れない。そう思うと、恐怖で吐き気までこみ上げてくる。裏庭へ付くと、そこには何人かの刑事がいた。背広を着て、踞っている。

「どうして……誰が見つけたの？」

聞いて、刑事が教えてくれるとは思わなかった。香織は、身体を校舎の陰に隠してその様子を見守る。そして、角度を変えた時だった。

「ひっ……」

裏庭の、芝生の一部が、赤く染まっているのだ。それも、大量といえるほどの量で。見たこともないような量の血が、そこら中に飛んでいる。そしてそれは、ぽつ、ぽつと方向を指しているようにも見えた。

「なに……あれっ」

口を開いた瞬間、吐き気がこみ上げた。くるりと後ろを振り返ると、全速力でその場を

去る。どこに行くかも決まっていなかった。ただ、あの血の塊が追いかけてくるようで怖かった。

た。足が竦む。散々走り、気づくとそこは演劇部が練習しているホールだった。美香の事

件が知らされていない今、学校にはいつもと変わらないおだやかな時間が流れている。ホ

ールの扉を開けると、中ではもうすでに二年生が中心となって舞台上で動いていた。

一年生がその周りでちょこまかと荷物を運ぶ。ここは、世代が入れ替わったところなのだ。

こうして、人は入れ替わっていく。生きるのも死ぬのも入れ替わり。会社の中でも、学校

でも。その場所には留まることが出来ないのだ。込み上がる吐き気で、身体が震える。少

しだけ休もうと、ホールの一番後ろの端の座席に腰をかけた。舞台のほうしか灯りがついで

ていない今、たとえ後ろに誰かいてもさほど気にならないだろう。そのうえ、三年生だ。

文句は言われないだろう。舞台の中央に立った生徒が、なにやらセリフを言い始めた。

まだ、代替わりをして間もないからか、声が後ろのほうまで届きにくいようだ。それで

も、目を瞑ると頭の刺激剤のようになり、妙に心地よかった。脇から音楽も加わる。場面

はもう途中のようで、その音楽は悲しげだ。と、すぐに車の急ブレーキ音が入る。車のぶ

つかった音。

「おかああさんっ。おかあさん！」

その声に、香織が目を開けると、劇の中では、人間が二人に増えていた。先ほど話して

いた彼女は床に倒れ込み、脇ではもうひとりの女の子が泣いている。先ほどの車の音。事

事故の場面か……。香織の脳裏にも、昔のしまい込んだ記憶が蘇る。

「おかあああさんっ。おかああさん」

その声を、ぎゅっと目を瞑って押し戻す。最近では、滅多に思い出すこともなくなっ

きたはずだった。それなのに、こんなに些細なことで、嫌な記憶というのは忠実に再現さ

れる。楽しかったことは、思い出したくてもどんどん色あせていくのに、辛かったことは

忘れない。これは、なんの仕打ちなのだろう。香織は、そのままぎゅっと目を瞑り続

けた。

「あの、もう締めたいんですけど、いいですか？」

不意に肩を叩かれ目を開けると、目の前には、一人の女の子の顔があった。

「うわ……。っ。え？」

香織が気づくと、そこは真っ暗だった。いや、性格に言えば外も真っ暗だったのだ。あのまま、思い出をまた封印しようとして目を瞑ったまま、眠りについてしまったのだ。

「あ、ごめん。今帰るから」

香織は、隣に置いて置いた鞆を取ると、急いで外へ飛び出した。そのまま校門まで一気に走る。その時だ。校舎の方から誰かが走ってきた。もう体育教官室の灯りは消えていた。それなら、生徒だろうか。それとも……。

一人、現れたのは香織のよく人物だった。自転車に乗り、颯爽と

駆けていく。しかし、どこか周囲を窺っているようにも見えた。なぜ。香織は、その時、昼間見た血痕を思い出した。裏庭へ引き返す。血痕の周りには、黄色い規制線が引かれている。どれほどの刑事があれから来たのかと、香織は思った。そこはもう、調べ終わっているはずだ。香織は、暗闇の中、そっと近寄った。灯りがないとよく見えない。さっきは気分が悪くなったが、夜の中、それはあまりよくみえないくらいで都合良かった。携帯を開き、その灯りで地面を照らす。何か、何か分かることはないだろうか……。そう思った香織は、ふと違和感に気づいた。先ほどの自転車の人物。この血痕……。これは早く家に帰る必要があるそうだった。香織は、朝とは違う足並みだった。

## 9 反撃

「香織！ よかったよ、生きていて」

香織が部室のドアを開けた途端、千夏が飛びついてきた。今日は、一晩じつくりしたこと

を整理するためにも、香織はトスをしながらやって来た。そのボールが、衝撃で香織の腕

から転がった。行く先はもちろん、部室の中。その跡を目で追うと、どうやら全員が集まっ  
っているようだった。

「香織。千夏から聞いたよ。どういうこと？」

部室には、京子も若菜も祥子もいる。みな一様に青ざめた顔で、香織を見つめている。今日はお菓子も飲み物もない。美香が心配で眠れなかったというのが、全員の顔に表れ

ている。香織はいえ、昨晚インターネットや本を使って調べた結果、ある事実に向

っていた。部室に足を上げることなく、香織は言った。

「謎がとけたの。あたしが正しければ、美香は生きているわ」

「え？ それはどう……」

千夏が挟もうとした口を香織が止める。

「その前にもう一度約束して。たとえ何を知っても、誰も責めない  
と。いい？」

香織の言葉に、戸惑いながらもみんなが頷きあう。

「よし。それじゃあ行こう。みんな、鞆持つて」

香織は、ボールを胸に抱えると、外へ足を踏み出した。

「ちよつと、どこに？」

「ついてきて。ここで待っていても美香は帰ってこないよ。そう、  
見つけてあげるまでね」

香織は少しだけ肩を竦めた。



「あたしも実際なぜそうなったかは分からない。でも、いくつかを考えて答えがわかりかけているのよ」

「行こう」

若菜の一言で、全員が立ち上がった。今日もバレー部は休みだ。後輩は、何が起こったのかを心配しながらも、返ってくる言葉は喜びの声だった。香織達の戦いが、終わりを迎えている。それぞれのおもいを胸に秘め、最後の戦いが幕を開けた。

\*

学校を出ると、六人は話すこともなくただ黙々と歩いた。行き先を知っているのは香織

だけなので、仕方なく他の五人は後を付いていくしかなかった。五人はどこへ行くのか気になったが、香織のその足取りに迷いはなかった。十分近く歩いた所で、不意に香織の足が止まった。そして、全員が知っている家だった。

「ちよつと、ここつて……」

京子が戸惑いの表情で香織の顔を見た。大きくはないが、一軒家だ。真っ白な壁には、

鉢植えが飾られている。その中では、色とりどりの花が咲いていた。そして、門の中にある物に、祥子が飛びついた。

「これ、美香の自転車じゃない！」

そのとおりだった。美香の名前が、前輪を覆う縁に書いてある上に、前籠は相変わらず

へこんでいる。間違いない。香織は、それを確認すると小さく頷いた。

「なんで！　ここは、前にみんなで来たじゃない！　どうして美香

「がここにいるの！」

若菜が言う。そう、この庭で、以前バーベキューをしたことがあるのだ。

「それは、本人に聞いてみようよ」

そう言っていると、香織はチャイムに手をかけた。チャイムの音が静かに、だがはつきりと響

いた。門の壁には家の中に繋がるマイクが付けられているにも関わらず、生の声が外まで聞こえた。顔を出した途端、その人物は微笑んだのだ。

「はい。って、あら。早かったのね」

意外にも冷静な対応が、メンバーを反対に動揺させる。しかし、誘拐にあたるかもしれ

ない今、この態度を見て、香織の中の想定は確信へと変わっていった。普段の愛想を一切

消して香織が言う。

「美香……美香に会わせて下さい。清原先生」

その人物の顔に、一同は呆氣にとられたままだ。香織と清原を交互に見ると、千夏が叫んだ。

「なんで!？」

隣に立つ京子の袖を引つ張るが、彼女も自分の思考回路を保のに精一杯のようだ。千夏

の顔を見て、同じような声で言った。

「知らないよ!　じゃあ血痕は？」

「血痕!　そうだ!　美香は怪我をしているんでしょう?」

「先生!　ひどい!」

京子と千夏が言い合っていると、一人祥子が呟いた。

「美香は……、いるのね。生きて……いるんでしょ?」

その目からは、再び大粒の涙が流れた。休日に制服を着た六人が、こんな家の前で騒いでいても迷惑だろう。若菜が祥子の背中をさす

るのを横目で見ながら、香織はもう一度言った。

「美香に、会わせてください。失礼します」

門を開いて中に入る。清原が顔だけ出した状態のドアを思い切り開ける。清原は、パジ

ヤマ姿だった。香織の行動を止めなかった。

「ねえ、どういうこと？」

後に続いてきた千夏が、香織の制服の背中を引っ張る。振り返ると、残りの五人は切実

な顔で香織を見ていた。祥子意外の目に涙はなかったが、一様に眉毛が下がっている。だ

が、美香の姿を見るまで、香織は少なからず安心出来なかった。

「説明するよ。それには……、先生。もう一度言います。中へ入っていいですよ。」

清原は、素直に頷くと身体を避けた。赤いパジャマは、この場の緊張感をどうも緩めて

しまう。そしてその身体も、うっかりすると玄関のドアを塞いでしまふほどだ。その脇を

すり抜けて、香織は中へ踏み込んだ。家の中は、コーヒーの香りが漂っている。一見、普

通の家庭の朝の光景と何も変わらないだろう。しかし、それはここに目的の人物がいない

時の話だ。何かあった時のために、携帯電話を制服のポケットに移動する。

「そのドアを開けて、リビングで待っていてちょうだい。ちょっと着替えてくるわ」

香織が頷くと、清原は玄関前にある二階への階段を上っていった。

メンバーを振り返り、

香織は移動を促した。各々に顔を見合わせながら、みんなが香織に従う。しかし、美香の

姿は見当たらない。部屋の中は綺麗に片づいていて、棚の上には綺麗



時に、やっぱりという確信を掴んだ。香織はその結論に達すると、無意識のうちに笑みが

こぼれた。なんということだろう。騙したつもりが、騙されていたというのか。

「ちよつと、なにこれ……」

若菜も呆れたように呟いた。清原のあとから入ってきたのは、香織の父親だけではなく

ったのだ。ヒゲも、千夏や若菜、祥子、京子の母親も続いた。一緒に、大人達は笑っていた。

た。こんなことをしかしたのは、子供だけではなかった。

「何っ！？お母さん！ お母さんがどうしてここにいてるわけ？ みんな……みんなが犯人

なの？ どうして美香を誘拐したのよ！」

千夏がソファから立ち上がり、食ってかかる。千夏が言葉を発する度に、彼女の母親は

顔色を変えた。ついに母親が口を開いた時、香織が言った。

「千夏。ちよつと待って」

千夏は、一旦言葉を切ると、諦めきれないように母親を睨み付けた。そしてソファに座る。

「あたし、何かがおかしいって言っていたよね。初めから親も知っていたわけではないと

思う。親は美香がいなくなった時は、何も知らないはずよ？ 昨日の招集でしょう。そう

でしょう？ 父さん。だって、美香がいなくなったことは、あたしたちが伝える役目だっ

たじゃない」

「そうだ……。でもなんで？ ここに親が集まるの？ え、どうして？」

千夏が呟く。若菜も祥子も、居心地が悪そうに小さくなっている。

親が集まった。全て

の悪事の計画は明るみに出ているのだ。その空気の中、京子の腹の虫が小さく鳴いた。誰

も笑うことなどない中で、京子の母親が、京子を睨み付けたのが香織には見えた。

「美香は何者かに連れ去られた……。ううん違う。その時点で間違っていたの。そう、や

っぱり。美香は、保護されたのね？おそらく見つかってしまったのよ」

香織は、父親の顔を見てはつきりと言った。

「保護！？」

残りのメンバーが声を揃える。そういえば、この部屋に美香も、美香の親もない。保

護とは、無事ということなのか。

「美香。大丈夫。あたしたちが悪かったの。ごめんなさい。出てきて」

香織が、さきほどよりも少し大きな声で廊下に向かっていった。その時だった。床を踏

みしめる音と同時に姿を現したのは、紛れもなくバレエ部のキャプテン、美香だった。何

事も変わらない。怪我もない。その髪の毛だけは、いつものようにお団子にまとめられる

こともなく下ろしたままだ。それでも元気だった。立っている。それだけで奇跡のように

思えた。失ったと思ったのに、生きていた。それだけがメンバーに安堵をもたらせた。試

合のために必要なのではない。美香という一人の人間が、いかにバレエ部のメンバーの間

でかかせないものだったのかは、その姿を見た時の感情が表していた。顔を見ただけなの

に、鼻の奥がつんと痛くなった。口がわなわなと震え、知らぬ間に嗚咽が漏れる。すぐに

でも体中をなで回し、その存在を確かめたい衝動に駆られる。部屋には、ため息とすすり

泣きが響いた。親たちも、部屋の脇に一列に並んだ。

「ねえ、教えて。美香は、どうしてここにいるの？ まだ少し、分らないことがあるの」

香織の言葉に、美香は、申し訳なさそうに頷いた。そっと周りを見ると、思った以上に

若菜が嗚咽している。おそらく、責任を感じて、罪の意識で押しつぶされそうになってい

たのだろう。何度も目の周りを擦っているので赤くなっている。緊張からか額に汗が浮か

び、前髪が張り付いてしまっている。

「実は……」

美香が部屋の中央にやってきた。美香の声に、若干周りの泣き声が弱まる。

「あたし、あの夜、みんなが帰ってから怖くて。すぐに眠りに着いたの」

親たちはこの話を聞いているのか、もう驚いた様子もない。ただ、メンバーだけが動揺

している。

「そうしたら、お昼に食べたものがよくなかったのかもしれない。

……お腹を壊したの」

「……は？」

思わぬ言葉に、香織が聞き返す。周りの視線が香織に集中し、一言謝る。目で、美香に続けるように促した。香織がここにいるということは、美香が自分で抜け出したのだと思っていた。それも恐怖で。まさか、体調に異変があったとは想像もしなかった。

「それでね、トイレに……。あ、もちろんF1のトイレに行ったん

「ただ。お腹が痛くて頭が回らなかったの」

「うんうん、と周りも頷く。美香らしい行動に、一同は涙も止まりかけている。」

「それで、トイレにいたら物音がして、うーんってひとしきり苦しんだあとに顔を上げたら……」

「私がいたってわけ」

美香の言葉を清原が繋いだ。清原は、両手を広げて肩を竦めた。何を血迷ったのか舌までぺろりと出している。

「でも、どうして？ どうして先生は美香がF1にいるのが分かったの？」

「祥子がおずおずと聞く。にやりと頬を持ち上げると、清原が言う。『この子ね、お腹痛くて気が動転していたんでしょ。電気をね、つけたのよ。まあ、仕方ない話よね。あんな真つ暗な所じゃ怖くて仕方ない。私はちょうど教官室に忘れ物をして取りに行っていたの。そうしたら電気が点いていて、消し忘れたのかと思ったわ。だから中に入ってスイッチを触ったら、個室から音がするじゃない。こっちの心臓が止まるかと思っただわよ。』」

清原はその瞬間を思い出したのか、胸に手を当てて大きく息を吐いた。

「それで逃げようとするこの子を抑えて、まずは部室で話を聞こうとした。でも、訳の分からないことしか言わない。家に電話をしても繋がらない。だからウチで一晩休ませたの。翌日自転車を取りに行つてあげたら、バレー部が騒がしいじゃない？ 先生にお話して、相談した結果、こうなったのよ」

「電気……。それで、美香。お腹はもういいの？」

「祥子がまたおずおずと聞く。美香は、ゆっくりと頷いて、言った。」

「ごめんね。あたし申し訳なくて……。でも先生の顔を見たら逃げ出したくなって、窓から逃げようとしたら押さえられて」

美香が言つと、清原が豪快に笑った。



「だって、この子下着も履かないまま飛びだそうとするのよ？ 止めるわよ。この子が捕

まっちゃう。まあ、それで家に連れてきたの。どうしても帰らないっていうし、でもあの

まま放っておけないしね。それでも、この子は何も話さなかった」

「美香……」

みんなの視線が注目する。

「あっ……」

京子が声を上げると、みんながそこを見た。

「あたし、次の日F1の窓が開いているのを見つけたけど、あれは外からの侵入者じゃな

くて、美香が出ようとしたんだ」

京子は、気づいた途端なーんだとばかりにため息を吐いた。

「あ……」

祥子までが同じ声を上げる。

「今度は何！？」

千夏が言う。

「あたし……次の日。昨日ね、清原先生に抱きしめられたの。ちょっと体育館で落ち込んでいて。じゃあ先生はあのとき美香がどこにいるのか知っていたのね……」

清原がまた肩を竦める。

「それで……あの匂いは、美香の匂いだったんだ」

祥子は、帰り際に感じた、どこか嗅いだことのあるような懐かしいあれを思い出す。美香の香水の匂いだったのだ。本当に微量だったのだ、そこまで気づかなかった。

「あたしが気づいたのもそれ」

香織が付け足す。

「まず、なぜ保護者が呼ばれた場所に、清原先生がいるのか、不思議に思った。でも、先生はバレー部によくしてくれるし、泣いている感じだったから、それでも普通かとも思い直したの。でも、帰る

時。あたしちよつと学校で居眠りしちゃって、暗くなっていた。その時、清原先生が通ったのよ。暗かったから先生には気づかれなかった。でも、確かに美香の匂いがした。そして、自転車が美香のだったの」

「あら、あたしがやってちゃっていたのね。でも、自転車はこの子が帰るとき困るかと思っただし、早く帰りたくてね。まさか見られると思わなかったね」

清原は、周りの保護者に申し訳ないように会釈をした。

「それだけじゃありません。血痕です」

香織が言つと、千夏も反応した。

「そうだ！ あれは？ あれは何！？ 血痕があつたんでしょ！ 美香は死んじゃった……って、思つて、あたし……」

思い出して泣き始めた千夏の肩を隣からそつと祥子が撫でた。

「あれは、作り物よ。血痕なんて初めからなかったの」

「えええ！？」

全員が顔を揃えて驚く中、香織の父親だけはまっすぐと香織を見つめていた。

「先生が自転車に乗って帰ったあと、あたしは何かがおかしいと思つた。血痕を見に行つた。確かに規制線は引かれていた。でも、なにか粉っぽかったのよ。暗かったけど、近寄つてみた。そうしたら、よくみたら血じゃなかった。一見そっくりだけどね」

「なにそれ？ どうしてそんなこと」

祥子が、親たちの顔を見回した。

「家に帰って色々調べたら、ドラマや映画で使うでしょう？ 血糊。あれって案外簡単に作れるのよ。で、作ったのは、父さん。そうでしょう？」

香織の父親は、それでもじつとしていた。

「父さん。あたしを試そうとしたの？ あたし、親が呼ばれたって聞いて、昨日、学校へ行つたでしょ。その時お父さんの車を見た。家にあまり帰って来られないくらい忙しいのも知っているし、車の

中に服や食べ物があっても気にならなかった。でも、パソコンで調べて合点がいった。ううん、驚いた。だって、助手席にあった食紅や片栗粉、ココアはすべて血糊を作る材料だったから」

「ココア？ ココアで血が作れるの！？」

千夏が、今度は小さなところを突っ込む。千夏も母親に睨まれて、首を縮めた。

「美香がここにいるのは半信半疑だった。何か別の理由があるんじゃないかとも思った……。でも、あたしたちのやっていたことは無意味だったのよ。騙すつもりが、結局騙されていた」

「香織。みんな……ごめん」

美香の目から涙が溢れた。

「何を言っているの！ 美香のせいでもないよ！」

京子が言う。

「ごめんなさい！……あたしが自分のために……こんな」

若菜が一際大きな声で謝った時だった。

「誰も、悪くないんじゃない？ そして、誰もが悪いわ」

その言葉の先にいたのは、千夏の母親だった。

「お母さん？」

「千夏。昨日、電話を学校からもらった時点では、本当に何も知らなかったわ。でも、先

生も落ち着いているし、まずは学校へ来て欲しいの一点張りだった。だから、学校へ行く

前に、実はあなたに聞こうかとも思ったわ」

「あ……」

着替えを終えた時の母親の視線。あれは、そういう意図があったのだ。

「学校に行ったら、香織ちゃんのお父さんと先生に話を聞いて驚いたわよ。お母さんはあ

なたをすぐに怒ろうと思った。だって、その前夜心配したことはすべて嘘だったのよ？ こ

「うちは、子供になにかあったらどうしようと気が気ではなかったのに。生きていけないの」

に。その気持ちを、あなたはもて遊んだのよ」  
ふっと、頬を緩ませ千夏の母は続ける。

「でも、考えたらあたしとお父さんもあなたの気持ちを分かってはしていないかった。お母さんも、悪かったのよね。でも、これだけは分かってちょうだい。私たちは、あなたのことが大好きなのよ。こんなことをしてもね」

千夏が、涙を隠そうと下を向いた。

「そうね。同感よ」

祥子の母親が言う。

「私たちは、誰がこんなことを始めようと言ったのか、決めたのか、聞き出そうとはしない。ただ、怒るだけではダメだとおもったのよ」  
若菜の母親の言葉に、若菜が頷いた。これは、隠された子供からのデモ活動であり、親からの答えだったのだ。

「お前達は、分かっていなかった」

次に言葉を引き継いだのは、ヒゲだった。怒ってもいない。淡々とした口調だ。

「お前達は、俺の為にバレーをしていたのか？」

ヒゲがメンバーを見回す。誰も、頷かない。

「親の為に、受験をするのか？」

「違います……」

昨日と同じだ。祥子が小さな声で呟く。その声は、小さくとも普段の祥子の口調と思えないほどはつきりとしていた。

「お前達は、自分のために、友達を犠牲にしているのか？」

次の言葉がとどめだった。全員の目から涙が溢れる。何が大切な、それが分かった気が

した。人のためにする行動と、自分のためにする行動が間違っていた。どんなにか自分勝

手な考えだったのだろう。

「お前達がやめたいのなら、俺は県大など行けなくても構わない。喜んで受験勉強の手伝いだってするさ。それなのになんだ？ 全てを人のせいにして、鬱憤を晴らすとしたのか？」

美香が……こいつが、あんな建物で、夜中一人で震えるとは思わなかったのか？ 怖いだろうと心配してやらなかったのか？」

泣き声が大きくなる。心配はした。それでも誰も様子に見に行くことも、助けようとも

しなかった。一晩だけだから。同意の上だから。自分から名乗りを上げたことだから。ど

れも答えにはならない。

「自分勝手もいいとこだ！」

ヒゲは、今までため込んだものを吐き出すように一言大きな声を出す、その大きさに自分が驚いたように口に手を当てる。ヒゲを一撫ですると、咳払いをした。

「ごめん。ごめんね」

口々に、声が飛び交う。メンバーが美香に謝る。その中に野太い声が混じった。

「すいません。俺も、いけませんでした」

次に口を開いたのは、香織の父親だった。

「父さん……」

「香織が刑事になりたいとこの先生から聞いて、反対だった。だから、これに便乗したんだ。

香織がどういう反応を取るか」

「どうして……そんなことを」

香織の父親は、軽く咳払いをすと言った。

「俺は、お前の将来を邪魔するつもりなんじゃない。この仕事が嫌いなのではない。ただ、

お前には辛い思いをしてほしくないだけだ」

「辛い思いって何？」

「これは体力も精神も使う仕事だ。お前が、どれだけの気持ちで言っているのか知りたかった。いや、本当のところ、俺はお前まで失いたくないんだ」

「……」

父の言おうとしていることは、香織には分かった。母親を亡くしたことを言っているの

だ。香織が小さい頃、母親は車のひき逃げの被害者になっていた。それを隣で見ていた香織は、まだその記憶を忘れることは出来ない。だからと言って、父親の言うように、大人しく家にいればいいとは思えない。香織がやりたいのは、母のような被害者を亡くし、父のような刑事になることなのだ。それを、伝えたかった。そう、香織も逃げていたのだ。反対されると決めつけて、話し合うことから逃げていた。

「父さん。あたしは、父さんのような刑事になりたい。危ないことがあるのは生きていれば同じでしょう？ あたしは大丈夫だから。何かあれば父さんにもこれからはちゃんと話すよ」

香織の震える言葉に、父親は何も言わなかった。微かに頷くと、居間を静かに出ていった。しかし、その後ろ姿はどこか悲しげだった。香織は、千夏と視線を合わせると、泣き顔のまま小さく肩を竦めた。

「千夏。お母さんもごめんね。お父さんともよく話し合おうね」

「え？」

千夏の母親も、神妙な顔をした。

「祥子も、ごめんね。お母さんも出来る限りのことを頑張るから。下の子にもよく言う」

「お母さん……」

それぞれのメンバーが、それぞれの親と、話し始めた。香織も、どこか晴れ晴れとした

気持ちだった。

「ねえ、あんななんの悩み？ 家に不満でもあるの？」

京子の親が、京子に聞く。京子の腹は、今も小さな鳴き声を上げている。京子の親は、

娘の悩みがさっぱり分からない、という顔をしている。

「あたしは別に。ちよつと毎日イライラしていただけ」

京子は、わざと冷たく言った。

「お前達。これからは意志を持つんだ。こういう形ではない。自分が正しいと思うのは、

間違っていることではない。行動することも、必要だ。しかし、なにが自分のため、何

がひとのためになっているか、それを考えてから行動するのだ」

ヒゲは、それだけ言うと、リビングを後にした。

「さあ！ それじゃあ、せっかくだから、お昼、食べていってくださいな。お母様方もね」

清原が両手を打つ。

「ごめんなさい」

若菜が、戦陣を切って頭を下げる。

「ごめんなさい」

美香が、そして祥子と京子が続いた。

「ごめんなさい。ありがとう」

香織が言う。御礼は、父親に言ったものだ。聞こえてはいないだろうが、言いたかったのだ。

「美香ー」

その時だった。玄関で、足音がしたかと思うと、居間のドアが開けられた。ここに唯一

いなかった人物が現れたのだ。

「お父さん、お母さん」

美香は、気づいたら彼女の胸の中にいた。

「ずっと連絡がつかなかったんだけど。今朝、やっと取れたのよ」  
清原が付け足すように言う。

「美香。ごめんなさい」

美香は、母親の腕をぐっと握った。彼女の待っていたものは、これだった。温かさが体

中に広がる。太陽の日差しよりも、エアコンの風よりもそれは気持ちよかった。

「お母さん。どこに行っていたの？」

「美香。美香が夜帰ってこなかった日、お母さん、メモを残して出かけていたの」

「俺の母さん。お前のおばあちゃんが倒れてしまって。母さんが来てくれたんだよ」

父親が、抱き合う二人の背中を同時に撫でながら言う。

「休みに入るところだったし、メモだけ残したの。だから、家の電話には出られなくて。」

あ、おばあちゃんは大丈夫。それで家に電話しても繋がらなくて。

携帯に電話したら、先

生が出られて」

若菜は、昨日鞆をまるごとヒゲに渡していた。だから、母親は家の電話にでなかったのだ。

「ごめんな。こんなにお前を傷つけていたなんて」

父親も、涙混じりの声で謝った。思わぬ産物も、あったようだ。それをメンバーが見守

っていた。このデモは、間違っただけではなかったのだ。京子は、それを見ていたが、もう一度腹の虫がなった。

「ごめん。トイレ」

そう言って、一人その場から抜けた。京子の親は呆れた顔でそれを見送り、周りに会釈している。しかし、京子にも成し遂げることがあったのだ。



「先生」

玄関を出ると、そこにはタバコをふかしながら佇むヒゲの姿があった。それを後ろから

声を掛ける。ヒゲは、誰がいるのか分かっているのか振り向かない。

「先生。気づいているかも知れないけど、あたし、先生のことが、好きです」

「……」

「この作戦に参加したのも、もし誰かが危ない目にあつたら、あたしの心配もしてくれる

んじゃないかと思ったの。今思うと、馬鹿みたいだね」

「分かっているじゃないか」

京子は見えないのをいいことに、その背中に舌を出した。

「分かっています。でも、それを分かっている、おさえられなかった。あたしが、いくら行動を起こしても、先生は気づきながらも拒否していたでしょう？」

「……」

「分かっていました。でも、これで踏ん切りがつかしました。ありがとうございました。これから県大まで、頑張ります。癖も直つたし……」

「……」

「それじゃあ……」

京子が家の中に入ろうとした時だった。

「分からない問題は、いつでも聞きに來い」

京子は、返事をせずに、家に入った。これまで以上に涙が止まらない。でも、なぜだか晴れやかな気分だった。大丈夫、頑張れる。そんな気がした。居間に戻ると、そこには昼食の準備が進められていた。

「ほらー。あんたが一番食べるんだから、早く手伝いなさいー」

台所の奥から、清原の声が響く。笑みが漏れる。そう、ここに今、ちゃんと居場所はあるのだ。それだけで、幸せだと思えた。

「はーい」

京子は、右手を挙げて答えた。こうして、戦いは無事、幕を下ろしたのだった。

## 10 エピローグ

月日は過ぎ去り、六人は今日、高校を卒業する。一年前と同じく、季節はいつの間にか変わっていた。桜の木は今年も見事に花を付け、卒業生の門出を祝う。進路指導室の前の植木は、今年も部屋を暗くしたが、例年に勝る合格率が教師陣を沸かせていた。それでも阿部が不意に校門の陰から飛び出してくることは変わらない。でっぴりとした腹を揺らし、首元の蝶ネクタイを自慢げに撫でる。結局、彼に進学率は関係なかったらしい。

「香織ー。こんな時までトスやらないでよー」

卒業式が全て終了すると、バレー部員は体育館に集められた。香織はこんな時も、ボールをトスしないと気が済まないのだ。

「だって受験勉強ばかりやっていて、息抜き程度でしかやってないから鈍っちゃって」

まだ名残惜しそうにボールを見つめる香織から、千夏がボールを取り上げる。体育館でヒゲに呼び出された六人は、制服の胸元に花を飾っている。

「お前達は、最後まで俺に迷惑をかけたいのか？」

なかなか並ばないメンバーにヒゲの言葉は冷たくても、その目は笑っている。

「先生ありがとうございます」

美香が頭を下げる。

「ありがとうございます！」

全員が声を揃える。この体育館もう来なくなる。新しいところへ行くはずなのに、心が浮き立つよりも、うすら寂しい。ここで汗を掻いていた日には、二度と戻れないのだ。

「祥子、国立決まってよかったねー」

京子が、祥子の肩を叩いて言った。

「何を言っているの。京子だって、専門に通いながらモデル業まっ

しぐらでしょ？　これから、あんまりチョコレート食べるの控えなよー？　もうお肌も曲がり角なんだし」

香織が言う。京子が、あの戦いの日以来、資料室に通うことはなかった。

「でも、大きくて黒いのにには変わらないよねー」

「あ！　千夏だって、小さくて黒いのに変わらないでしょ！」

「はいはい！　最後までそんなことやらないの！」

美香が、二人のじゃれ合いを止めた。美香の香水は相変わらずマ―キングとして使用されているようだったが、もう派手なパーカーを着ることはなかった。大学の合格発表へは家族三人で行ったという。

「千夏もさ、あんなに嫌がっていたのに、結局お兄ちゃんと同じ大学へ行つて、同じ家に下宿するなんて、物好きよねー」

香織が言つと、千夏は京子に腕を絡ませながら頬を膨らませた。

「だってー。あそこの文学部の教授、面白そうなのだもの。まあ、寺山修司の言葉にすれば『明日何が起こるかかわかってしまったら、明日まで生きる楽しみがなくなるもの』って感じだよね。ね？」

そう言つてメンバーを見渡す千夏に、周りはクスクスと笑った。

香織が笑顔を浮かべて聞いた。

「確かにそうかもね。それより千夏。あんた覚えている？　去年の春に心配していたこと」

千夏は首を傾げた。結局は、悩みなど過ぎてしまえば忘れてしまふのだ。のど元を過ぎれば熱くはないのである。

「もう……。津波が向こうからやって来るとかおかしいこと、言っていたじゃない。今年はゆっくり辛いことが起こるって。やっぱ、一年過ぎるのは遅かった？」

千夏は、思い出したように両手を打つと、急に真面目な顔になって肩を竦めた。

「うっん。意外と早かったよ」

その答えに、今度はメンバーが声を出して笑う。

「荒山若菜」

突如ヒゲが呼んだ声に、若菜は笑っていた頬を引き締めた。

「はい」

「お前が、バレー推薦で大学へ行きたいと言った時、驚きながらも嬉しかった」

京子が、からかうように若菜の腕を肘で小突く。それを、ヒゲが目で咎めると、京子は首を縮めながらあらぬ方へ視線を変えた。

「それでも、推薦を蹴り、結局は自力で試験を受けたこと。そして、強豪校に合格したこと、それをさらに誇りに思う」

メンバーが大きく頷き、拍手が起こる。その中を、若菜は照れくさそうに首を傾げた。

「お前達のことを、俺は特に一生忘れないだろう。……なんといつても困った奴が多かった。あの戦いは……戦いだろう？ あれは、決して無駄では無かったと思う。むしろ、今だから言うが、よくぞやってくれた。この先、辛いことはたくさんある。楽しいことのほうが少ないはずだ。それでも、きつとお前達なら強く生きていけるだろう。忘れるな。お前達は、戦えるんだ。泣きたい時、苦しいときは思い出すんだ。この三年間に培った努力を。負けて悔しかった試合、勝った時の喜びの気持ち、その一瞬すべてが力になっているはずだ。隣にいてくれたメンバーを、何が大事なのかを。何かあったら、ここに帰ってこい。俺が話を聞いてやるから。……あと数年は転任もないはずだ」

髭の話で、次第に大きくなったすすり泣きも、最後の一言で笑いに変わった。

「先生。ちゃんと居てくださいよねー」

「もー。空気台無しじゃん」

「まあ、これがバレー部だよ」

口々に、涙を隠すように笑い合う。それが体育館に響き渡る、最後のチャイムの音と重なった。それが鳴り終わった時、一瞬の沈黙が落ちる。やけに静かだった。

「香織っ！」

この学校では珍しい、若い男の声に一齐に視線がドアに集中した。そこには、全員の視線を浴びて、一瞬たじろぐ男がいた。

「あー！ 香織、達也くんだよ」

祥子が言う。その顔はとてもさっぱりとしていた。

「ああー。いいよなー。大学行く前から、あんなにかっこいい彼氏がいてー」

千夏がまたもや絡み始める。

「なんだっけ。刑事だろうと関係ない、俺が守ってやる。だっけ？」  
千夏の顔の前で、今度は京子が人差し指を左右にちよろちよると動かして言った。

「チツチツチ。違うよ。一生側にいてほしい。だよね？」

「はは。二人とも違うよ。俺の大学の法学部へ来い。でしょ？」

美香が京子の後を引き継いだ時、香織が大きく溜め息を吐いた。

「もう、やめてよ。どれも違うし」

そう言っ、達也の方を振り返る。

「校門で待っていてっていったでしょー！ ちょっと向こう行っ  
！」

香織の言葉を、まるで気にしていない様子の達也は、軽く手を拳げると姿を消してしまった。

「あーあ。香織、冷たあい。」

祥子が、少しだけ意地悪そうに言った。香織は、他人事のようにツンと澄ましている。

「でも、大学へ来いって言われて、本当にあの難関の法学部へ入っちゃうんだもんねー。さすが香織」

「だって、あそこならお父さんもいいって言ったんだって。数年後には香織本当に刑事かもねー。そうしたら、拳銃一回持たせてね」

また騒ぎ出した京子と千夏を、脇で若菜は呆れたように眺めている。香織は、反抗するように千夏に取られたボールを奪い返した。

「香織！ もうっ。あ、そうだ。この後、達也君も入れて何か食べ

に行こうよ！」

ええ！ と香織の驚く傍ら、賛成の声が嬉々として上がる。それをずっと聞いていた

ヒゲが、体育館に響き渡る声で叫んだ。

「お前達！」

それは怒鳴り声にも近かった。いつも試合の時に響いていたその声は、すでに懐かしい。空気が一瞬で張りつめ、背筋を伸ばして全員が返事を返す。

「はいっ！」

「高校生活に、悔いはないか！」

ヒゲを放ってふざけ合っていたのを怒られると思っていたメンバーは、その言葉に一瞬顔を見合わせた後、頬を緩ませた。

「はいっ！！」

全員が叫ぶように答える。この鮮やかな日々は宝だろう。二度と手に入らない。永遠の戦場だ。ヒゲが、満足そうに頷くと同じ声で言った。

「よーし！ 解散！ ……行けっ！」

ヒゲの一声で、六人は手を繋ぐ。そして、桜の舞う世界へとかるやかに走り出していった。

【了】

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5494p/>

---

彼女たちの一步

2010年12月27日03時42分発行